白き流星のレコンギスタ

紅乃 晴@小説アカ

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
死んだと思ったらＲ．Ｃ（リギルド・センチュリー）な世界でした。
白き流星のレコンギスタが始まる！
見たくなくても見ろ!!

新作のオリジナルガンダム小説も連載しています。
こちらもよろしく！
機動戦士ガンダム　青のプロヴィンギア
ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｏｒｇ／ｎｏｖｅｌ／２６２４２３／

目次

登場人物紹介 ―――― 1
機体紹介 ―――― 5
プロローグ，白き流星、R．Cに立つ 9
第一話　白きローンズーの飛翔 ―― 20
第二話　タブーと戦争 ―――― 32
第三話　海と空と混乱と ―――― 49
第四話　カットシー、目の前の現実と想像力 ―――― 60
第五話　エルフ・ブルックの脅威（1） 79
第六話　エルフ・ブルックの脅威（2） 93
第七話　エルフ・ブルックの脅威（3） 110
第八話　乱舞、Gセルフのコア・ファイター！（1） ―――― 125
第九話　乱舞、Gセルフのコア・ファイター！（2） ―――― 138
第十話　引き金の重さを知る者よ 150
第十一話　強敵デレンセンとアメリアの流星 ―――― 171
第十二話　強襲、マスク部隊（1） 187

第十三話　強襲、マスク部隊（2）　203
第十三話　強襲、マスク部隊（3）　216
第十四話　3勢力、閑話休題　――　232
第十五話　メガファウナ、南へ　―　244
第十六話　ビグローバーへの道　―　258
第十七話　出自ではなく生き様を　269
第十八話　ウーシァ、強襲　――　284

登場人物紹介

ラリー・レイレナード
所属：アメリア軍
階級：大尉
転生した主人公であり、カリブ海洋研究所が製造した機体、ローンズーを駆るアメリア軍のエースパイロット。
その過去は数奇なもので、数々の激戦を生き抜いてきた結果、「世界を変える、救うよりも、身近な人の行く先を少しでもマシにするために戦う」という信条を持つようになる。
ガンダムＳＥＥＤの世界を生き抜き、息を引きとったのだが、気がつけば愛機である『ホワイトグリント』共もに軌道上から落下しており、そのままアメリアとゴンドワンの大陸間戦争に巻き込まれた。
現在はアメリア所属のパイロットとして、メガファウナを旗艦とした機密諜報部隊である

「海賊部隊」のＭＳ部隊長を任されている。

レイカ・マツナガ
所属：キャピタル・アーミィ
階級：少尉

ラリーと同じく宇宙から降りてきた謎の女性パイロット。落下の衝撃のためか、彼女は大きくの記憶を失っていたが、パイロットとしての素質が高く、キャピタル・ガードのパイロットとして保護されることとなった。

宇宙から落ちてきた際にレイカが乗っていた機体はユニバーサル・スタンダード規格から大きく逸脱した機体であり、その制御システムの頭文字は「ガンダム」となっている。

身柄はクンパ・ルシータ大佐預かりとなっているが、それは善意ではなく、大佐自身の野望の駒として使われることとなる。

以下、ネタバレ

登場作品

機動戦士ガンダム～白い惑星の悲劇～

彼女の過去の経歴は、ジオン公国軍キシリア・ザビ直属の特務部隊〝レッドショルダー隊〟に所属していたザクのパイロット。

しかしサイド７の地球連邦軍秘密基地の調査に向かった際、連邦の黒いモビルスーツ〝プロトタイプ・ガンダム〟に片想いをしていた上官と同僚を殺される。

自身もザクを撃破されるも、機密情報を積んでいたランチを強奪。

執念のみで月のグラナダ基地に帰還する。（追撃されなかったのはランチの存在を知っていた連邦軍人が死亡していた為）

Ｖ作戦の資料を入手したキシリアは地上から送られてきたモビルスーツ、イフリートをガンダムのデータと、試作サイコミュ、更にはＥＸＡＭシステムまで積んで改造しまくった〝イフリート・ダン〟を開発。

ガンダムへの復讐の為だけに生きると誓ったレイカはマスクを着けて〝サレナ・ヴァーン〟を名乗るようになる。

初めは機体性能でプロトタイプ・ガンダムを圧倒し、ジャブロー攻防戦ではかのアムロ・レイの駆るガンダムと一対二で互角以上に戦う化け物っぷりを見せるが、機体性能に頼りすぎた直線的な戦いはやがてニュータイプへと覚醒を始めたアムロ達に対応出

来なくなり、遂にテキサスコロニーで一度敗北。
そこから追加装備を得て再度戦いに挑むが、サイコミュの影響を受けすぎて〝愛する者を奪った憎むべきガンダム〟が〝愛するガンダム〟へと認識が変化してしまう。暴走した彼女は二体のガンダムを圧倒するが、ララァ・スンに危険と察知され、更にシャア・アズナブルすら共闘する乱戦に発展。最後は愛する〝ダーリン〟によって撃墜される。
のだが、その時不思議な事が起こり、サレナ・ヴァーンとしての精神のほとんどはコズミック・イラ世界のある少女に乗り移ってしまう。
コズミック・イラではラリー・レイレナードと激闘を繰り広げた末に行方不明となったが、彼の縁を辿った結果なのか、ラリーと同じくリギルド・センチュリーの世界へと紛れ込むイレギュラーとなった。

機体紹介

ＭＳＡＭ―ＹＭ０４Ｘ、ローンズー

▼概要

海賊部隊の保有するモビルスーツであり、同部隊のＭＳパイロット、ラリー・レイレナードの専用機。

モンテーロと同型の第三世代モビルスーツ。

「モビルスーツによる単独長距離侵攻」をコンセプトにしたモンテーロとは違い、「モビルスーツによる巴戦（ドッグファイト）を想定した高機動」をコンセプトとしている。

長距離移動性を捨て、機動力を追求し開発された本機は局地戦での高機動戦術を主体にしており、機体各所には大小合わせて計１０基ものスラスターが増設されている。

肩部に備わっていた大型主翼はフレキシブルスラスターへと置き換わり、背面部のスラスターも増設されているが、ニュークリアス構造のコックピットブロックなど、モンテーロやグリモアとある程度の部品共通が成されている。

だが、その実情はモンテーロと同じくほぼワンオフに近いため整備性は低く、修理を

行うにも苦労が伴う。
両肩に備わる高出力スラスターは出力方向を任意で変更できるフレキシブルバインダーと接続されており、長時間飛行を犠牲にしながらも空戦でのレスポンスが高く、他MSにはない高機動性を獲得している。
通常時はパイロットの動きに合わせたオートマチック操作で制御されているが、任意でマニュアル操作に変更できる。
だが、推力方向の指定をしながらの空戦は困難であり、基本的にオートマチック操作が推奨される。
また、大型シールド翼に備わっていたマウントラッチは廃止され、ビーム・ジャベリン等は腰背部のマウントラッチに懸架される。
ビーム・ジャベリンやビーム・ライフル装備はモンテーロと共通である。

▼武装
・頭部バルカン砲／胸部バルカン砲
モンテーロ同様に頭部に配された炸薬式機関砲。　胸部にも大口径のものが装備される。
・ビーム・ライフル

非使用時にはリアアーマーにマウント可能。

・ワイヤー・フック

左腕に内蔵されているアンカー。　電流を流す事で敵の電子機器へダメージを与える。

・ミサイル

腰部のサイドアーマーに備わる誘導弾。

ミノフスキー粒子散布下に於ける命中率は高く無いが、緊急時にはビームを防ぐ為の弾幕としても使用される。

・ビーム・ジャベリン

その名の通り、ビームを発生させる槍であり、これによってビーム・サーベルよりも長いリーチの槍術を繰り出す事が出来る。

対艦攻撃用の特攻兵装であり、ジャベリンの名の通り槍投げの要領で投擲する事で真価を発揮する。

その性質上使い捨ての武装という意味合いが強いが、ビーム・サーベルとしての機能を備え、内蔵されたビーム・ワイヤーによるトリッキーな攻撃も可能となっており、更に回転させれば盾代わりになるなど、運用の幅は広い。

非使用時には上下に分割し腰背部に裏面に懸架されるが、モンテーロと違って携行数

は限られる。

プロローグ，白き流星、R・Cに立つ

悔いのない人生かと聞かれたら、自分なりに良くできた人生だったと思う。
気がつけば放り込まれた戦いの世界ではあったが、戦友もできたし、全てを教えることができた弟子もいた。
子にも恵まれたし、世界を少しは良くできる方向に向けることもできたと思う。大きな大戦を2度経験した人類は、異種族間の憎しみを宇宙に向けて、新たなるフロンティアに向けた大いなる旅路へと踏み出してゆく。
広大な冒険へと踏み出してゆく若い世代の背中を見つめながら、俺はその人生に幕を下ろした。
悔いはない。懸命に生き抜いた人生だった。多くの助けられなかった命はあったが、それに似合う何かを得れたようにも思えた。
だから、俺はあの世界で生き抜くことができて良かったと心底思って死ねたんだ。
なのに。
どうして。

何故。

俺は今、コクピットに座って大気圏外スレスレから地面に落ちて…

「どぉなってるんだぁ!?」

しばらく乗っていなかったはずのコクピットに座っている。それだけでも混乱の極みだと言うのに、声からして自分の肉体が死んだ時とは違うものだと分かった。

感覚的に全盛期に近い。しかもコクピットの何もかもが妙に馴染む。

このコクピットレイアウトはよく覚えている。

ＺＧＭＦ―Ｓ０７。

通称、ホワイトグリント。

パイロットである、ラリー・レイレナードが第二次ヤキンドゥーエ戦で搭乗したＭＳだ。

まぁそれに今乗ってるのも本人なんですけどね!!
まったく状況が理解できないまま、機体は引力に引かれて地球へと降下してゆく。
なんだ!?一体何がどうなってるんだ!?俺は死んだはずなのに、なんでまたこうやってMSに…え?これが死後の世界ってやつ?死んだ奴らがいく新たなるフロンティアってやつなの?
そんでもって死んでもMSに乗って戦えとか冗談じゃないんですけど!?
答えの出ない想像力が爆発し続けている間にも、機体は大気の薄い層から雲の真上あたりまで落下していた。
すると、丸い地球の地平線の彼方から影が見えた。
それはどんどん近づいてきて、次第に影は3機のMSからなる編隊だということがわかった。
『こちら、アメリア軍のカーヒル・セイント大尉だ。所属不明機に告げる。武装を解除し、当方へ投降せよ』
アメリア…軍?
聞いたこともない軍の名前に、俺はただ状況が飲み込めずにいた。機体はすぐそばま

で近づいてきている。そのシルエットは俺が知るどのＭＳの形とも違っていた。

『接触回線で聞こえているな？パイロット、乗っているのか？生きているのか？』

ガシン、とずんぐりむっくりな機体の手が装甲に覆われたホワイトグリントのフレームに触れる。接触回線越しで聞いた声に、俺はひとまず答えることにした。

「こちら、オーブ軍所属のホワイトグリントだ。貴官のアメリア軍というのは聞き覚えはないが、どこの所属だ？」

常識の範囲内で問いかけた内容だったが、相手からの反応はない。しばらくしてから接触回線越しで伝えられた内容は、信じられないものだった。

『オーブ軍などはこの世界に存在しない。貴様、ゴンドワンの極秘部隊か？機体の識別コードも存在しないものだ』

オーブが、存在しない？

いやいや、そんなバカな話があってたまるか。相手が変にふざけているだけだろう。こちらとしてもふざけた状況でしかないんだけれども!あと気になることもあるんで問い合わせてもいいかな?

「失礼だが、今はC．Eの何年だ?」

ごく普通の質問をしたのだが、それもまた俺の期待を大きく裏切ることになった。

『コズミック・イラなど年号に存在しない。今はR．C。リギルド・センチュリーだ』

その瞬間、俺の中にあった常識と普通は粉々に吹き飛ばされてしまったのだった。

白き流星。
ガンダム
Gのレコンギスタ。

▼

ーーー数年後。

Ｒ．Ｃ．１０１４年。

西暦後、人類が滅亡しかけた宇宙世紀（Ｕ．Ｃ）が終焉し１０００年という月日が過ぎた。

生き残った人々は「リギルド・センチュリー（Ｒ．Ｃ．）」という新たな世紀を迎え、アムテックのタブー（技術進歩を自ら制限）をかけることで、再び繁栄を始めていた。

前世紀の遺物である軌道エレベータ。

慎重に復元・維持された通称、キャピタル・タワーは、宇宙から供給される唯一のエネルギー源『フォトン・バッテリー』を地球に搬入する唯一の経路として神聖視されていた。

かつては南米と呼ばれた大陸にある地球側基地とその周辺『キャピタル・テリトリィ』はまさに「聖地」であり、世界的宗教「スコード教」は宇宙からの恵みへの感謝と、技術の発展・進歩を禁じているからこそ現在の平和と繁栄があると説き、人々に浸透していた。

一方では、かつて「北米」と呼ばれたアメリア大陸の国家「アメリア」と、かつての欧州地域の国家「ゴンドワン」が、あたかも旧世紀以前のような大陸間戦争を始めていた。

彼等はより強力な武装を求め、禁忌である封印された宇宙世紀時代の技術を求めた。

結果、どこからかもたらされた「ヘルメスの薔薇の設計図」と呼ばれる技術データベースから旧世紀の技術を採掘・復元し始めてしまう。

ゴンドワンに先んじて、アメリアはいち早く宇宙戦艦を試作建造するが、国際会議の反発に遭い解体廃棄したと発表した。

だが密かに諜報独立部隊である「海賊部隊」に与えて運用を開始し、タワーからフォトン・バッテリーを強奪するなどの作戦を行わせ、宇宙技術の運用ノウハウを蓄積する。

キャピタル側も、従来の自衛組織キャピタル・ガードによる警備体制や装備見直しを迫られ、対外対抗組織「キャピタル・アーミィ」設立や対抗技術の導入を開始した。

また、アメリアは天体観測によって月周辺の小天体の活発化を知り、「宇宙からの脅

威」が来襲する可能性について憂慮しはじめていたのだった。

▼

キャピタル・テリトリィ。

宇宙と地球を結ぶ軌道エレベータの出発点があるこの場所は、フォトン・バッテリーを運搬するスコード教からすればまさに聖域と言えた。

そこに小隊規模で侵入しろなんていう命令を受けたのだから、司令部は正気かと疑うことになっても無理はなかった。

「天才クリム・ニックがタダをこねてくれなくて助かりましたよ」

先行する俺の機体に無線通信をしてきたのは、グリモアに乗るルアンだ。航続距離が長くないグリモアや、俺が乗る機体の補助をするために飛んでいるフライスコップには、戦友のオリバーが乗っている。

「天才でも、できることとできないことがあるのさ」
「隊長からすれば、天才でも子供ですものね」

クリムの操縦センスは認めるが、まだまだ判断力が短絡的すぎる。ゴンドワンとの戦争で戦うことができるからと言って、子供が天才などになれるものかよ。
そう言い捨てると違いないですね、とルアンとオリバーも笑った。
宇宙に伸びるへその緒もだいぶ近くなってきた。ここからは戦闘空域となる。

「よし。各機、レーザー通信に切り替え。聴こえるな?ここはすでにキャピタルの領域、地球と宇宙を結ぶへその緒の真下だ。それがどう言う意味になるか、わかってるな?カーヒル!」
「はい、承知してます」

フライスコップの下に捕まる形で同行するグリモアは、アメリアとゴンドワンの大陸間戦争時代からの戦友であり、俺が指揮する部隊の副隊長であるカーヒル大尉だ。
ただし、彼がこの任務に参加しているのは俺の副官としてではなく、一人の男の誇示を示すためという意味合いの方が強い気がする。なにせ、未来の花嫁が囚われの身なの

だから。
　キャピタルタワーの地上発進基地でもあるビクローバーから花火が上がっているのが見える。どうも何らかの式典の最中だろう。好都合だ。

「目的はアイーダ・スルガン、およびGセルフの奪還だ。Gセルフが奪還困難の場合はアイーダ姫の救出が最優先だ。カーヒル、間違ってもライフルを使うなよ？お前の役目は姫様の救護と基地までの護送なのだからな！」
「了解、隊長もお気をつけて！」

　ルワンの声に答えると同時に、俺はフライスコップから飛び立つ。
　地上戦と宙域戦に特化したグリモアには空中戦は酷だ。故に、俺は別の機体に乗ってやってきている。
　天才が乗る青いモンテーロと同型機種で、背中ら両方に備わる大型可変翼を捨てて、代わりに二基のスラスターを備えた高機動機体「ローンズー」。

「制空権を先に取るぞ！」

白と灰で塗装された機体はふわりと浮かび上がると、特に警戒せずに突っ立っているキャピタルの監視ＭＳへと攻撃を開始した。

第一話　白きローンズーの飛翔

何故、俺がよりにもよってアメリアの海賊部隊にいるかだって？

理由は単純で、俺が空から落ちてきたその場所がアメリアとゴンドワンが空中戦を繰り広げている戦場の只中だったからだ。

何故か俺と共にこのリギルド・センチュリーの世界へと落ちてきた機体「ホワイトグリント」の性能を目の当たりにしたカーヒル率いるアメリアの軍によって、何も知らない俺は保護される運びとなった。

島のカリブ研究所へと運び込まれた機体と、俺は連日連夜の尋問。状況に流されるまま、カーヒルや他のアメリア兵を守ったこともあって酷い尋問などは受けることはなかったが、俺が生きていたコズミック・イラの世界と、この世界は随分と違うことがわかった。

最初はカーヒルや、カリブ研究所の面々も眉唾物の話だと笑い飛ばしていたが、ホワイトグリントの解析が進むにつれ、その笑いは起きなくなっていった。

国際規格、ユニバーサルスタンダードが基本の技術体系とまったく異なるシステムで作り上げられた機体。日にちが経つに連れて、システムが理解できない領域に差し掛かってきたところで、ようやく俺の立ち位置が決まった。

どうやら、俺は異世界へとやってきてしまったらしい。またか、とも思ってなんかない。ないったらない。

その後、アメリア軍のトップであるグシオン総監の計らいと、素性や機体のデータは隠蔽され、アメリア軍の大尉としての国籍と立場を貰うこととなった。

アメリアとゴンドワンの戦争がこう着状態となった頃、アメリアが最初に建造し、国際会議の反発に遭い解体廃棄したと発表された宇宙戦艦「メガファウナ」を母艦とした機密諜報部隊、通称海賊部隊が発足。

俺は大陸間戦争の功績もあり、メガファウナのＭＳ部隊の隊長として部隊に配属されることとなった。

そして、配属された数日後。

軍のトップ、グシオン・スルガン総監の一人娘であるアイーダ・スルガンは、俺と同じように宇宙から落ちてきた機体「Ｇセルフ」に乗って海賊のようにキャピタルのクラウンを襲撃した際に、キャピタル・ガードによって囚われの身となってしまったのだった。

▼

『海賊部隊が姫を助けにきたのかぁ!?こちらは式典の真っ只中なんだぞ!!』

上がってきたのは近日発足されたばかりのキャピタル・アーミィ主力兵器であるMS、カットシーだった。盾とビームライフルを構えた敵が真っ直ぐに、制空権を取ろうとするこちらへと仕掛けてくる。

「式典中という警備が手薄になるタイミングこそ!!」

『アメリアのガラクタがぁ!』

足元ではキャピタル側の何らかの式典の真っ最中だ。ビームライフルなどの遠距離武器は使用できない。そう思った矢先、目の前のカットシーがビームを放った。真下に人がいる空中でだ。

「正気か!?式典には一般人もいるんだろうがぁ!!」

咄嗟に手首のモーター負荷を解除して、引き抜いたビームサーベルを高速回転させる。即席のビームシールドであるが、これが意外と取り回しが良いのだ。

ビームを切り刻むように弾き飛ばしてから、この機体、ローンズーの腰に懸架されてる近接投擲武器、ジャベリンをカットシー目掛けてぶん投げる。

狙いは外れず、ジャベリンはカットシーの出力を担うバックパックへと深く突き刺さった。

『ノズルを狙われた!?』

狼狽えたな!?

ビームサーベルを下げたまま空中で姿勢を崩したカットシーの背後へと着地してから、ジャベリンを引き抜くと同時に敵を海目掛けて蹴飛ばした。

「人が空を飛ぼうとするからそうなんだろう!?カーヒル大尉は!そこっ!!」

追加で飛んできたカットシーの頭部を再びジャベリンで貫く。火花を散らした機体は制御を失って浜辺へゆっくりと墜落していった。

空中戦を制している眼下。そこにはカーヒルのグリモアが博物館の中へと足を踏み入れていた。

「これは、旧時代のアンティーク…Gセルフ、見つけた！アイーダ様！」

防腐処理された旧世紀のMSが飾られている建物の置く。MS搬入出用ドッグだったそこからは、今まさにGセルフが運び出されようとしていた。

「グリモアが来たの!?」

『ベルリー！』

『わかってます、ケルベス教官！』

カーヒルのグリモアに反応したGセルフが、大気圏内用のバックパックを吹かして飛び上がった。

「姫様が乗っているのですか!?」
『こんなところで死ぬなんて御免ですよ!?』

あのGセルフは、なんらかのプロテクトが掛かっていて天才のクリムやカーヒルにも動かすことはできなかった。その場にいたアイーダを除いて。と、なればあの機体が動いている以上、操縦しているのは救出対象であるアイーダの可能性が高い。
あるいは、キャピタルの技術によって掛けられていたプロテクトが外されたのか。
その思考が過った瞬間、グリモアのコクピットにロックアラートが鳴り響く。
Gセルフに狙われているだと!?
その瞬間、カーヒルの嫌な予感が確信に変わった。あのGセルフは確実にキャピタル側に奪取されているのだと。

「ならば、Gセルフは奪還させて貰う!」

まだ扱いに慣れていないのか。フラつくGセルフの間合いに入ったカーヒルのグリモアは、ライフルは使わずに殴打でGセルフの動きを封じようと試みた。

その拳を受けるシールドの裏に、救い出すべき相手がいるとも知らずに。

「カーヒル!!」

悲鳴を上げながらカーヒルの名を呼ぶアイーダの姿を見たベルリは、殴り続けてくるグリモアに怒りに似た感情をぶつけた。

『仲間ごと殴り殺すのか!?』

シールドを捻るようにこじ開け、グリモアの拳を受け流したGセルフ。その隙に構えられたビームライフルの銃口が接射撃の状態でグリモアのコクピットに突きつけられた。

『上え!?』

頭上からの接近警報がコクピット内に響く。ベルリが反応する間もなく、頭上から現れた影はカーヒルのコクピットに突きつけれていたビームライフルを踏み潰して着地

した。
がごん，と降りてきたＭＳは構えたビームライフルの銃口を開けられたＧセルフのコクピットへと突きつける。
「接触回線で聴こえるな？Ｇセルフのパイロット！アイーダ様ならやめてもらう！」
真っ白な機体だ。それを目にしたベルリが最初に思った感想だった。
『自分はベルリ・ゼナムです！』
「アイーダ様じゃない？パイロット、姫様はいるか？」
『ア、アイーダさん…』
「…その声はレイレナード隊長ですか？」
おずおず、といったふうに声が聞こえる。するとシールドの裏側から肌着姿のアイーダがひどい顔色でこちらに姿を見せた。
「姫様、ご無事で。遅くなりましたがお迎えに上がりました」

「あ、ありがとうございます」

随分と疲れている様子だ。俺の後ろにいるカーヒルの顔が青くなっていたが、その時にそんな気配りなどできるわけがなかった。

『おい！ベルリ！なんとかならんのか!?』

『む、無理ですよ！』

ラリーのローンズーへ接舷しようとする船から、キャピタル・ガードの人間とベルリがやり取りをしている。どうやら、アイーダしか操縦できないＭＳに、キャピタルの若いパイロットが乗り込んで操縦しているようだ。

ラリーが降りたことにより、空には数機のカットシーが姿を見せていた。なんとか振り切って離脱はできそうだが、なるべく被害は出したくない。

仕方ない、と俺は高域マイクをオンにしたままキャピタルの人間たちへ言葉を放った。

《キャピタルの兵よ！武器を下げろ！この機体とパイロットのベルリ・ゼナム！そして

船に乗っている彼女らは人質になってもらう！》
『なんだって!?』
《抵抗はやめよ！やめなければ人質の保証はできない！》

見せつけるように、俺はGセルフのコクピットへビームライフルを向けた。アイーダ姫はカーヒルに保護して貰えばいい。最悪、Gセルフのコクピットが吹き飛んでも機体は回収できるはずだ。

『好き勝手に言っちゃって……！』
「やめておけ、ベルリ・ゼナム。君は兵士ではないんだろう？」

抵抗を試みるベルリに、カーヒルが落ち着いた声で語りかけた。

『それでもキャピタル・ガードの候補生ですよ、僕は！』
「なら命を大事にするのを覚えろ。君たちはこちらの人質となったのだ。ここから君だけをビームの光で焼き殺すのも造作もないことなんだからな」
『そんな勝手な理屈で！』

それでも抵抗しようとするベルリの顔を耐えきれなくなったアイーダが引っ叩いた。

「姫様!?」

「彼は私を助けてくれました。なら、彼を保護するのも私の役目です。いいですね?」

アイーダ様がそういうならば、そう言って言葉を下げるカーヒル。それだけで、アイーダが敵にとってどういう存在なのか。ベルリには理解することができてしまった。すっかり萎えた反抗意識へさらに追い討ちをかけるようにアイーダがベルリにコクピットを退くように指示を出した。

「コクピットを変わります」

不思議と、その指示に逆らう気は起きなかった。ベルリが席を立ち、アイーダが座ると、足元にある船の中にいる二人の少女へ手に乗るよう指示を出した。

「ラライヤ!ノレドも!」

「ベルリ！こいつらはキャピタルを攻めてきた相手だよね!?」
「あぁ、僕らは人質みたいだ」
「人質い!?」
「Ｇセルフ…人質…？」

アイーダによってコクピットに押し込まれた三人のおかげで接触回線が一気に賑やかになる。人質だとわかるようにコクピットを開けたままＧセルフは空へと飛び立つ。まだ組織としてできたばかりのキャピタル・アーミィのＭＳたちは、何もできないままその行いを見逃すことしかできなかった。

「ルワン、カーヒル！Ｇセルフと人質を頼むぞ」

途中で合流したオリバーのフライスコップに乗りつけた俺は、そのままＧセルフの後方を飛ぶようにキャピタル・テリトリィを後にするのだった。

第二話　タブーと戦争

南米、軌道エレベータの地上発着場であるビクローバーからアメリアのカリブ研究所までは割と長旅だったりする。
陸路ではないだけマシではあるが、フライスコップの速度でも到着までは数時間は掛かる。
ので、その間に催してくることも仕方ないがこと。

「済んだかい？」
「ありがとうございます」

トイレの気配から解放され、スッキリした顔となったベルリがコクピットハッチで待っていた俺に礼を言ってきた。
向こうにはアイーダ様やベルリの学友、そしてカーヒルが逃したと言っていたラライアという少女と、三人の女性が乗っているのだ。

コクピットシートにトイレが標準搭載されてるとは言え、女性三人の中でトイレをするとかどんな罰ゲームだ。そんなわけで、フライスコップを操縦するオリバーに速度を落としてもらい、ベルリがこちらに移動してきたわけだ。

「君たちは人質なのだから、そういったことまで面倒を見るのがこちらの役目ってやつさ」

そう答えると、途端にベルリの表情が怪訝なものとなった。

まぁ仕方のないことだ。

彼らからしたら俺たちは海賊。キャピタル・ガードが管理運営、そして護衛する軌道エレベータのクラウンから運搬しているフォトン・バッテリーを奪う犯罪人なのだから、そんな相手に人質にでもされたら不安な表情にもなるというものだ。

「俺の名前はラリー・レイレナード。この機体、ローンズーのパイロットでＭＳ部隊の隊長なんてものをやっている」

そんなわけで、まずは自己紹介からはじめた。何にしろ、お互いのことを知らなけれ

ば何も始まらない。これは過去から培ってきた確かな経験則だ。

「…僕はベルリ・ゼナムです。キャピタル・ガードの候補生です」

俺が名乗るとベルリも同じように答える。しかし表情は良くはならなかった。とりあえず途切れないように当たり障りのない話題を振る。

「女の子ばかりのコクピットは居心地が悪かっただろ？」

「ノレドとは付き合いも長いですし。ラライアって子もおとなしかったから」

そうは言っているが、彼が気にしているのはGセルフを操縦しているアイーダ姫なのだろう。人質にされるわ、守ろうとしていた相手に引っ叩かれるわ、散々な目に遭ってるわけだからな。そう思うと何か申し訳ない気持ちになってきた。

「すまないな、こんなことに巻き込んじまって」

通信回線を切って、俺はベルリにそう言った。謝るのは形的に良くは無いだろうが、

人道的に見れば彼らに謝罪しなければならない。本当なら、アイーダ様とGセルフさえ戻ればなんて事はなかった。だが、あの場から無傷で逃げ帰るには彼らを人質にするのがベストだったからだ。

「やっぱり、貴方達はただの海賊じゃあないんですね」

どこかでベルリもわかっていたのだろう。というか、アイーダ姫が一人で先走った上に、こうやって大所帯で迎えにきたのだ。

MSを持つ海賊なんてものも、そもそもの話軍や政治が絡んでなければ無理だ。個人の勢力では実現なんかできやしない。そんなもの、少し考えれば分かることだ。

「非正規部隊ってやつさ。囚われてもアメリアは助けてくれん。実際にキャピタルはアメリアにも問い合わせたのだろう?」

「そこまでは僕も…」

ベルリの話では、彼はあくまでキャピタル・ガードの候補生であり、キャピタル・アーミィなんてものは知らないし、いくらキャピタル・テリトリィを守るためとは言え、機

械技術の発展をしてるんだから、タブー扱いだと答えた。
となれば、アイーダ様やGセルフ、それにラライアという少女に執着している人間がアーミィの中にいるということなのか…。
そこで、ふと疑問が湧いた。

「ベルリ、何故君はGセルフに?」
「動かせれたから、ですかね」

疑問に疑問で返された。いや、彼自身もよくわかっていない様子だ。他のキャピタル・ガードの人間や、彼が話してきたケルベスとかいう教官、そしてキャピタルの技術者でも起動は愚か、コクピットハッチの操作すらままならなかったと言うのだ。

「あの機体は、アイーダ姫しか扱えないものだった。少なくとも君が乗ってシステムが反応するまではね」
「故障とかではないんですか?」
「さてな、何かしろのプロテクトが入ってるようにしか見えない。条件とか、何かを判断して搭乗者を選ぶような」

「そんなの！宇宙で使うものは皆んなが使えるものなんですよ!?僕やアイーダさんしか扱えないものなんて、タブー破りです!!」

それ、確かアメリアの技術者も言ってたな。スコード教の教えで科学技術というのは平等であり、誰もが使えるものでなければならない。そこに例外は存在しないとも。

「宇宙からの恵みへの感謝と、技術の発展・進歩を禁じているからこそ現在の平和と繁栄がある、か」

理屈はわかるが、それを宗教の教えとするもの何ともまぁ豪胆と言うべきか…。そんなことを思っていると、ベルリが不思議そうな顔をしてこちらを見つめていた。

「ラリーさんはスコード教の信者ではないのですか？」

んー違うな！

「ただシステムとしては優秀だと思っているよ」

「システム…スコード教の教えがですか？」
「技術の発展と進歩を手放す代わりに長寿と繁栄をもたらす。人類を地球というゆりかごに押し込めて、宇宙と結ぶへその緒をだけを通路とするから、人は宇宙世紀ってやつの過ちを繰り返さずに済んでいるんだろう？」

一昔前、誰かが言った綺麗な言葉と、綺麗な在り方を証明しているのだ。そんなものが宗教なんてものをやってるのだから、スコード教を依代にする人も多くいるのだろう。

人の信仰を集めるシンボルであると同時に、人の欲を縛る鎖でもある。

「けれど、この機体や僕たちを襲撃した機体もアメリアが建造しているんじゃないですか？」

だが、人として仕方のない性だと俺は思う。

前世とでも言うべき過去の記憶がそうだ。人はあくなき欲望を抑えることができない。神の領域であるサンクチュアリを暴き、たとえ神の墓があったとしても、それを暴いて技術を貪欲に求める。

それでいて滅びないのが人間という生き物だ。今こうやってリギルド・センチュリーという次世代の世界があるのが何よりの証明じゃないか。

「人は結局繰り返すのさ。押し込められて平等に、長寿と繁栄というものに飽きて、飽きて、飽きては繰り返すのさ。過ちってやつを」

「それこそ!」

「スコード教の教えに叛く、かな?だが、それはあくまで宗教だ。人の性を縛る鎖にしては効果が薄すぎる」

たとえそれで繁栄してきた世界だとしても、たったひとつの石が投げ入れられ、広がった波紋のせいで簡単にその繁栄は脆くも崩れてしまうのだから。

「それでも、僕はキャピタル・ガードとして、人類にフォトン・バッテリーを供給する義務と責任を自覚しているつもりです」

それがキャピタル・ガードの存在意義だから、そうベルリは言った。

宇宙からの地球へ供給されるフォトン・バッテリーを運び、それを平等に世界へと配

給する。アメリアとゴンドワンが旧時代のような大陸間戦争をしようとも、だろうな。
「俺はアムテックのタブーとかに詳しくはない。だが、こうやってゴンドワンも、アメリアも、そしてキャピタルも、技術の進歩に手を伸ばせずにいられない。そこに実現可能なものがあるから」
「それは欲望でしか…」
「だが、そういう流れがきているのさ。宇宙から降りてくる危機も」
「宇宙からの危機？」

少なくとも、フォトン・バッテリーが宇宙のどこかから供給されているという以上、アメリアが禁忌を冒してでも観測した事実は覆らない。
それにその強迫観念のようなものを突き動かす理由がすぐ目の前にあるのだから。
「俺も、そして君やアイーダ様が乗り込むGセルフも、宇宙から落ちてきたんだからな」
「宇宙から…」

俺が何故ここにいるのかはわからないけどな、その想いは想いのまま留めた。すると

モニターの先に反応があった。

「さて、到着したぞ」

カリブ海にあるアメリアの研究所はすぐそこだ。

▼

「レイレナード大尉！私を置いて勝手に出撃するなど、どういう了見なのだ！」

カリブ研究所に停泊している宇宙戦艦、メガファウナに着陸して、ローンズーから降りたと同時に、天才がズンズンと歩いてきて突っかかってきた。

クリムトン・ニッキーニ。アメリア軍ではクリム・ニックと呼ばれるエースパイロットで、彼はゴンドワンとの大陸間戦争で大統領の息子という立場でありながら先陣を

切ってＭＳでの戦いを繰り広げたのだ。
若かゆえの血の気の多さと、天才的な操縦センスから皆んなから「天才クリム・ニック」と持て囃されているが、皮肉も半分くらい込められているのだろう。

「クリム中尉は作戦遂行時までにお戻りにならなかったので」
「それを勝手と言うのだ！私がゴンドワン側への任務から抜けられないと知りながら！」

だからその合間にアイーダ姫の救出に向かったんでしょうか、というセリフはグッと飲み込む。
この天才は腕はいいが何より喧嘩っ早いのだ。アメリア以外のＭＳや船は全て敵と思ってるレベルで好戦的なものだから、アイーダ姫の救出任務なんかに連れて行った日にはこちらも向こうも甚大な被害は必至だったのだ。

「その与えられた役目を果たすのも兵士たる勤めです」

やんわりと言うと苦味虫を箱ごと噛み潰したような顔をしてクリムがさらに文句を

言おうとしたが、それを間とって止めてくれた人がいた。

「まぁまぁ、落ち着いて。ラリー隊長、アイーダ姫を無事に連れ帰っていただきありがとうございます」

メガファウナの艦長、ドニエル・トス艦長。

この曲者揃いの海賊部隊を取りまとめる事から部下からの信頼も篤いが、それ故に頭痛の種も多い苦労人でもあった。

この艦長、言いたいことはハッキリと言う性格の持ち主であり、例え相手が大統領の息子や軍総監の養女であってもその姿勢を変える事は無い。

故に俺としてもやりやすい艦長だった。

「ああ、艦長。だがケジメはしっかり付けなければならないな」

そう答えるとドニエル艦長は少し困った顔をしていた。今から俺がすることを察しているのだろう。艦長に転載を任せて、俺はGセルフの足元にいるアイーダ姫の元へと向かった。

彼女はバツが悪そうな顔をしていた。うむ、自覚はしているようだ。しかし容赦はせん。

「レイレナード隊長…わたしは…」

そこでアイーダ姫の声は頬を引っ叩く乾いた音と共に途切れた。叩いたのはもちろん俺だ。

「隊長！」

「貴方は……！」

カーヒルやルワン、そしてGセルフに乗っていた人質のノレドが驚愕し、俺の後ろにいたベルリが怒気を放った。はっはっは、そりゃまぁ女の子に手をあげたんだからそうもなるだろう。けどこっちも言わなきゃならんことがある。

「アイーダ様。我々の海賊任務についての決め事は覚えていますね？」

「…ッ！ええ、覚えています。一つ、クラウンを含むキャピタルタワー全ての設備に損傷

を与えてはならない。一つ、速やかにフォトン・バッテリーを渡さない場合は銃口を向け脅し、それでも応じなかった場合は諦めること。一つ、キャピタル・ガードが出したMSとの戦闘は原則禁止…以上となります」

「アイーダ姫、この作戦で今口にしたどれを守り切ることができましたか？」

「…っ」

そうだとも。そもそもの話だ。

海賊部隊の目的はクラウンが運搬するフォトン・バッテリーを奪うことだ。武装解除し、戦闘なく奪い取るのが理想。しかし、キャピタル側の抵抗を受けた場合、クラウンや軌道エレベータのパーツやナット、ケーブルを傷つけないために戦闘は原則禁止というルールを決めていた。

にも関わらず、このアイーダ姫はビームライフルを打つわ、ビームサーベルを抜くわ…下手すると軌道エレベータが崩壊する危機があったのだ。引っ叩かれるだけでマシだと思って欲しい。これが軍属なら間違いなく軍法会議の後、銃殺が妥当な判断が下されるのだから。

「ルールはルールを守るからこそ発揮される誓約なのですよ。感情的にルールを曲げた

結果、貴方はキャピタル・ガードに囚われ、危うい目に晒されるところでした」
「わ、わたしは…」
「姫様、フォトン・バッテリーの奪取は多大なる危険と統率力が必要となります。ですので、次の作戦があった場合は姫様は参加を認めません。反論も認めません」
「そんな…！」

この突貫じゃじゃ馬娘め。この期に及んで出ようと思ってたのか。だが、ＭＳ部隊の隊長は俺だ。認めるわけにはいかんなぁ。

「反論は認めないと言いました。今後、姫にはメガファウナの直防衛扱いとなります。ご容赦ください」

簡潔にアイーダ姫に結論を告げる。すると彼女は目に涙を浮かべて格納庫からメガファウナの艦内へと走って行ってしまった。すると、横にいたカーヒルが申し訳なそうな顔で前に出てきた。

「隊長…」

あーうん。わかってるさ。

「誰かがああ言わないと、次はどうなってるかわかったものじゃないぞ」
「…すいません」
「意中の女に嫌われたくないだろう?カーヒル。その気持ちだけ受け取っておくさ」
「すいません」

ただ、ただ謝るカーヒルをアイーダの慰め役として送り出す。こう言った時に支えになるのがアイツの役目なのだからしっかり仕事をしてこい。そんなやり取りを見てたベルリが俺のパイロットスーツを叩いた。

「今の人って…」
「カーヒル・セイント大尉。アメリア軍のエースで、アイーダ様の恋人さ」
「な、なんじゃとてぇ!?」

ベルリの素っ頓狂な声が響き渡る中、彼の学友であるノレド・ナグはむすっとした顔

をしていて、彼女と共にいたラライアは静かに佇むGセルフの足に抱きついて眠っていたのだった。

第三話　海と空と混乱と

「ベルリ・ゼナムって…軌道エレベータの運行長官の一人息子じゃないですか!!」

不貞腐れたアイーダ姫をカーヒルに任せた俺は、人質になってもらったベルリたちを預けることになった。彼らは人質なのだから、尋問や拷問は禁じられている。捕虜の扱いについてなんて、アメリアの軍組織にまともなものがあるわけないのだから、こちらの采配で決めるしかないのが実情だ。

休憩室にベルリたちを送り届けた後、クルーのノーマルスーツや、パイロットスーツの仕立てを担当するアネットさんから軽食が入ったランチボックスをもらって、俺はメガファウナの艦橋へと上がる。

艦橋のドアを潜ったと同時に、先に戻って情報を集めていたドニエル艦長から冒頭のセリフをふっかけられたのだった。

「まさかそんな大物を人質にするなんて、ラリーさんやりますねぇ」
「ギゼラ、茶化すな！冗談言っとる場合じゃないぞ!?」

迎撃システムを担当するギゼラの茶化しに釘を刺すドニエル艦長だが、それを聞いた俺も寝耳に水だった。まさか最前線で、Gセルフを操縦していたパイロットの少年が、キャピタルの運行長官の一人息子だったとは。

「おそらく、経路はモニタリングされていますから…アーミィは運行長官の息子を奪還する名目で攻めてきますねぇ、こりゃあ」
「すいません、ドニエル艦長。状況が状況だけに…」

メガファウナの副長の言う通り、人質を盾に逃げたとはいえ、その経路は追跡されているだろう。追っ手を巻く用のミノフスキー粒子の散布濃度も心許ないものだったし、Gセルフに発信機がつけられていたらレーダーの撹乱も無意味になるだろう。
俺の独断で人質というカードを作ってしまったのだから。そう謝るとドニエル艦長は帽子のツバをいじりながらため息を吐いた。この人はやってしまったものは仕方ないという人だからなぁ。

「…人質の利用価値はもうないのなら、いっそフライスコップをやって帰ってもらったらどうです？」

「戦いに飢えてるアーミィが止まりますかい。奴らは我が国やゴンドワンのように戦争経験がないんだ。実戦の機会を人質が返されたから辞めますなんて…」

「人質を返しても、きっとGセルフとアイーダを引き渡せ！って行ってくるのがオチでしょうなぁ」

あーそうだろうなぁ、と希望的な意見は所詮、希望的なものだと諦める艦長。アメリアとゴンドワンの戦い、そして月周辺の活発な動きを見てキャピタルもガードからアーミィなんていう組織に形を変えたのだから、実践経験を新しい組織に与えたいと言う思惑もあるのだろう。

本当に、アイーダ姫がまんまと捕まってくれなければ、その矛先をゴンドワンの方に向けることもできただろうに。

そんなことを言ってもしょうがないが、とわかっているが、あの突貫じゃじゃ馬娘と天才少年を相手にしていれば愚痴の一つや二つは言いたくなるものだった。

「進行方向ソノママ！艦長ォ！」
「まったく！ステア！予定通りだ！各員、荷物はすべてメガファウナに積み込むんだ！いつ戦闘になってもおかしくないんだからな！」
「ベルリと少女たちは？」
「休憩スペースで隔離してますよ。ベルリって子、頭がいいんですかね？自分たちの素性は語らず、この船の所在を…」

副長に人質となった彼らの状況を報告していると、キャプテンシートに備わる有線回線の受話器を持っていたドニエル艦長が怒声のような大声を上げた。

「なにぃ!?クリム中尉が人質をGセルフに乗せてるだとお!?」

あちゃー、と副長と俺が顔を手で覆って天井を見上げたのはほぼ同時だった。

「出たよ、天才の悪い癖だ」
「今すぐやめさせろぉ!!コクピットにもう乗ってる!?あの大統領のバカ息子め!!」
「これは中尉には聞かせられんなぁ」

他人が思うこと、だいたい他の人もおんなじ事を思っていると言うことが証明された場面だった。受話器を叩きつけるように置いたドニエル艦長は、勢いそのまま命令を発した。

「ラリー隊長！ＭＳデッキへ!!あのバカが乗り込ませた人質を下ろしてくれ!!」
「了解」

まぁそうしないと不味いですもんね！言われるがままブリッジを後にすると、出た瞬間に副長がレーダーシステムに目を走らせた。

「っ！ちょいまち！ミノフスキー粒子散布を確認!!敵がおいでなすった！」
「クソ！なんてタイミングだ!!」

▼

混乱と無鉄砲さにかき回されるメガファウナ艦内とは違い、クリムに言われるがままGセルフに乗ることになったベルリは、ゆっくりと大気圏内パックでホバリングしながら操縦の感覚を味わっていた。

「ほんとにこれって、アイーダさんしか操縦出来なかったんだ」

天才と持て囃されているクリムが、Gセルフを起動した瞬間に苦虫を噛み潰したような表情をしたのできっとそうなのだろう、とベルリはラリーから聞いた言葉を信じられるものだと判断できた。

つまりは、あの人は海賊部隊の中でも話がわかる人なのか？こちらを人質にしたとはいえ、基本的に彼の方針は理に適っている。

そんな信頼感のようなものがベルリの中で生まれつつあった。

「よーし、この機体のことわかってきたぞ！レイアウトは違うけど、基本はレクテンや他の機体と同じで…ええ!?何やってるの!?」

上にあがれば次の指示を出すと言っていたクリムは、少し目を離した隙に自機のモンテーロを引っ張り出して戦闘準備を始めているじゃないか!?
一応、人質であるこちらを放っておいて何を考えているだ、とベルリが驚愕しているが、そんなことお構いなしにクリムはモンテーロのコクピットへと上がってしまった。

「クリム中尉!人質ほったらかして何やってる!!」

その場面にラリーは間に合った。
コクピットハッチを開けたままビームライフルを受け取ったクリムのモンテーロに向かって大声で問いかける。

「見たらわかるだろ!迎撃準備というやつだよ!」
「本気ですかぁ!?」
「冗談言ってる場合じゃないだろ!!さっさとGセルフのビームライフルを出すんだ!!」

まだ敵の数も何も分かってないんだぞ!?それ以前にGセルフにビームライフルを出せとは無茶苦茶だ!大急ぎで他のMSの発進準備をするメカニックのアダム・スミス

や、他のクルーを横に、俺はレーザー通信機のマイクを手に取った。

「ベルリ・ゼナム！まだレーザー通信で聞こえる範囲だな!?その機体に乗ってるんだな!?すぐにメガファウナに戻れ！」
「ラリーさんですか？何がどうなってんです!?」
「キャピタル・アーミィが攻めてくるんだよ！」
「キャピタルが戦争…!?なんで!?」
「俺が君たちを人質にしたからだ！すまない！」
「謝られてもどうにもなりませんよ!?」

海岸線上の向こう。敵の光が迫ってくるのが見えた。状況は予想以上に早く動いているらしい。クリムのモンテーロはすでに敵との一戦闘距離となっている様子だ。

「とにかく君はメガファウナの格納庫の奥に…ってぇ、Gアルケイン!?カーヒル！お前何やってんの!?」

Gセルフの帰還路を見ようと振り返った先には、ロングビームライフルを持ったGア

ルケインが今まさに発進しようとしている光景が広がっていた。
足元ではパイロットスーツのカーヒルが必死にアルケインを止めようとしている。
「すいません、隊長！少し目を離した隙に…！姫様！アイーダ！おやめください!!」
「自分のやった失敗は自分で取り返さなきゃならないんです!!」
「子供の言うようなことを言わないでください!?」

カーヒルの制止も聞かずに、アルケインはデッキから飛び上がると空中での迎撃姿勢へと入った。はっはっはっ！相変わらず総監の娘と大統領の息子は無茶苦茶しやがるなぁクソが!!
「来たぞぉ!?」

誰の声だったのか、メガファウナの先でキャピタルのＭＳとモンテーロが空中戦をおっ始めた。クリムの放ったビームライフルがキャピタルのＭＳ搬送用のフライトユニットであるダベーに直撃する。
ダベーに乗っていた２機のカットシーも翼を展開して飛び立つと、攻めるクリムのモ

ンテーロを迎え撃った。

「あれはキャピタルのダベーじゃないか！じゃあ、キャピタル・アーミィってのは本気で戦争をしようって言うの!?」

アイーダのGアルケインも迎撃に入る様子をGセルフに乗るベルリも目撃していた。あんな統率された戦闘行為はキャピタル・ガードではタブーとして禁じられているのに、それをアーミィのカットシーたちは平然とやってしまっている。それもアメリアのかもしれない海賊部隊相手に！

「母も僕もアーミィなんてものは知らなかったんです！戦争なんて、それはタブー破りですよ!!キャピタル・ガードなんですから…僕が止めてみせます!!」

「ベルリ!!ええい、どいつもこいつも!!」

指示された通りGセルフの装備を用意したアダム・スミスから、ビームライフルとシールドを受け取ったベルリも静止を聞かずに戦闘状態の空へと飛び立ってゆく。

思わず俺はレーザー通信機用のマイクを地面に叩きつけた。

「ルワン！オリバー！カーヒル！各機は出て行ったバカ二人を援護！俺はベルリを止めて、助ける!!」
「頼みます、隊長！」
「レイレナード機を出せってんだよ！」

隊のグリモアよりも先に、真っ白な塗装がされたローンズーを出してもらった俺はすぐにコクピットハッチへ上がるケーブルへと飛びついた。

「アダム・スミス、助かります！ローンズー、ラリー・レイレナード、出るぞ!!」

第四話　カットシー、目の前の現実と想像力

アメリアとゴンドワンの大陸間戦争。

それは、およそ１０年にもおよぶ地球の大国同士の戦争だが、開戦当初は旧時代の海上艦隊戦や、航空機、歩兵などの戦闘を主軸とした戦闘が散発的に大陸間の各所で発生していたが、その戦争がもたらした技術発展の力は両国の軍人を増長させるには充分なものとなってしまっていた。

特に、宇宙からもたらされたと言われる「ヘルメスの薔薇の設計書」が決定打となった。

宇宙世紀時代の技術遺産でもあるそれには高度な技術が記されていて、等しくアメリアとゴンドワンに開示された設計図から、両国は技術開発競争を繰り広げたのだ。

その設計図に記された兵器の本質も、真なる性能も知らずに。

もたらされた技術による戦闘は、旧時代のものから旧世紀のものへと段階を上げて、アメリアもゴンドワンも、ＭＳやＭＡでの戦争をするようになっていた。

ＭＳやＭＡ、艦艇の建造速度は、旧時代から培ってきた製造産業に強いアメリアに分

があったようで、１０年におよぶ大陸間戦争はアメリア優勢のまま膠着状態に陥っていた。

「隊長、本当に宇宙からの脅威というものはあるのでしょうか」

アメリアが建造した宇宙戦艦は、タブーを危惧したキャピタル側の反発を懸念し、廃棄扱いとなったが、アメリアは極秘裏に海賊部隊を設立していた。

大陸間戦争で俺がＭＳ部隊の隊長になってしまったものだから、今や戦友のカーヒルを連れて大気圏内ギリギリの高度へとやってきていたのだ。

「それを調べるのも、俺たち海賊部隊の役割なんだろうさ」

「しかし、天体観測もまたスコード教のアグテックのタブーに含まれます」

それはそうだろうな、とカーヒルの通信に応える。アメリアもゴンドワンも血眼になって奪い合っているヘルメスの薔薇の設計書だって、観測を禁じられている宇宙からもたらされた物だと言われている。たった一つの設計書で大陸間戦争の様相は大きく変わってしまったのだから、与えられる影響力というのは凄まじいものなのだろう。

だが、それを享受しているままではいけないという事もある。

「カーヒル。考えたことはないか？」

「はい？」

「ヘルメスの薔薇の設計書も、アメリアとゴンドワンの大陸間戦争も、そもそもアメリアとゴンドワンという大国が出来たのも不可思議じゃないか。世界はスコード教の教えの中、宇宙と地球を繋ぐへその緒からフォトン・バッテリーを受け取って生活をしてきたんだ」

フォトン・バッテリーひとつあれば、大きな街一つの一ヶ月間の電力を賄うことができるのだから、それを供給されることで世界は不平等な物ではなくなっていた。

たしかに、バッテリーを奪い合う争いも以前からあったのだろうが、フォトン・バッテリーを応用する技術力がない以上、奪い合うのは不毛でしかないので、戦争という戦争は起きなかった。

にも関わらず、アメリアとゴンドワンという大国が出来上がって、今やＭＳや船の動力となるバッテリーを奪い合ってる。

「もし、世界のどこかにいる〝誰か〟が、長らく続いた平和な世界を、旧時代の争いの時代に戻したいと画策しているなら、それを考えつくのは地球人では無理だろ？」
「その誰かが宇宙からやってきた…というのですか？」
「あくまで憶測だがな。だから、こうやって宇宙を観測するんだろう？」

そもそも、宇宙からの栄養を地球に送って生き長らえさそうと言うのだ。今の地球のあり方は宇宙という母に抱かれた赤子同然。
宇宙にいる〝誰か〟は、その在り方を１０００年以上かけて作り上げてきた。それを壊そうと言うのだ。１０００年、母に抱かれ続けてきた赤子にそんな胆力があるものかよ。

「隊長！望遠モニターが光を捉えました！」

カーヒルの声に、俺は操縦席に備わるコンソールを叩いた。彼の言葉通り、月周辺の宇宙には自然現象とは考えにくい小さな光の天体が映し出されている。それもかなりの数だ。見方を変えれば、敵の宇宙艦隊のようにも思える。

「データはライブラリに保存しておけよ、カーヒル」

俺の指示に従い、カーヒルは観測したデータをライブラリに保存してゆく。赤子を宿す母の体から、その赤子を巣立たせようとする誰かがいるのか。

たとえそれが、再び地球を滅ぼすほどの宇宙世紀時代の過ちを繰り返すことになったとしても。

モニターに映るいくつもの光点を見つめながら、俺は過去に生きた世界の惨状を思い出していたのだった。

▼

ローンズーで空に上がった段階で、戦闘の火蓋が切って落とされていた。

キャピタル側のＭＳは移動用のサブフライト機に乗って対空でメガファウナのいる空域へと侵入してきている。

「Gセルフは上に行ったか!? 敵は…真下か！クリムニック!!」
「こちらもゴンドワンとの戦争で空戦には慣れている!!」

すでにクリムのモンテーロは、海面スレスレを飛ぶキャピタルのダベーを捉えていた。放たれたビームはダベーの中央に直撃すると、サブフライトシステムから降りたカットシーが襲いくるモンテーロへの迎撃体制をとった。
空戦を開始するモンテーロのフォローをルワンたちに任せて、俺は空中でホバリングするGセルフの肩に手を置いた。

「接触回線！Gセルフ！ベルリ！戻れ！君は俺たちにとって…」
「人質なんでしょう!?けど、僕らのいるせいでキャピタル・アーミィが攻めてきてるんですから！」
「生意気を言うんじゃない！そう言ったことは俺たちの責任なんだから君が出る必要は…」
「ラリーさん！エフラグで来るなら下じゃありませんよ！上から来ます！」

クリムの空戦を目の当たりにしたベルリは、俺の言葉など聞かずにさらに上空へと舞

い上がってゆく。たしかに水面ギリギリでわざわざ飛んでくるキャピタルのＭＳの動きは陽動にも見えるが…！

「あいつ、目の前の状況に対応することで手一杯か！オリバー！」
「やってますよ!!敵は不恰好ですが連携を使ってきます！」

カットシーの編隊を開いて取る２機のグリモア。その後ろからアイーダのＧアルケインが狙撃を試みているが、放ったビームの光はカットシーとは別の方向へと流れてしまっていた。

「ビームが当たらない!?」
「姫様はビームを撃ちすぎです！下がって！」

憤るアイーダを庇うように出たカーヒルのグリモア。牽制射撃で相手を下がらせようとしたが、そのライフルは真下から放たれた一閃によって吹き飛ばされた。
損傷したライフルを捨て、カーヒルが下へと視線を向けるとそこにはダベーを盾にするように下からビームライフルを構えるカットシーの姿があった。

『舐めてもらっちゃあ困るのよ！』
「ちぃ……！小細工を！だが…遅いな！」

出てきたカットシーの翼を備わるジャベリンで切り落としたクリム。姿勢を維持できなくなったカットシーは水面へと叩きつけられて爆発した。

『くそ、堕とされたのか!?あれはGセルフと…俺を落とした機体か！』

カットシーを操るデレンセン。視線の先には雲の合間を縫って現れたアーミィの部隊を迎え撃とうとしているGセルフとローンズーがいた。
ローンズーは、Gセルフが奪取される前にデレンセンが乗るカットシーを踏みつけて叩き落とした機体であった。

「こいつ、Gセルフを狙って…ベルリ!?」

迎撃しようとビームライフルを構えたと同時、ベルリが乗るGセルフは武器と盾を持

つ両の手を大きく広げてカットシー部隊の前に出たのだ。Gセルフの背後には無防備なメガファウナがある。

『Gセルフ、投降するのか!?』

「自分はキャピタル・ガードのベルリ・ゼナムです！攻撃をしないでください！船にはライアとノレドが乗ってるんです！」

「お前！何をやってるんだ！戦闘を俺たちはしてるんだぞ!?」

『あのポーズは降参の合図なのか!?投降するのか、Gセルフとあの機体は！』

気がつけば、上がってきたカットシー部隊にも取り囲まれていた。ローンズーの操縦桿を握り締めながら思考を巡らせる。

ここで俺が撃てば、無防備なGセルフがやられる。だが、奴らはGセルフを奪還して大人しく帰る保証もない…どうする!!

『投降するのか、Gセルフ！我々と共に来てくれるのだな！』

迷いのある思考を繰り返している間にも、デレンセンが乗るカットシーがライフルの

銃口をGセルフのコクピットへ突き付けながら接触回線をつなげてきた。聞き覚えのある声を聞いて、ベルリは顔を綻ばせる。

「その声は…デレンセン教官殿ですね！僕、ベル…」

だが、その通信は長くは続かなかった。Gセルフと接触するカットシーを引き裂くように放たれたビーム。上がってくるのはクリムのモンテーロと、ルワンのグリモアだ。

「やりがやったな、天才ぼっちゃんがぁ!!」

Gセルフと同じように突きつけられていたカットシーのビームライフルを蹴り飛ばして、俺はスラスターの出力を最大限に上げた。

下手を打てばコクピットごと焼き殺されていたと言うのに、この天才パイロットは向こう見ず過ぎる！

「迂闊だな、素人軍のパイロットが!!」

『チィ…ッ！』

「なっ、動きが早い!?」

奇襲したクリムの動きを、さらに早い速度で掻い潜ったデレンセンは、速度を殺さないままモンテーロの背後へと回り込み、ビームサーベルを構えた。

『チェエエエストォおおおーー!!!!』

咄嗟にクリムも直撃は避けるが、ジャベリンを持つマニピュレーターがカットシーのビームサーベルによって切り落とされた。

モンテーロは、空戦能力に秀でているがレスポンスでは小回りが効かない。その隙を突かれた。対して、局地型の機動戦を想定したローンズーは増設されたスラスターで小回りが効く。

「キャピタル・アーミィは本気で戦争をしようっていうのかぁーー!!」

「ベルリ! 逃げろ! お前は我々の軍兵じゃないんだから!!」

Gセルフに襲いくるカットシーをビームサーベルで切り払う。人質である以上、ベル

リを無用な戦争に引き込むつもりはない。
Gセルフを守るように立ち塞がる俺のローンズーに、デレンセンのカットシーが迫った。
『邪魔をするのか!!』
「そっちが邪魔なんだろうがぁ!!」
放たれたビームライフルの一撃をビームサーベルで切り払う。背後からくる別のカットシーの警戒も怠らない。肩に備わるスラスターを吹かして、その場でくるりと反転しながら背後から奇襲をかけてきたカットシーの両足をビームサーベルで切り落とす。
『うわぁああ!?カットシーの足が!?』
『ロッシュー!!』
「爆発はさせない！敵にとっての足枷を増やす！」
残りの敵は！あたりの索敵に気をやると、事態は最悪だった。デレンセン率いるカッ

トシーの編隊が無防備なベルリのGセルフを三方向からの取り囲んでいたのだ。

『Gセルフ！投降しないのならば!!ここで墜とす!!』

「ベルリ!?」

「囲まれた!?三方向からの同時攻撃！直撃する…!!」

ビームライフルとカットシーの脚部から出るビームサーベルに取り囲まれたベルリは、その攻撃が躱せないと覚悟した。コクピットごと八つ裂きにされるイメージが脳内に走ったと同時に、ベルリは信じる神に向かって叫んだ。

「スコード!!」

その防衛本能に応じたのか、Gセルフを守るフォトン装甲の表面から全周囲のフォトン・シールドが展開された。デレンセンの構えていたビームライフルはひしゃげ、突きつけられていたビームサーベルも出力負けをしている。

三方向からの取り囲んでいたはずのカットシーは文字通り、Gセルフから吹き飛ばされたのだ。

『この出力は…!?ええい…あのGセルフの性能は何だったんだ!?ビームサーベルの何十倍もの威力があったぞ…!』

Gセルフの予想外のシステムに驚きを隠せないデレンセンだったが、その驚きのお陰で戦闘によって高揚していた気分がいくらか落ち着いたような気がした。

あたりを見渡すと、奇襲を仕掛けたはずの自分の部隊も手ひどくやられている有り様が見えた。

『損失は三機、行動限界機が四機か…撤退する!!』

夕日の方向へと撤退してゆくアーミィのカットシー。戦闘距離を脱した機体の中で、デレンセンは拳をコクピットのコンソールへと叩きつけた。

『戦友を失った上に、ベルリ生徒とノレド・ナグも救えなかったとは…なんとも情けない…!』

▼

「退いてくれたの…？」

シールドが中破したGセルフ。鮮やかに引いてゆくカットシーの後ろ姿を見つめながら深く息を吐いたベルリに、肩が触れられる振動が伝わった。

「なんとかな。Gセルフ、聞こえてるな？」
「あ、はい！ラリーさん…」
「帰投する。あと、君を拘束させてもらうぞ」
「ええ!?なぜなんです!?」
「君がGセルフで戦ったからだ。人質である君が、だ」

Gセルフは確かに特別な機体だ。アイーダ姫やキャピタル・ガードのベルリしか乗れないという仕様がある。だが、それが今回の戦闘の理由になる事などないのだ。驚くべ

ルリにはっきりと伝える。

「あの天才に唆されたことはわかる。だが、いくら状況が流動的であったとしても、君は俺の言葉に従ってメガファウナに帰投するべきだった」

「そんなこと！」

「君が降参するポーズをメガファウナ上空で取った意味がわからないのか!?」

ベルリの反論をすぐさま否定する。あの状況下で、あんな真似をするのは迷惑以外の何物でも無かったからだ。

「今回は無事で済んだだろうさ!!だが、君がアーミィの人質になった場合、今度危険に晒されるのはメガファウナや我々の部隊だったんだぞ！」

「デレンセン教官殿はそんな卑怯な真似をしませんよ!!」

「君がアーミィのパイロットとどういう関係だったのかは問わない。だが、戦場にいる以上、宇宙のように目の前の状況に流されるように対応していては…誰かが死ぬぞ」

そこまで言って、ようやくベルリは自分の置かれた状況を理解したようだった。これ

はキャピタル・ガードで行われている実地訓練や、クラウンの補修や点検とは全く異なる状況だ。なにせ、乗ってる機体の引き金を引けば誰かが死ぬと言う事実が付き纏ってくるのだから。

「僕は…誰かを殺したくなんて…」

「そう思うなら、君はＭＳに乗って戦うべき人間ではないんだ。戦場で引き金を引く以上、その重さをわからないなら…それは殺人者と変わりないのだからな」

「引き金を引く…重さ…」

この世界の引き金は、あまりにも軽すぎる。誰もがＭＳに乗れる環境、フォトン・バッテリーによる繋がれた繁栄の影響なのか。それともこれが瞬間的な洞察力と判断力が必要な宇宙での生き方に順応した生き方なのだろうか。

目の前の状況を真っ先に処理するベルリの生き方もひとつの在り方なのだろうが、それで殺してしまって後悔しても遅いのだ。

世界がどうなろうと、技術がどうなろうと、価値観や感じ方がどうなろうと、人を殺すと言う引き金の重さはどの時代も変わらないのだから。

「隊長、どこかのバカたちにも聞かせたい言葉だな」

メガファウナに着艦すると同時に、ドニエル艦長が個人回線でそう言ってきた。ミノフスキー粒子も薄くなったので、レーザー回線で聞き耳を立てていたらしい。

「茶化さないでくださいよ、ドニエル艦長。クリム中尉も、アイーダ姫も…まったく、ままならないものです」

「各機収容後、機体のチェックだ！敵が諦めてくれた保証はないのだからな！」

ラリーのローンズーに誘導される形でメガファウナへと着艦したGセルフの中で、ベルリは今日戦ったことや、ビクローブや、軌道エレベータでの戦いを思い返す。

今まで、ほんの少し運が良かっただけで、その事実を突きつけられることもなくて。

顔を手で覆って、小さくベルリは呟いた。

「僕は…誰かを殺す覚悟なんて…あるのか…？」

その後、Gセルフから降りたベルリを迎えたラリーによって彼は人質という名実通

り、メガファウナに拘束されることになった。

第五話　エルフ・ブルックの脅威（1）

キャピタル・アーミィの襲撃から一夜明けて、アメリアの諜報部隊であるメガファウナには密命が届けられていた。

なんでも、この極秘任務はアメリア軍の総監であるグシオン・スルガンが提案した作戦の様で、その準備は夜明け前から目まぐるしい速度で進められていた。

「メガファウナは本国からの指令で艦隊作戦のための陽動行動をするんだ！だからさっさと荷物を積み込みなさいって言ってるんでしょうが！」

ドニエル艦長の声が艦内に響くのも無理はなかった。

食堂を兼ねた休憩室に閉じ込められっぱなしだったことに抗議した結果、機密ブロック以外の艦内の行き来を許されたノレドたちは、忙しなく搬入されてくるコンテナの様子をハンガーの端から眺めていた。

「あっちこっちコンテナいっぱい」
《ハコビコミ！ハコビコミ！》
　環境チェック用ロボットであるノベルが電子音声でそう繰り返す。コンテナの様子を見てたラライアが走り出そうとしたので、ノレドは彼女の首根っこを掴んで静止させた。
「ラライアは大人しくするの！」
　そんなやりとりを横目に、搬入チェックを行うアダム・スミスへ、メカニックであるハッパが話しかけた。
「Gセルフ用のバックパックと、各予備品はこちらで最後です！」
「ラージャ！それにしてもひっくり返してみればあれやこれやと作ったものだ」
「それだけヘルメスの薔薇の設計書ってのは凄いものなんでしょう？」

運び込まれてくる大型のバックパックはアメリアのカリブ海洋研究所で組み上げられたものだ。設計図にあったから作ってみたはよかったものの、グリモアやアルケイン、モンテーロなどには取り付かないバックパックも数多くある。

まだテストは出来ていないが、メカニックであるハッパがメガファウナに乗り込んでいるのだから、そのテストは艦内で行われることになるだろう。

「凄いのは、それを作った誰かさんが、だな」

ヘルメスの薔薇の設計書とは恐れ入るよ、とアダム・スミスはつぶやく。あの技術書のおかげで10年前では考えられなかったほどに戦争の様相は変わっていた。今はどちらがより多くの設計データを持っているのが戦局を左右するとまで言われてあるほどに。

どんどん開発される技術についていくこっちの気持ちも考えて欲しいものだと思わず愚痴を言いたくなる気分だった。

「ところで、あの人たちはいつまで走らされてるんですかねぇ…」

ハッパに言われて、アダム・スミスもハンガーの広いスペースを見た。そこでは複数人のクルーが同じ場所をぐるぐると走らされている光景が広がっていた。

「そろそろＭＳの移動も始まるから、キリがいいところで隊長が辞めさせるさ」

あの温厚な隊長が般若の顔をして天才と姫様を扱いてるんだ。変に関わるとこっちまで巻き込まれるぞ。それだけ言って自分の仕事に戻るアダム・スミスを見て、ハッパも残りのバックパックの搬入作業へと戻ってゆくのだった。

▼

「ぜぇ…ぜぇ…この…天才に…走らせるとは…まっ…たく…！」

「ハァ…ハァ…なんでこんなに走らなきゃならないのですかぁー!!」

何周目に突入したのかなんてぶっちゃけ数えてない。数なんてすぐに変わる。だから意味がない。

昨日までの余裕たっぷりな顔を青くしながら、それでも重い体を引きずって走るクリムとアイーダ姫。うむうむ、だいぶこたえている様だ。

「姫様は勝手に出撃した分で、クリム中尉は人質で勝手にＭＳの動作テストをしたからでしょうが！」

「ペースが落ちてるなんて愉快な事してるなぁ！そんだけペース落として余裕があるなら、あと十周は走られるだろ！さぁ、走れ走れ！」

ドニエル艦長の的確な指摘に便乗して、さらに周回数を上乗せする。最初は艦内ハンガー百周だったが、ペースが落ちれば追加、泣き言を言えば追加、不満を言えば追加と、すでに数字は元の百周から大きく変わって何周目か覚えていない。

まぁ百周走ろうがなにしようが、二人が反省の色を見せない限り延々と続く地獄のマラソンコースなのだがな！

ついでに体力と持久力も養わせるためにパイロットスーツ着用を言いつけてあるので、二人は完全にグロッキー状態であった。

「こんな…屈辱…は…ぜぇ…ぜぇ…！」

「パイロットスーツを着て…走るなんて…正気じゃありません…！」
「罰則も兼ねてるんだ、当たり前だろ！それに宇宙ではその服を着てＭＳを操縦するんだ！右に左！上と下からＧがかかり放題なんだから、持久力と頑丈さを身に付けておかないと身が持たないんだからな！わかったらあと十周加算だ！」

さらに周回数を増やされて絶望顔をする二人を蹴り上げる様に怒鳴りつける。やけになったのか、クリムとアイーダ姫はペースを上げてハンガーを駆けた。

「くっそぉおおーー!!」
「うわぁあーーー!!」

そんな二人を追い抜くのは、カーヒルやルワン、オリバーのＭＳ部隊のパイロットたち。そしてその後方には３人と同じように動きやすい格好をしたベルリが追従していた。

「で…なんで僕も走らされてるんですか!?」

起き抜けに促されるままカーヒルたちと共に走っていたベルリが、ここにきてようやく今の状況にツッコミをいれた。現役のパイロットであるカーヒルたちに遅れずに着いて来れるベルリの体力に驚くが、ここまで何も疑問に思わなかった彼の天然ぶりにも驚かされる。

「パイロットスーツ着用してないだけマシじゃないかな?」
「そういう意味じゃありませんよ!?」

訂正、カーヒルも真面目な風にして割と天然なのかもしれない。それを聞いてルワンとオリバーが吹き出して笑った。

「隊長が言ってただろう?君を拘束するって。こんだけメガファウナがとっ散らかってるんだから、パイロット組とまとめて面倒見てる方が効率がいいのさ」
「だからって、走らせることないじゃないですか!?」
「君もキャピタル・ガードの候補生なのだろう?なら走って持久力を養うのは悪い事じゃないさ。宇宙じゃ考えられないくらいスタミナとカロリーを消費するんだから」

体力作りと筋肉をつけるのはキャピタル・ガードの訓練でも必須科目だった。とくに地上にいるときの体育教義のほとんどは筋トレが締めている。軍人もそこは変わらないのか、とベルリが思っていると一気にペースダウンしたクリムとアイーダが前方から近づいてきた。

「カーヒル…私もう…だめ…」
「頑張ってください、姫様ー」
「走らないとまた追加されますよー」
「ファイトです、姫様」

途切れ気味で疲労困憊といった様子のアイーダに、カーヒルたちの心のこもってない応援メッセージを送って通り過ぎてゆく。実に三十五周目の周回遅れだ。通り過ぎたところでクリムが倒れた。あれは死んだのだろうか…。

「助けないんですか？」

バテバテのアイーダを横目に見ながら、ベルリは前を走るカーヒルにそう問いかけ

た。カーヒルもベルリが言いたげなことを何となく察する。だが、自ら虎の尾を踏みにいく馬鹿な真似はしなかった。

「助けたら、もれなくこちらもパイロットスーツに標準備品担がされて走らされるぞ?」

あの隊長が怒り浸透な顔でアイーダとクリムにペナルティを課せたのだ。たしかにアルケインに乗りこんだ彼女を止められなかった自分にも落ち度はあるが、それで庇って許してくれるほどウチのMS部隊の隊長は甘くはなかった。

「けど、カーヒル大尉はアイーダさんの彼氏さん、なんでしょう!?」

「なんだよ、ベルリ。お前惚れてんのか?」

「ほ、そんなんじゃありませんよ!?」

ルワンから言われて、ドキリと肩を振るわせるベルリ。その様子を見ていてもルワンの指摘は図星だなとわかった。襲ってきた海賊娘に一目惚れとは…そう思うカーヒルだが、もし自分がベルリの立場だったら惚れ直す自信があった。

「こらぁ！そこのパイロット組！ちんたら走って喋ってるとパイロットスーツ着させるぞ!!」
「「「「すんません!!」」」」

ラリーの一喝で締められたパイロット組とベルリも一心不乱にランニングを再開する。
その後、アダム・スミスからの苦情もあってパイロットスーツのフルマラソンは終わりを迎えるのだったが、クリムとアイーダはまさに打ち上げられた魚のような有様になっていたのだった。

▼

同時刻。
キャピタル・テリトリーであるビクローブでは、アーミィの新型機配備による簡略的な式典が催されていた。

　といっても、クラウンで宇宙から下ろされてきた機体が発進する様子でしかないのだが、アーミィに投資をする政治家たちに対するパフォーマンスも必要な要素でもあった。

「マスク大尉だな」
「よくもまぁ、新型のエルフ・ブルックを出してきたものだ」

　新型機「エルフ・ブルック」。アーミィが建造したエルフ・ブルの正式量産型であり、コストは高く付くがレクテンを武装改修したレックスノーや、カットシーとは異なり変形機構による単独航行に加え、高い火力を誇る機体と言える。
　その1号機のパイロットに選ばれたのが、調査部のクンパ・ルシータ大佐が推薦した「マスク」という通り名で呼ばれる人物だった。名の通り、顔の大部分をマスクで隠すという異様な出立ちではあるが、パイロットとしての成績は優秀だと言われている。

「あのマスクは？」
「調査部が開発した補助ユニットだとか。パイロットの操縦の補助もしてくれるそうですよ」

その様子を見ていたデレンセンは訝しげにマスクの様子を見つめる。たしかにあの機体の雛形となったエルフ・ブルのメインパイロットを務めているのはデレンセン本人であるが、そのパイロットを差し置いて、あの奇天烈な出立ちのパイロットを選ぶとは。

（クンパ大佐がああは言ってはいたが…果たしてどうなることやら）

本当なら変わって雪辱戦を行いたいところではあるが、デレンセン自身も軌道エレベータにてアンダーナットに向かわなければならない。戦力拡充のためにテストベットであるエルフ・ブルを受領するためだ。

「失礼、デレンセン大尉」

ふと呼びかけられて顔を向けると、そこには渦中の人物がのんびりとした様子で立っていた。

クンパ・ルシータ。

キャピタル・ガード調査部の大佐であり、キャピタルを代表し地球上の各国で禁忌が

守られているかを調査・助言する部門の長だ。
だが、その裏ではアメリアの動静を察知し、「キャピタル・アーミィ」を創設した影の主導者とも噂させれている。
「ヘルメスの薔薇の設計図」を元に新型ＭＳなどの製造を進めてはいるが、平時は敬虔なスコード信者かつ温厚な紳士で、誰に対しても礼を尽くす。
デレンセンからの評価は「なんとも胡散臭い人間」であった。

「あの子は使えるのですか?·宇宙から降ってきたという」
「ええ、おそらくは」

デレンセンの問いかけに、クンパ大佐はやんわりと答える。マスク大尉のエルフ・ブルックは1号機。その隣には組み上がったばかりの2号機が発進準備を整えていた。
乗り込むパイロットもまた、クンパ大佐が口添えした人間である。それもパイロットの出自は大佐自ら機密扱いとしているのだ。

（あの存在が、惰弱な地球人や世界に変化をもたらしてくれることを祈るか）

内心でそうつぶやくクンパ大佐の視線の先では、長距離航続を目的とした補助スラスターが接続されたエルフ・ブルックが今まさに飛び立とうとしている光景があった。

「マスク大尉、発進どうぞ！」

マスクの操るエルフ・ブルックが飛び立つ。それに続くように2号機がスラスターを吹かして大空へと飛び立った。

コクピットの中で、彼女は小さくつぶやく。

「この感覚…どこか知ってる。私は知ってるのか？」

二機のエルフ・ブルックとカットシーの編隊が北上してカリブ海を目指す。戦いの時はすぐ近くに迫りつつあった。

第六話　エルフ・ブルックの脅威（2）

スコード教の法皇に謁見していたウィルミット・ゼナム長官は、ビクローブにある地上最大の教会から外へ出て息をついていた。

はるか空へと伸びる軌道エレベータ。その運行の全てを任されている彼女には、長年クラウンの安全と運行時間を遵守してきた誇りとプライドがあった。

そしてなにより、彼女も熱心なスコード教の信者であり、エレベータの管理と運営を守ることで人類の平和と繁栄に貢献していると信じていた。

故に、黄金色のクラウンを緑と黒のアーミィカラーに染め上げられ、軍事的な目的のために貸切で運営されていることが我慢ならなかった。

「法皇はタブーは守られていると言ってはいるものの…私のクラウンはアーミィカラーに塗り上げられているんだぞ」

そもそもキャピタル・アーミィがタブーを破っているじゃないか！ウィルミットから

見ればアメリアもゴンドワンも、そして新設されたキャピタル・アーミィも、タブー破りをしているようにしか映らない。

ウィルミットがクラウンへ乗り込むと、簡易的な式典の場に出席していたキャピタル・ガードの調査部であるクンパ大佐と、アーミィのジュガン司令が最上列のクラウンに乗船しているのが見えた。

「大佐には、前世紀の技術資料であるヘルメスの薔薇の設計書を集めてもらうことになりますな」

「タブー破りを調査部にしろと言うならば、予算やスタッフはこれまでの数倍は必要となりますな」

「そういうことでキャピタル・ガードから人員を引き抜くことはやめていただきたい」

二人の間に割って入るようにウィルミットはそう言った。ただでさえ、クラウンの運行やフォトン・バッテリーの搬送、軌道エレベータの管理、点検もあるというのに、さらに人員を引き抜かれてはエレベータの運行に支障が出るレベルだ。

それに、半月後には年に一度のフォトン・バッテリーを宇宙から運搬する「カシーバ・ミコシ」の降臨祭があるのだ。スコード教の御神体である船が軌道エレベータの最上

ナットである「ザンクトポルト」に入ってくるのだから、その準備をするのにも人手は必要だ。

「息子さんを救出することでアーミィは必死なのですよ」

そうクンパ大佐が釘を刺してくる。そうだ、現に今アーミィが動く目的としているのが、海賊船の姫と一緒に人質として連れて行かれたことが原因でもある。

女手一つで育ててきた息子は並外れた洞察力と判断力、そして適応力がある。いくら海賊とは言え、人質を海に投げ捨ててサメの餌になどするとは…そこまで野蛮ではないはずだ。

しかし、そう言い聞かせても、ウィルミットにとってベルリという息子はかけがえのない存在だった。

(あんなものを飛ばすのだから。アーミィはやはりタブーを破ってまで戦争を始める気なのかしら)

クラウンの目と鼻の先を飛んでゆくダベーやカットシー部隊を眺めながらぼんやり

と思う。
　さっき飛び立った新型のＭＳも、長官である自分ですら知らされていなかった機体だ。あんなものを作って戦いをしようと言うのだから、ウィルミットがアーミィに不信感を抱くのは必然だった。
（あの機体が飛んでいった先に…ベルリがいる。なのに、私は何も出来ないなんて）
　ウィルミットにとって、たしかにクラウンの運行や管理はスコード教の信者としての使命ではあったが、それ以前に一人の母親として、息子の安否を気遣う女性なのでもあった。

▼

「ラリーさん！宇宙からの脅威って一体なんなんです？」

アメリアの艦隊から送られてきた物資の受け取り準備を進めていると、突然ベルリがそんなことを問いかけてきた。

すぐ後ろにいるアイーダに目をやると気まずそうに視線を逸らした。

「クリム中尉やアイーダ姫に聞かなかったのか？」

「海賊部隊に入れば教えてやるって言われました」

天才と姫さまらしいな。ベルリと会話を続けながら、搬入されたコンテナに固定用ワイヤーを張り巡らせてゆく。

これから弾道飛行をしようというのだから、重力は地上の五割程度でなる。重さ一トン以上もあるコンテナが軽々と動くのだ。人が挟まれて死なないように固定をする必要があった。

「豪胆だな。君はそれを知ってどうしたんだ？」

「だって気になるじゃないですかぁ！」

固定フックにワイヤーを通してテコの原理でワイヤーを張らせる。コンテナの固定

具合を確認し終えてから俺は興奮するような表情をしているベルリと向き合った。まったく、そんな顔をしながら誘拐した相手を見るんじゃないよ。

「あのなぁ、好奇心は猫を殺すとも言うぞ。キャピタル・ガードと言い張るなら、欲に手を出さずに大人しく人質をやってろ」

「そう言って連れ出したのは大尉じゃないですか」

俺がいつお前を連れ出したってんだ。あぁ、誘拐の時か。けどＧセルフが動かせるからってモルモットみたいに機体に乗せてＭＳ戦をさせたりはしないからな。ニコニコ笑うベルリ相手にため息をつくと、補給艦のスタッフがコンテナを下ろしながら大声で問いかけてきた。

「これどこに置きますー!?」

「それは６番コンテナだ！」

「手伝います！」

固定用ワイヤーを担ぐとベルリが申し出てきた。Ｇセルフはもちろん、ほかのＭＳに

もベルリ一人では触らせないようにするという実質監視状態ではあるが、ベルリ本人のラフさ加減でいまいち人質とかいう緊張感が感じられない。

「いいからお前は…」

「人質でも役に立つことはあるんですから」

ワイヤー固定くらいキャピタルの授業では当たり前なんですよ、そう言ってベルリは俺が担いでいたワイヤー固定具一式を奪い取ると、コンテナを搬入しているスタッフの場所へと走って行ってしまった。

「まったく…」

ベルリ・ゼナムという少年は何とも不思議な子供だった。敵や味方といった垣根を感じさせず、誰にでも興味を示し、誰とでも仲良くできる…いわゆる、友達１００人作れそうなタイプといった感じだ。

人というものは何かしろ領域というものがあって、普通なら踏み込まない。

だが、ベルリは人の領域を構わずに踏み込むし、逆に踏み込まれても柔軟に対応でき

てしまう。それが彼の強みであり、脆さでもあり、弱みにもなりかねない。そんな危うさがあった。

「補給艦は来るし、新型機のＭＳも来るし…どう見ても軍隊なんでしょ？」

一人でそんなことを考えていたら、ハンガーからＭＳデッキへとやってきた少女が話しかけてくる。たしか、彼女はベルリと共にきた学友のノレド・ナグだ。

「そう見えるなら、そうなのかもな」

彼女の探るような言い草を適当にあしらうように答えるが、途端にノレドの表情が険しくなった。

「そういう言い方は！」

「目に映る全ての真実を誰かから教えてもらえると思わないことだ。だが、君の直感はアテになると俺は思うよ」

キョトンとするノレドを横目に、さっさと他の搬入準備を進めてゆく。ある意味、今の言葉が答えなようなものか、と考えながら予備のワイヤーとシートを抱えて他のコンテナの固定作業に向かうのだった。

▼

「クリム中尉は、軌道エレベータの運行長官の息子がトワサンガの脅威を知らないと本気で思ってます?」
「クラウンの時刻表しか頭にない連中ですからね」
「トワサンガって、フォトン・バッテリーを宇宙から地球に配給するための、スコード教の神聖な場所なんですよね」

コンテナの裏にわざわざ隠れて言葉を交わすクリムとアイーダは、ギョッとした様子で自分たちが隠れているコンテナの上を見上げた。
そこではちょうどベルリが固定用のワイヤーを通す作業をしていて、彼はワイヤーを突っ張らせる工具を腰にぶら下げたまま、スルスルとコンテナの下へと降りてくる。

「それを信じてるんですか?キャピタル・ガードの人たちは」
「Ｇセルフがトワサンガで建造されたＭＳだとしたら、君はどう考えるのだ?」

呆れたような目をするアイーダだが、クリムは聞かれた以上、開き直ったようにキャピタル・ガードであるベルリに問いかける。だが、ベルリが答える前に、偉そうにベルリを見ていたクリムの頭にゲンコツが降り注いだ。
「あのなぁ、そう言ったことは話しちゃダメだろ」
「レイレナード隊長」

頭に悶えるクリムにため息をつきながら、他の固定作業を終わらせたラリーはベルリがやりかけていたコンテナの固定を再開する。慌ててベルリもラリーの補佐に入った。
「天才のこの私を殴るとは…」
「階級は俺の方が上ですよ、中尉殿。それとも機密漏洩で今度はパイロットスーツで水泳でもさせましょうか?」

語気を強めた抗議も、更なる圧力で封殺される。隣にいたアイーダもパイロットスー

ツフルマラソンの記憶を思い出して顔を青ざめさせていた。あんなに辛かったことを今度は水泳をするなんて…やったら死にます。

顔にそう書いてある二人を見て、ベルリは少し面白いな、と思うのだった。

「…トワサンガで建造されたＭＳだということを、ララライアが証言してくれれば歴とした証明になるのですよ」

「Ｇセルフを口実に宇宙戦争のきっかけを作るってか。まだ正式な宇宙戦すらやったことない軍に」

まるで小馬鹿にするような言い方をするラリーの言い方にクリムは余計ムキになった。

ラリー・レイレナード。彼の出自はクリムニックも知るところだ。

旧世界なのか、異世界なのか、同じＭＳを駆るパイロットとして段違いの経験を持つ故の発言だろうが、グシオン総監から目をかけられているからといってアメリア軍を馬鹿にするような発言は見過ごすわけにはいかない。

「貴方もアメリアの軍人なのでしょう?それなら宇宙からの脅威と戦う覚悟もあるはず

です」

「その覚悟とやらに無関係なキャピタル・ガードの候補生を巻き込むなと言ってるんだ」

無論、ラリーとしてもアメリアという軍属に属する以上、軍人として戦わなくてはならない場面で臆することはない。そこがアメリアが経験しない宇宙規模の戦争であったもしても。

果たさなければならない使命を果たし、生きて伸びることが今も昔も変わらない信念だ。

しかし、そこに無関係な人質まで巻き込もうとするクリムの向こう見ずさをラリーは指摘していたのだ。未来のアメリアを担う人間がしていい行動ではないと諌める。

それに反発するのが若さゆえというものもあるのだろうが、好き勝手を許せば規律もへったくれもないのだ。

「中尉、この受け取り表にサインを」

剣呑だった二人の空気をぶった切ったのは補給艦の護衛に着いてきていたアメリアのパイロット、ミック・ジャックだった。データ端末をクリムの方へ差し出してから、ラ

リーの方を一瞥する。

諌めるのが上官の役目なら、仲裁に入るのも同僚の務めというわけだ。

「ご苦労だな、ミック・ジャック。今日もまた違うＭＳじゃないか」

「あぁ、ヘカテーですよ。見た目と違って取り回しのいい機体です。では、私は艦隊に戻ります」

爽快に現れて、爽快と去ってゆく彼女を見送りながら、ラリーは新型機であるヘカテーを見上げた。機体のスラスターバランスを見るからには大気圏内用ではなく、宙域対応型に見える。おそらく、これから始まる軌道上の作戦に向けた機体の準備が本国では進められているのだろう。

《本艦はこれより積み上げ作業を中止する》

ラリーの思ったことを裏付けるように、出撃準備を進めていたメガファウナに急遽発進命令が降った。搬入物資のチェックをしていた副長が文句を言いながら応答していると、ヘカテーも急いで補給艦へと戻っていく。

「ええ!?Ｇセルフのそれ、出したままなんですか?!」

艦橋に上がるためにハンガーへと入ったところで、ベルリはＧセルフの背面から迫り出しているコア・ファイターを見て思わず声を上げた。色々見なきゃならんことがあるの！とハッパもコア・ファイターの部品やコンソールを弄っている。

Ｇセルフは現状、ベルリとアイーダ姫しか触れたない特殊な機体だ。人質として、ＭＳに乗せて外に出すわけにはいかないが特殊な機体の技術協力としてベルリに協力はしてもらっていた。もちろん、ラリーの監視と立ち合いの元で。

「この警報はなんです?」

「この船が大気圏のギリギリを弾道飛行する予定が繰り上がったのさ。こっちは宇宙艦隊の囮をやることになるのだからな」

艦橋に直結する艦内のエレベーターに乗りこみながら、ベルリが言った言葉にラリーがぶっきらぼうに答えた。搬入された物資の固定は早めに済ましてあるから大丈夫だが、ＭＳの調整やメンテナンスはまだ追いついていない状況だ。

「この船、やっぱり軍隊の船なんですね」
「ベルリ君。君はアメリア軍に入隊するつもりはないか？」
「中尉の位をくれるなら考えますよ」
「それだと私と同じだッ」
「弱いものいじめされるのは嫌ですからね。あ、ラリー隊長の部下なら良いですよ」

そう言ってベルリはにっこりとラリーの方を見て微笑む。対するラリーはうんざりした様子で顔を手で覆って天井を仰いでいた。

「ですって」
「勘弁してくれ、懐かれるようなことしてないんだがなぁ」

どうだか、と呆れた目でアイーダ姫に睨みつけられるのがどこか納得できなかった。

▼

「マスク大尉、デレンセン大尉の通ったコースをトレースしてますが」

ビクローブから北上したエルフ・ブルックとカットシーの編隊は、予定通りカリブ海の無人島に隠れているメガファウナに向けて飛行を続けていた。

戦闘を飛ぶマスクのエルフ・ブルックに通信をする士官はあたりを見渡しながら索敵を行なっている。ミノフスキー粒子が散布された中ではレーダーなんて役に立たない。己の動体視力が最大の武器となるのだ。

「このあたりには船が隠れられる場所はあるか？」

「かなり多くありますね。無人島地帯ですから」

点在する岩肌剥き出しの島々を注意深く観察する。それに連動してマスクが補正をかけてくれるのだ。調査部もＭＳばかりに気を取られている部署ではないのだな、とマスクは言葉にしないまま感心していた。

（このマスクは一種のバイオセンサーを搭載していると聞くが、どうやらリミッターがかかっているらしいな）

「2号機！先行するな！」

マスクのエルフ・ブルック1号機を追い抜いたのは、2号機だった。コクピットにいるその人物は、まだモニターにも捉えられていないはっきりとした感触を実感している。

この先にいる…感じる…強い気配を。

スラスターを吹き、さらに飛翔するエルフ・ブルック。

そして、モニターは独特な赤色が特徴な宇宙戦艦、メガファウナを完全に捉えたのだった。

第七話　エルフ・ブルックの脅威（３）

「正体不明機が接近してる？」

艦橋に上がってから、副長が捉えた信号がメガファウナに向かって飛来するアンノウンだと判断したドニエル艦長は淡々と答えた。

「ええ、ですから本艦は囮として予定を繰り上げ、近づきつつあるアンノウンに向かって航行しています」

「不明機の数は」

「２個編隊ほどです。どう見ます？」

モニターの前にいるカーヒルが問いかけてくる。ミノフスキー粒子が散布される前に捉えることができた機影。なんでも輸送艦を護衛していたミック・ジャックのヘカ

テーが哨戒していたタイミングで偶然発見できたらしい。
隊列の後部はサブフライトシステムの飛行部隊だろうが、先行する大型飛行物体の正体が判断できない。機体の大きさから見ても、アメリアの機体照合システムに当てはまらないところを見て、相手は新型のＭＳかＭＡ…または戦闘機と判断するのが妥当だろう。

「相手の取っているコース。これは昨日敵が撤退したコースだな。となると、キャピタル・アーミィか」
「昨日の今日で攻めてくるなんて…アーミィの戦力はそんなにあるんです?」

ベルリの疑問に、それはこちらが聞きたいくらいだとクリムが苛立った様子で言った。先行する機影は、どうやらベルリも知らない機体らしい。
アメリアやゴンドワンも、軍部が力を持ったとはいえこんな短期間に新型機を投入してくる軍事力は有していなかった。宇宙をよく知るキャピタル・ガードから派生したアーミィなのだから、当然と言えば当然なのかもしれないが、それでも異様な戦力増強には変わりはない。

「本艦が近づいてくるアンノウンと戦闘し、囮となることでカーヒル大尉が提案したように宇宙艦隊がキャピタル・タワーを占領することができれば…」
「キャピタル・タワーを占領する!?本気なんですか!?」

ドニエル艦長の言葉を遮るように、ベルリが驚愕の声を上げて詰め寄ろうとしたが、咄嗟にカーヒルとクリムがベルリの行手を遮る。
キャピタル・ガードとして、神聖なるタワーを制圧すると聞かされて黙っているわけにはいかないのだろうが、ここは個人の意見を散発する場面ではないとベルリに態度で示した。

「まぁ、こうやって宇宙に上がれる船をアメリアが作ればそういう発想にもなるだろう」
「キャピタル・タワーは宇宙と地球を結ぶへその緒で神聖なものなんですよ!?そんな場所を占領すればバチが当たって祟られますよ!」

はぁ、祟りかぁっとドニエル艦長はうんざりしたように帽子を深く被った。スコード教という宗教の信者なのだから、当たり前の感覚なのかもしれないが、こちらとしては信じる神は居ないのだ。

それに、スコード教の教えに準じていては見えないものもある。

「宇宙の脅威ってものを君は知っただろう。ベルリ・ゼナム。Gセルフのあの性能は地球にある科学技術では実現できない。装甲からシールドを展開して、そのシールドはカットシーのビームサーベルの出力を何倍も上回っていたんだ」

現に、Gセルフは規格はヘルメスの薔薇の設計書に載っているようなユニバーサル・スタンダードの規格で製造はされているが、機体装甲や、ベルリが行った不可視のフォトンシールドの原理など不明な点が多すぎる。

技術解析ができないほどの機体は、宇宙からラライヤと一緒に落ちてきた上に、ベルリとアイーダしか現在は操縦できないのだ。

「トワサンガという宇宙の脅威ってやつが本気を出せば、キャピタル・タワーも、クラウンも無事では済まない。そうなれば運搬しているフォトン・バッテリーは失われ、エネルギーの供給源を奪われた人類は滅ぶしかない」

「だからと言って、タワーを占領する理由にはなりませんよ!」

それでも抗議するベルリに、カーヒルやドニエル艦長は言い聞かせるような声ではっきりと言った。

「占領ではない。今後はキャピタルに変わってアメリア政府がタワーを管理、運営するのだ」

「そんな理屈を！」

「納得ができないなら君は人質でいてもらう。拘束していると俺は言ってるよな？」

釘を刺すような声に歯を食いしばるベルリ。残念だが、もう個人的な感覚でどうにかなる状況ではなくなっている。アメリアの宇宙艦隊が周回軌道上へ上がると言う現実と、宇宙からの脅威が確認された段階で、キャピタル・タワーとスコード教の神話は崩れ去ったのだから。

▼

エルフ・ブルックに乗るマスク大尉率いるキャピタル・アーミィの編隊はすでに海面を離れたメガファウナを捉えていた。
メガファウナはミノフスキー・クラフトである翼端を展開しグングンと周回軌道へ上がるために上昇を始めている。

『海賊船め。宇宙へあがろうという言う魂胆か！』
『マスク大尉、私が先行して注意を引きつけます』

先行するエルフ・ブルック1号機を庇うように出たのは、2号機に乗るパイロットだ。
レイカ・マツオカ少尉。マスク大尉と同じく、クンパ大佐に推薦される形でエルフ・ブルック2号機を与えられた彼女は、マスクの副官としての役目を担っていた。

『マツオカ少尉は私に随伴しろ！貴重なエルフ・ブルックを粗末に扱うなよ！』

前に出ようとするレイカの機体を押しのけて、マスクはさらにメガファウナに接近する。調査部が与えてくれたマスクはいい性能をしている。初めて触る機体が教習で慣れ親しんだレクテンの如く手足に馴染む。

『海賊め！宇宙になど上らせるものかよ！』

対するメガファウナも、追従してくるマスク部隊への迎撃作戦を始めようとしていた。アメリアから補給されたフライスコップが先行し、グリモアも後に続く。

尖兵隊が出た後、アイーダの乗るGアルケインも空中戦準備をしようとしていたが、即座にアダム・スミスに叱責された。

「アイーダ姫は甲板で船の護衛です！」

「何故ですか⁉アルケインも飛べます！」

「冗談言わんでください！」

Gアルケインのスラスターはまだテスト出来てないのです！後ろにいるメカニックのスタッフも叫んで、無理矢理でも空中戦に出ようとするアイーダを引き止めていた。

「ですが！」

扱いに不満を臆面なく出すアイーダのアルケインへカーヒルが手を置き接触回線で落ち着くよう促した。

「言い訳は聞きません！第一、テストもしていない機体で空中戦なんて無謀です！それともまた走らされたいですか?!」

ここで無理やり出れば、またあの地獄のようなパイロットスーツマラソンをする羽目になる。そう言われて思わず口つぐんだアイーダを横目に、カーヒル率いるグリモア部隊も出撃準備に入った。

「ルワン機、オリーバー機出ました！カーヒル機は船の護衛につきます！」

「本隊は下から来るぞ！」

メガファウナから反転して迎撃に出た先発隊は、メガファウナから見て下から敵部隊が上がってきていることを捉えていた。

その部隊を率いるクリムが先陣を切って飛んでくるカットシー部隊へ攻撃を仕掛ける。

「展開が遅いから迎撃をするんだ!!」

『我々の展開が遅いように見えるだろうが、こちらのカットシーの編隊は伊達ではない!!』

放たれたビームの先行を前に、バラバラに飛んでいたカットシーの編隊は身を隠すように縦一列に飛んでゆく形へと切り替えた。先頭の一機がビームをシールドで防ぐと同時に、後方にいる別のカットシーが反撃を繰り出す。

一矢乱れぬ反撃はグリモアが乗るフライスコップを貫いた。

「やられた!?なにぃ!?」

爆発に気を取られたクリムのモンテーロの前に、マスクのエルフ・ブルックが立ち塞がった。

『変形をするのだよ!!この機体は!』

音を立てて飛行形態から人型へと変形してゆくエルフ・ブルック。だが、その手にはビールライフルやシールドは備わっていない。

武装がない機体で目の前にやってきてる相手に、クリムはニヤリと笑みを浮かべ、ジャベリンを構えた。

「変形して武器なしでやってくるとはなぁ!!」

武器がないと判断して真っ直ぐに懐へ突っ込んでくるモンテーロを前にマスクの怒りは一気に吹き上がった。それは油断というものだぞ、アメリアのモビルスーツ！

『ふざけているのかぁ!!』

怒号のような叫びと共にエルフ・ブルックの両肩、両腕部に備わるレーザー砲が火を吹いた。おびただしい数のビームの嵐が迂闊に近づいたクリムのモンテーロへ浴びせられ、その一撃は構えていたジャベリンとビームライフルを完全に破壊したのだ。

「ビームだとぉ!?ちぃ！ライフルを直撃!?」

ビームの網の中にいる虫のようだなぁ！マスクは高揚した感覚のまま、トドメとエルフ・ブルックの両手をバンッと合わせてビームの狙いを定めた。

『はーっはっはっ!!これで死ねや！宇宙海賊!!』

「ジャベリンはまだある!!」

収束されたビームの一閃を何とか避けたクリムはエルフ・ブルックの頭上を取って予備のジャベリンを装備する。だが、猛追するマスクの猛攻に耐えれるほどクリムの防御は堅牢ではない。

あわやと言う場面であったが、追撃しようとするエルフ・ブルックの横合いからビームの光が差し込まれた。

邪魔が来ただと!?マスクが振り向いた先には３機のグリモアとフライスコップが迫ってきていることを捉えた。

「クリム!!天才が前に出過ぎですよ！」

「カーヒル！援護するぞ！」

グリモアはアメリアの標準的な機体ではあるが、その分信頼性は高い。
構えたショートバレルのビームマシンガンは、クリムを捉えようと迫るマスクを牽制するには充分な威力を発揮した。

「カーヒル大尉の機体が助けに来てくれたのかぁー!?」

衝撃で機体バランスを崩したモンテーロ。３機のグリモアに対応しようとするマスクのエルフ・ブルック。
その間に滑り込むように、もう一機のエルフ・ブルックが参戦した。

『マスク大尉！迂闊です！』
『マツオカ少尉か…!?あの動き！』

近づいてくるルワンのグリモアを、レイカが操るエルフ・ブルックがレーザービームで牽制する。ビームの槍を掻い潜ったルワンであるが完全にコンビネーションが崩された。

「ちぃ！変形する機体は二機もいるのか!!」
「ルワン！こういう時はぁー!?」

カーヒルの声に呼応するように、ルワンとオリバーのグリモアがマスクとレイカのエルフ・ブルックを取り囲んだ。

「囲い込んで数で対処する、です!!」

数が多いなら、それで取り囲んで的を絞らせずに撹乱させ、相手の油断とミス、迷いを誘う。その瞬間に仕留める戦術は、大陸間戦争で何度もこなしてきたコンビネーションなのだ。

『囲まれた!?回り込んで…私を拾ってくれた大佐に恩返しをするんだ！邪魔をしないで!!』

クンパ大佐に拾ってもらった恩義を返せないままでは死ねない！レイカはスロット

ル引いて機体を横へ回転させながら、両腕と両肩のレーザービームを放った。それはまるでビームを撒き散らすコマだ。

「全方位にビームの嵐かよっ!!」

囲い込んで展開していたカーヒルたちを蹴散らすように放たれていたビーム。

その回転するレイカのエルフ・ブルックを横から突き刺すようなビームが飛来した。

『横合いから邪魔がくる!?』

ビームを撒き散らしていたエルフ・ブルックを止めたのは遅れてメガファウナから出撃したラリーの白い機体、ローンズーだった。

「無事か、カーヒル!・ルワン!・クリム中尉はなんのためのスラスターですか!動き回れば当たりはしない!!」

「隊長!」

「レイレナード大尉か!!」

その機体を目撃したレイカの感覚に、何かが触れた。言葉にし難い、ざわざわと心を逆撫でしてくるような嫌な感覚だ。それをレイカは知っている。どこかで体感した感覚だった。

『この…感覚…!?』

動きが鈍った隙にラリーの元へと離脱するカーヒルたち。ラリーはそのままグリモア編隊を通り過ぎて動きが止まったエルフ・ブルックへとライフルを構えたまま距離を詰めてゆく。

「二機の新型機!?アーミィの奴ら、ベルリを助けることを口実に新型機のテストを…」

『そうか、貴方が感じさせてくれたのね！強い感覚を!!』

突如として、レイカ・マツナガが駆るエルフ・ブルックが猛威を振るう。

全身のビームレーザー砲から光を垂れ流して、ラリーのローンズーの前へと立ち塞がったその姿は、まさに脅威と呼ぶにふさわしいオーラを纏っていたのだった。

第八話　乱舞、Ｇセルフのコア・ファイター！（１）

彼女もまた、宇宙から降りてきた人間だった。

クンパ・ルシータ大佐は、まだマスクになる前であったルイン・リー候補生にそれだけ告げて彼女を預けたのだった。

当の本人は本質をよくわかっていないような顔であったが、それも仕方ないことだろう。キャピタル・ガードの候補生として宇宙と地球の境界線を行ったり来たりしているのだ。

宇宙から降りてきたと言えど、それが特殊なことだと捉えられない。それほどまでにタワーに関わる人間というものは地球と宇宙の境界線が曖昧になっているのだと思う。

「レイカ・マツオカ…か」

キャピタル・アーミィとして登録された彼女のデータが映し出された端末を詰りなが

ら、クンパは息をついて調査部の執務席へも埋もれる。
皮肉なことに、彼女が宇宙から〝降ってきた〟のも、Ｇセルフが『ラライア・マンディ』と共に降りてきた時と同じであった。
そして、アメリアの手に渡ったもう一機の不明ＭＳと同じように。
アメリアとゴンドワンの空戦の只中に現れた謎のＭＳは、圧倒的な機動性と攻撃性を兼ね備えていた。数で勝っていたゴンドワンのＭＳや航空機部隊を言葉通り蹂躙したその機体に誰もが恐怖を抱いただろう。
あの戦闘以来、その姿は観測されてはいないが間違いなくアメリアの手に渡っているはず。最初はなんとも惜しいことをしたと心底思っていたが、まさかそれと同じような境遇が自分の元に降りかかってくるとは…。
陰謀屋してこの席に座っている自分ですら、その驚愕を抑えることは困難であった。
「彼女がもたらしたあの機体…解析は進めているが、トワサンガやビーナス・グロウブで製造される旧時代のＭＳの技術系統とは異なる…」
その機体は、クンパ自身がもたらした『技術』からも逸脱した代物であった。まさに人の手に余る技術。ユニバーサル・スタンダードが確立される前の時代のものか…ある

いは…。

唯一解析できた機体の制御システム。そのコード番号の頭文字を順に読み上げたとき、熱心なスコード教の信者であった技師は悲鳴のような声をあげたのだ。

「ガンダム」

古くから封印されてきた禁忌の名前。

スコード教の経典や、古い文献に乗る悪魔の名前。かつて人類を滅ぼす手前までの悲劇を招いた忌むべき名前であった。

「そして、彼女が唯一覚えている記憶が、敵がガンダムであると言うこと…」

ガンダムの名を持つ制御システムによって確立され、未知の技術力で建造された機体。考えられるのは過去からの遺産なのか、それとも外宇宙から飛来したものなのか。

だが確かな事は、まさしくこれこそが宇宙からの脅威と言える代物であろう。

「彼女こそが本当に〝宇宙から降りてきた者〟だとすれば、私の目論見もまた必然と呼

べる結論だったかもしれんな」

ビーナス・グロウブで、〝ムタチオン〟を甘受しなくては生きてはいけない生活に絶望した。そして、ヘルメス財団の理想と計画に反発し、「人類は地球で弱肉強食の生活を行って種を強化すべき」という思いを持って今の自分がいる。

その理想を体現する存在が〝宇宙からもたらされた〟とするなら、それもまた人類が歩むべき姿のひとつなのだろう。

「せいぜい、私の目的に力を入れてもらうとするか。レイカ・マツオカ…いや」

彼女の名は偽り。本当の名前は、彼女が失った記憶と共に深く、深く閉ざされている。彼女が持つべき本当の名は、文字通りこちらの手中にあった。

復讐の女神。

サレナ・ヴァーン。

▼

「ハッパさん！これまずいですって！」

空戦の真っ只中なんですよ!?そう言ってコクピットに乗り込んでいるベルリに、ハッパは制御ユニットが入った点検ハッチから顔を上げて答えた。

「Gセルフのコア・ファイターをドッキングさせるだけでいいんだ！バカでもできるし、このままじゃ危ないでしょうが！」

「だって、戦闘中ですよ!?」

「そのために貴様はノーマルスーツを着ているんだろうが！」

それがまずいんですって、というベルリの言葉を無視してハッパはGセルフのコア・ファイターのセッティングを続行する。ブリッジから戦闘に備えてメガファウナの倉庫に避難する際に、ハッパに呼び止められたベルリは、彼の促すままにノーマルスーツ

を着てGセルフのコクピットに座らされたのだ。
コア・ファイターとは言え、起動シークエンスを実行できるのはベルリとアイーダだけだし、アイーダはアルケインで絶賛対空砲台をやっているのだから、起動させる役目としてハッパは手持ち無沙汰なベルリに目をつけたのだ。
「ラリーさんに見つかったら僕までパイロットスーツでフルマラソンをさせられちゃいますよぉ!!」
この後のペナルティに震えるベルリではあるが、メカニックのハッパからしたらそんなもの眼中になかった。

▼

ベルリの悲鳴が響くメガファウナ上空では、ラリーの駆るローンズーが、エルフ・ブルックから目まぐるしく放たれるビームの嵐を紙一重で掻い潜っていた。
一本ごとのビームの出力は弱いとは言え、当たりどころが悪ければ撃墜される。そん

なビームであやとりをするような真似をされたらたまったものではなかった。

「こいつ、急に動きが!?ええい、オートマチックではやられる!!」

ラリーはすぐさまローンズーの制御システムの一部をマニュアルに切り替えた。補助スラスターと両肩部に備わるスラスターを小刻みに吹かしては右へ左へと機体を挙動させてビームの嵐を避けてゆく。

とにかく相手の動きを牽制しなければカーヒルやルワンたちも身動きが取れない。

「動きは早いが、そこっ!!」

ビームの一閃を横へ飛んで躱したラリーは、狙いを定めた。機体中央部、骨組みのような外見のエルフ・ブルックの中心をライフルで穿てば多少は大人しくなるはずだという判断からだった。

『早い!けどその速さは知ってるのだから!』

放たれたビームを見たレイカは、凄まじい集中力と反射能力を発揮した。肩から放たれるビームの出力を落として、直撃コースだったビームの射線からわずかに機体を逸らした。

ラリーの放ったビームはたしかにエルフ・ブルックに当たったものの、その被害は左肩のビーム砲を兼ね備えた装甲を吹き飛ばすのみに留まった。

「外した!?しかもローンズーの出力に追いついてくるのか!?このパイロットは!」

オートマチックでは効かない機体のレスポンスを、マニュアルでさらに高めたと言うのに、その機動性にレイカのエルフ・ブルックは間違いなく着いてきているのだ。

嫌なプレッシャーを放ちやがる!追従してくるエルフ・ブルックにジャベリンを投擲するが、その一撃はハエを払うかのように防がれてしまった。

（レイカ・マツオカ少尉。クンパ大佐から面倒を見ろと押し付けられたが…初めて会った時は生真面目なパイロットだと思っていたが）

凄まじい空戦を展開するレイカのエルフ・ブルックを眺めていたマスク。その背後目掛けて、戦線に復帰したクリムのモンテーロが突撃を敢行する。

「背後がガラ空きだなぁ！」

油断していると判断して突っ込んだクリムの眼前に、振り向いたマスクのエルフ・ブルック。その指先にはチャージされたビームの燐光が瞬いていた。

誘われたのか!?

感じ取った感覚よりもさきに、真上から急降下してきたラリーのローンズーが、硬直したクリムのモンテーロを文字通り蹴飛ばす。

その僅かな判断が遅れていたら、モンテーロのコクピットはエルフ・ブルックのビームにより貫かれていただろう。

「クリム！迂闊に近づくな!!」

「私を足蹴にするのか!!」

口論をしている暇はない。ラリーが機体の制御をかけると、そのすぐ先には両手の

ビーム砲を構えたレイカの姿があった。そして、その姿はメガファウナの甲板にいるアイーダにも見えている。

「モニター、捉えた!当たってぇ!!」

ロングビームライフルから出た光の帯はラリーのすぐ脇を過ぎてレイカのエルフ・ブルックへと伸びる。

『後ろから迫る感覚は邪魔なんですよ!前から来る!!』

回避は間に合わない。そう判断してからレイカの動きは早かった。構えていたビームの標準をわずかに変えて、アルケインから向かってくるビームの光に狙いを変えのだ。

ロングビームライフルの威力は絶大でいるが、距離が開けば開くほどビームは大気に拡散して威力は落ちる。アイーダが狙ったのは射程距離ギリギリからだ。

その距離だった故に、出力で劣るはずのエルフ・ブルックのビームでも相殺できたのだ。

「うそ!?直撃できない!!え、通信?はぁ!?ベルリを出す!?正気なのですか、艦長!!」

接触回線で繋がったドニエル艦長の声にアイーダは思わず驚きの声をあげた。格納庫を見れば、スラスターをわずかに吹かしているような光が見えていた。拡大すると、Gセルフのコア・ファイターのコクピットにベルリが座っていたのだ。

《今は何より戦力が欲しい!今彼はコア・ファイターに乗ってるのです!サポートは隊長がやってくれるはずです!》

「そんなの、聞こえていない本人に言ってください!」

《ミノフスキー粒子が出てるんですよ!!》

通信を妨害し、レーダーや誘導システムすら破壊するミノフスキー粒子によって、ラリーは完全に通信を遮断されている身だった。

「ちぃぃ!!こいつはぁ!!」

ビームライフルで牽制しながら、もう片手でビームサーベルを引き抜く。
前に迂闊に出てきたカットシーを切り裂くと、ビームをたっぷりと蓄えたレイカのエルフ・ブルックが、ラリーの前に立ち塞がった。
『エルフ・ブルックはレスポンスが軽い!自分の体とイメージがしっかり付いてきてる!ふふふ、あはははは…!』
圧倒的にこちらの機体の方が強い!そんな確信めいた高揚感に身を委ねているレイカ。
怪物のように立ち塞がるエルフ・ブルックを前に、ラリーが攻めに入ろうとした瞬間、一機のサブフライトユニットがレイカの前に飛び出した。
「フライスコップ!?囮になるのか!」
そんなの無茶だ!そんな声を上げる前に、ライカはエルフ・ブルックに備わる指先レーザーの威力を上げるために両手の平を勢いよく合わせていた。

『ビームの雨に打たれにきたって！』

そこから出力されるビームの光。一定距離で保たれた光の束は、ミノフスキー技術によって拡散しないよう制御されてきたのだ。

『手から生えちゃうビームサーベルなんだから!!』

嬉々として振るった一撃は突撃してきていたフライトスコップのコクピットと機体胴体を難なく切り裂いて見せたのだ。

「なっ…高出力のビームでフライスコップを切ったのか!?」

それはもはやレーザー砲やビームではなく、エルフ・ブルックの指先から放たれる巨大なビームサーベルなのであった。

第九話　乱舞、Ｇセルフのコア・ファイター！（２）

私、アイーダ・スルガンは今、メガファウナの甲板上で攻め入るキャピタル・アーミィの飛行部隊との対空迎撃を行っています。

「うわぁあああ!?す、滑るぅう!?」

そして、私の背後にあるハンガー内ではＧセルフのコア・ファイターが宇宙用耐火マット上で右往左往と暴れ回っています。

「ベルリ・ゼナム君!?なにをやっているのですか！」

迫ったキャピタルのカットシーの羽を狙撃ビームライフルで撃ち抜いたアイーダは声を荒げた。こっちは遊んでいる場合ではないというのに、Ｇセルフのコア・ファイ

ターはまるで言う事を聞かないじゃじゃ馬のような状態だ。

「このコア・ファイターの操縦が難しいんです!!」

《姫様!ベルリくんのコア・ファイターをGセルフに押し込んでやってください!》

飛び込んできたドニエル艦長の声に、アイーダは思わず素っ頓狂な声をあげてしまった。こっちは今まさにキャピタルのMSをメガファウナに近づけないようにするために必死なのですよ!?

「そんな無茶ですよ!?だって、勝手に飛び回ってるんですもの!!」

だいたい、コア・ファイターがスラスターを吹かして暴れまわっているのだ。メガファウナも高高度飛行に備えてグングン上昇している。足場も安定しない中で、暴れ回るコア・ファイターを捕まえてGセルフに突っ込むなど無茶以外の何者でも無い。

そんなやりとりをしてる最中、折り畳まれていたコア・ファイターのウイングが展開した。

「ウイング展開!?と、飛ぶのか!?」

グンッと押し出されるような感覚とともに、ベルリを乗せたコア・ファイターはアイーダのアルケインの股下を潜り抜けて大空へと飛び立ったのだ。

「飛んじゃってーー!?」

「うおぉおおあーー!!」

飛んで、キャピタルのカットシーが目の前にいるのだから!!

「こんなのぶつかっちゃうでしょう!?」

咄嗟に引いたトリガーに連動して、目の前にいたカットシー目掛けて機銃が放たれる。突如として上がってきた戦闘機に目が奪われたことと、放たれた機銃にふらついたカットシーのおかげで、ベルリのコア・ファイターは正面衝突をなんとか避けることができた。

『何だ!?今の機体は!?』
「Gセルフのコア・ファイターか!?」

敵味方入り乱れる空域を一直線に離脱してゆくコア・ファイターを、カーヒルやグリモアを相手にするマスクも目撃した。
戦闘機は大気圏用グライダーと同じ理論なんだから操縦できるようになれよ、とベルリが操縦桿を握りしめる。と同時にそばを通ったラリーとレイカの機体の風圧で煽られ、コア・ファイターは姿勢を崩した。
しこたまコンソールに頭をぶつけたベルリは、目が回るような光景に目を向けた。
「あっちがラリー隊長で、こっちはカーヒル機で…ええ!?そりゃだめでしょう!?」
状況を把握したときにはすでに手遅れだった。迂闊に近づいたクリムのモンテーロの頭部を、マスクのエルフ・ブルックが鷲掴みにしたのだ。
「ちぃ!メインカメラが!?」
『ふはははは!!海賊のモビルスーツをガラクタにしてやろう!!文字通り、貴様らにはジャ

ンクがお似合いなんだってなぁ!!』

出力にものを言わせてモンテーロの頭部をねじとったマスクは、トドメと腕部のビームの銃をモンテーロに向ける。このままじゃあの天才パイロットが落とされる!

「このぉおお!!水の玉だ!」

咄嗟の判断で、ベルリは救命装置とスラスターの冷却材としても使われる水の玉を、クリムの機体に迫るエルフ・ブルックの頭上に投下した。

人が一ヶ月生き延びることができる水が高密度に内包された「水の玉」は、その内部の水圧をすべて開放してビームを打とうと迫っていたマスクの機体を水で包み込んだのだ。

『な、なんだ!?海に落ちたのか!?み、水だとぉ!?』

水圧を想定されずに製造されたエルフ・ブルックのコクピットには、隙間から水が吹き出してきていた。それに気取られたマスクの隙をついて、頭部を失ったモンテーロ

と、ベルリのコア・ファイターは一気に離脱する。

「ベルリ・ゼナム！戻ってGセルフとドッキングなさい！」

眼下を見ると、アイーダがアルケインを使ってコア・ファイターが引っこ抜かれているGセルフを甲板に引っ張り出してきていた。

『あの機体のコア・ファイター？行かせると思わせない！』

降下しようとするコア・ファイターに目をつけたレイカのエルフ・ブルック。だが、その前にラリーのローンズーが立ちはだかる。放たれたビームの雨を、ラリーはビームサーベルを回転させることでコア・ファイターへの被弾を防いでいた。

「ベルリ！この際なぜ出てきたのかは問わん！とにかくメガファウナに戻って…この機体、しつこい!!」

『私を前によそ見をしたら死んじゃうんですよ!!』

横合いから邪魔に入ったローンズー。忌々しい機体め、とレイカは大きなエルフ・ブルックの足でビームサーベルを構えたラリーを蹴飛ばした。

「こいつ!変形する板っぺらの分際で!!」

蹴られた瞬間、ラリーもビームサーベルを振るった。切先がレイカの放った機体の脚部を掠め、そこを目印にするように吹き飛ばされつつもビームライフルで撃ち抜く。

『きさまぁああ!!』

展開された透明のエアバッグに顔を埋まらせながらレイカは機体を安定させて離脱する。これで少しは時間が稼げるはずだ。

「ラリー隊長!戻るって言っても、あの対空火砲をすり抜けろって言うんですか!?」

泣き言は戦場では聞かんぞ!、と怒号で返すラリーの声に尻を叩かれながら、ベルリはコア・ファイターを操縦してメガファウナの対空火器の攻撃をすり抜けて旋回する。

だが、あまりにも速度が速い。それにベルリという少年は戦闘機によるドッキングシークエンスなど経験がないのだ。アイーダは動かないようGセルフを支えながら絶望したように叫んだ。

「やっぱり無茶よ!・ええ!?あの子、本気!?」

機体制御が効かない!?ベルリはドッキングする速度とは思えないコア・ファイターの制御が出来ないことに焦っていた。

オ、オートマチックなんて!?嘘!?そんな…ぶつかる!!

光センサーで誘導されているとは言え、ぶつかればコクピットが潰れそうな速度のままベルリの恐怖を無視してコア・ファイターはGセルフの背部から一気にドッキングを果たした。

「…ツ!ドッキングセンサー!・エレクトリックシステム、フィックス!!機体チェックは…ええ!?」

「さっさと上がって撃墜してこい!」

ベルリが見上げると、そこにはコクピットモジュールをいじっていたメカニックのハッパが張り付いていたのだ。

よく…あの速度で突っ込んで無事だったんですね!?そんな疑問も与えないまま、ハッパは迎撃しろとベルリに命じた。

「上がるって言ってもバックパックなしじゃ！」

「一撃離脱！４５秒なら飛べる！」

「えぇい！このぉおおーー!!」

脚部のスラスターを全開にしたベルリのＧセルフは光の尾を作って大空へと飛翔する。

「ベルリの機体が飛んだ!?」

その姿を見て、レイカは息苦しいヘルメットを脱ぎ去って小さくつぶやいた。

『あの機体…ガンダム!?』

ガタガタと高出力の影響で震えるコクピット。ベルリが上がった先に待っていたのは、マスクの扱うエルフ・ブルックだった。
あれを落とせば、戦いが終わるというなら!!

「４５秒ぉぉぉぉ!!」
『Ｇセルフ!·歯向かうのかぁー!!』

飛翔するＧセルフを見たマスクは、間髪入れずに迫る敵のＧセルフへレーザービームを撃ち放った。もはやＧセルフとラライアを奪還するという考えは、マスクの中から綺麗に無くなってしまっていたのだ。
降り注ぐレンジ色のビームを目の当たりにしたベルリは、首周りに備わるビームサーベル格納ラックを開いて、サーベルを手に装着した。

「レーザー!?·やられてたまるかぁ!!」

ラリーがやっていた通りに!·そう言い聞かせるようにベルリは二つの腕に装備した

ビームサーベルを高速で回転させる。
プロペラのように回るビームの幕は、エルフ・ブルックから放たれた光の矢を完全に防ぎ、弾き返していた。
『ビームサーベルを網にして防ぐのか!?』
「守るだけでは…勝てないからぁあ!!」
ビームの一閃を切り払って、ベルリはさらに飛翔する。大振りに上へと構えたビームサーベルの出力はさらに上がり、その一撃は遥か先にいたはずのマスクの機体の先端を切り裂いた。
「キャピタル・アーミィがそんなものを使ってはいけないんですよ!!」
サーベルに切られた衝撃でマスクのエルフ・ブルックは大きく高度を落とした。だが、カリブ海の水面に激突する前になんとか立て直し、機体は飛行形態へと変形し空を飛び始める。

『マスク大尉！機体に傷が！』
「大した損傷ではない！だが、これ以上はこちらが不利になる。手痛い仕打ちだが…しかし、データは取った。帰投する！」

他にやられたカットシーのこともある。マスクの指示に従ってレイカは負傷したカットシーや修繕可能な機体を牽引し戦線を離脱してゆく。

（あの感覚…なんだったんだろうか…大佐なら教えてくれるのだろうか）

まだ記憶は戻らない。
レイカは宇宙から落ちてくるとき、その以前の記憶を失っている。まるで自分が遠き過去からきたような不安がずっと胸にあった。
しかし、今回の戦いはそれを忘れさせてくれる戦いだった。操縦桿から手を離して、開いて握ってみる。感覚は随分と鋭敏になったような気がした。
次は決して負けない。
レイカは操縦桿を握り直しながら、密かにあの「白いローンズー」へリベンジを果たすと心に決めたのだった。

第十話　引き金の重さを知る者よ

「船はもう衛星軌道まで上がってるんだ！必要な工具以外はさっさと片付けなさいよ!!」

マスク率いるキャピタル・アーミィからの攻撃を撃退したメガファウナは、当初の予定通り周回軌道上まで高度をあげていた。

半ば無重力状態となった格納庫の中では、アーミィにやられた機体や、収容された機体がひしめき合っていて、メカニッククルー達が手分けして機体の補修や補給、メンテナンスに奔走している。

「モンテーロとグリモアの推進剤補給が先だ！バッテリーの交換も忘れるなよ！Gアルケインは後でいい！姫様を元気に外に出させるな！」

Gセルフへ「リフレクターパック」を装着させたアダム・スミスが他のクルー達へ檄

のような指示を出す最中、俺は機体の各所を見て回っているハッパの顔色を伺いながら問いかけた。

「ハッパさん、どうです?」

「ダメですね。ノズルの焼けが酷い上に推進剤のタンクもガタが来てます。このユニットは交換になりますが、予備は下なんですよ」

かなり無茶な動きをさせていましたもんね。その指摘にぐうの音も出なかった。ローンズーはモンテーロの姉妹機ではあるが、空中での格闘機動戦をコンセプトに作られている機体だ。

指向性を持たせたフレキシブルスラスターをオートマチックではなく、マニュアルで操作したのだ。スラスターにかかる負荷は想像を絶するものだろう。現実にハッパの見解通り、今ついているスラスターは使い物にならないことは何となく分かっていた。

頭をもぎ取られたモンテーロの予備の頭部があったのだから、こちらも予備があるのかと期待したのだが。

「モンテーロの大型翼への換装は?」

「無茶言わんでください。軌道上で、こっちは囮作戦なんですよ？調整する暇もないんです」

スラスターの予備が地上のカリブ海洋研究所にあっては、どうすることもできない。シールドを兼ねた大型翼をつけるにしても、機体制御もかなり手を加えなきゃならない。

ただでさえ他の機体の面倒で手一杯なのに、そんなことまでやっては肝心の戦闘では使い物にならないことくらい火を見るよりも明らかであった。

「肩部スラスターは取り外して、使えるノズルは調整しておきます。大尉が言っていた「大気圏突入用シールドブースター」もなんとか形になったんですから」

「わかってるよ、ありがとう」

手を尽くしてくれるハッパにそう礼を言って俺はローンズーから離れる。奥には彼が言っていた「シールドブースター」の準備が進められていた。

あれは大気圏をＭＳ単機で突破できることを目的に開発された代物で、シールド背面に小型のプロペラントタンクと大気圏内での減速用ブースターが備わっているのだ。

あくまで大気の摩擦熱に耐えるためのシールドなので、迂闊にビームを受ければ装甲に穴が空いてしまうデメリットはあるが、シールドブースターという名の通り加速性は充分にある。それに賭けるとするさ。

「ベルリ！」

ハンガーの壁に沿うように作られている通路に飛んでいくと、そこには真っ赤なパイロットスーツ姿のベルリと、その友人であるノレド、そしてラライアがいた。

「あ、ラリーさん！」

「パイロットスーツを着てるってことは、そういうつもりなのか？」

聞けばドニエル艦長から操縦に適していない普通のノーマルスーツよりこちらの方が良いだろうという提案のもと、パイロットスーツに袖を通したのだとか。

「なし崩しのようなもので…」

そう困ったように言うベルリの背後。ノレドの表情はどこか険しかった。まるでどこかに向かうのを邪魔されてあるかの様な。ふと、背後に何があるか考えてみると、上の方には待機中のフライスコップが繋がれていることを思い出した。

「君たちをここで逃してもいいと俺は思ってる」

だからこそ、単刀直入にベルリにそう言った。彼は少し顔に動揺を浮かばせたが、すぐにこちらを見据えてくる。何が目的でそう言ってるのか、という目つきだった。

「ここはもう周回軌道上だ。予備のグライダーがあるから、それを君たちに渡してもいい。ラライアとGセルフは出来れば置いていてほしいがな」

「随分と優しいことを言うんですね」

素直に思っていることを言えば、背後にいたノレドがそんなことを言ってきた。優しいと言うより、割と無責任なことを言ってるつもりなんだが？

「…ここから先は本格的な宇宙戦争になる。キャピタル・アーミィも、アメリアもだ。あ

んなものを作って攻めてきたんだ。君たちを返してお終いなんてないだろ？」
「けど、それはアメリアとゴンドワンが大陸間戦争なんてものをして、宇宙に上がれるまでアブテックのタブーを破ったからでしょ!?」
「それはキャピタル・アーミィにも言えることじゃないのかな？」

俺がノレドに答える前に、メガファウナ艦内からハンガーへと出てきたクリム・ニックが、こちらに降りてきながらそう返した。まるで誰かを嘲笑うかの様な言い方に、ノレドの反骨精神はより深まったように思えた。

「宇宙からの脅威を知れば、大国が軍事力を持ってして地球の生活圏を守ろうとする動きは、人の本質にかなった道理である」
「そんなの、地球に住む人たちの勝手な理屈じゃないか！」
「宇宙と地球を行き来しながらバッテリーを運ぶ役目にしか目を向けない者たちに何が…！」
「やめろ！クリム中尉！今はそんなことで諍い合ってる場合じゃないはずだ」

今にも取っ組み合いを始めかねない二人の間に割ってはいる。

しかし、キャピタル・ガードとしてタワーの管理やバッテリーの配給を続けてきたノレド達の言い分もあるだろうが、クリムの様な「大国側」の人間からしたら気が気でないのも事実だ。

「ラリーさんもこの戦争や、キャピタル・タワーを占拠することは当然だと思っているのですか?」

ベルリは、真っ直ぐとした目でそう問いかけた。彼の目は小手先のまやかしや、言い訳が通じるものじゃない。

そういうものを見透かす目だとすぐに分かった。だから、こちらも本音で話すしかベルリを納得させることはできない。

「…戦争ってのは、誰かが正しくて起こるものじゃないさ。誰もが正しいと思うから折り合いが付けれなくて、結局は戦うことでしか決められない行為に過ぎん」

「それを認めて戦うと言うのですか?ラリー・レイレナードともあろう人が!」

「それを決めるのは軍の偉い人間や政治家であって、俺にそれを決める権利もないし、俺はただの軍人なんだよ、ベルリ・ゼナム」

いくらＭＳを操縦できようが、いくら闘いで強くあろうが、いくらＭＳ部隊の隊長なんてものをやろうが…軍に従事している以上、その本質はどこに行っても変わらない。
軍人というものは、命令に従い、それに対して最適な人員と手段を構築し、任務を達成するパーツなんだ。
断じて、好き好んで戦争をする者ではない。

「カーヒル大尉の考えたタワーの占拠も、キャピタルとの無用な争いをやめさせ、血を流させずにできると考えたから提案されたんだ」
「それでも、戦えば人は…!!」
「あぁ、人は死ぬ。戦いたくないから、争いに巻き込まれたくないからと言って引き金を引いてもだ。だから、俺たちは引き金の重さを知らなきゃならないんだよ。ベルリ」

どこかの誰かが言った。
引き金を引くのは躊躇うし、人を殺すのは怖い。初めて誰かに向けた銃の引き金を引いた時は震えた。…だがすぐに慣れた、と。
人間は〝慣れ〟てしまえる。ＭＳに乗ることも、それになって戦争をすることも、そ

して人を殺すことも。それで仕方ないと割り切って自分の心を守るために慣れるんだ。
だからこそ、その慣れを突き放すことが、人を殺めることを当然とするパイロットや軍人には必要なことなのだと思う。

「君がGセルフに乗ってパイロットをやるという意思があるなら、たとえ君が拒んだとしても、君もそれを理解しなきゃならないんだ」

誰かが乗る敵を、その手で撃ち殺すと言う感覚を感じ取られなければ、それは軍人でもキャピタル・ガードの候補生でもない。
ただの殺戮マシーンと何ら大差はないのだから。

「キャピタルに戻っても候補生のままでいられるのか？宇宙の脅威と戦える力を知った、ベルリ・ゼナム」

逃げるチャンスを与えた。
けれど、ベルリ・ゼナムという男はもう戦いから逃れることはできない。
それだけは確かだと分かる。

そういうものだからだ。どこかで絡め取られる。戦場に出て引き金を引いた以上、その因果は音もなく彼自身の心を追い続け、捕まえて離さなくなる。
だからあえて彼に問いかけた。
その因果と向き合うのか、どうかという問いかけを。

「…僕は」

しばらくの沈黙の後、ベルリは顔を上げて言った。

「僕だって正直に言えば大国同士の戦いに巻き込まれるなんてゴメンですし、殺されるのも殺すのも嫌です。自分が死ぬのなんて絶対に嫌なんです」

キャピタルの候補生になったのも、それが当たり前でなすべき事だと思えたから。当たり前だったから。
そんな中で、その当たり前を壊した女性にベルリは出会った。一目惚れだったのかもしれない。あんな甘い様な感覚を忘れることはできない。
だから、その思いからは逃げ出したくはなかった。

「それから逃げてノレドや、アイーダさんや…隊長たちが死ぬのも同じくらいに嫌なんですよ!」

そうなるのが嫌だから戦うことに意味っているんですか!?そう叫ぶベルリに、俺は単純だなと笑った。

「戦える力があるからといって、それに乗ることが引き金を引くことの免罪符になるなどと思うなよ?」

「宇宙で生き抜くためには目の前にある壁を乗り越え続けなければならないんです。それが人を殺すことになったとしても…僕はその重さを引き金に込めて撃ちます!」

「なら、目の前の現実を生き抜くために戦わなきゃな」

そう返しながらベルリの横に並んで、肩を叩く。

「せめて背中を守ってやるよ。それが隊長の勤めってやつだ」

「ありがとうございますっ!!」

ブリーフィングだ、そう言ってベルリを引き連れてルワンやオリバー達の元へと向かう。もうメガファウナは敵のテリトリーに入っているのだ。

事を進めるなら早いウチの方がいい。

メガファウナのクルーからもらったチュチュミィを大事そうに眺めるラライアの相手をしながら、その様子を眺めていたノレドは小さく、そしてどこか寂しそうに呟いた。

「男の子って戦いになると元気になっちゃうだからさ」

《ベルリゲンキ！ベルリゲンキ！》

「ノベルはうるさいの」

▼

キャピタル・タワーの一番最下層のナットである「アンダーナット」から単身で出撃したデレンセン・サマターは、エルフ・ブルックの土台となった試作機、エルフ・ブル

を操りながら地球の地平線に沿って周回軌道を飛んでいく。

「さて、アンダー・ナットでエルフ・ブルを受け取ったまではいいが…」

コンソールパネルを叩いて周回軌道上のデータを眺める。少しでも軌道がずれれば旧世紀から宇宙に滞留しているスペースデブリの餌食になるのだ。

「マスクの話では、海賊部隊は周回軌道を目指して上昇していたと言っていたな。それもベルリ生徒やノレド達を人質にしたままで、宇宙で戦争をやろうって言うのだ」

ベルリの母であるウィルミット長官は、クラウンの運行長官でもあるのでナットを軍事基地の様に使うアーミィを心底嫌っている様に見えたが、それでもベルリを助け出す役目を任せてくれたのだ。

アーミィを嫌っているベルリの母から、息子の救出を託されたのだ。

「戦争に無関係な生徒達を、大人の事情で戦争に巻き込むわけにはいかないのだよ」

しばらく地平線に沿って飛んでいると、ナビゲーションデータが何かを捉えた。カメラの画像を拡大して、その特徴的な船体や色や形を見つめる。間違いない、あれこそが海賊部隊の旗艦である「メガファウナ」という船だ。

「捉えた。あれが海賊部隊のメガファウナか…！ならば、今度こそはベルリ・ゼナムとノレド・ナグ、そしてラライア・マンディとGセルフを取り戻させてもらう！」

エルフ・ブルに備わる補助ブースターを加速させ、デレンセンは速度を上げた。あの船の中に自分の助けを待つ生徒達がいる。

それだけで、彼の闘志は充分に満たされていたのだった。

▼

アンノウンの接近は、メガファウナもキャッチしていた。すぐさまドニエル艦長が発信指示を通達し、ブリーフィングの最中であったベルリたちはコクピットへと乗り込んで出撃準備に入る。

「リフレクターって言ってビームを跳ね返すって言っても、クリム中尉のモンテーロやグリモアに取り付けれなかったんですよね!?そんなの、程のいい生体実験じゃありませんか!!」

乗り込む前に言われたもので、ベルリは出撃準備もしながら新しく取り付けられた「リフレクターパック」の操作マニュアルに目を通していた。どうせならブリーフィング前に渡してもらいたかったと誰もいないコクピットの中で悲鳴をあげる。

「だから、俺たちも一緒に出てるんだろ?」

「君がこの船を守るために戦うと言うなら、その面倒を見るのも俺たちの仕事ってわけさ」

艦内の接触回線でそう言ったのはルワンとオリバーだ。今回の作戦で、ベルリは特殊扱いとしてラリー率いるＭＳ部隊に配置されることになっている。

「あ、ありがとうございますっ!」

「ベルリ・ゼナム君、さっさと行きなさい！」

アルケインに乗るアイーダは不満げにベルリの発進を催促した。彼女は今回も甲板からの狙撃と迎撃を言いつけられており、ポッと出のベルリがベテランのＭＳ部隊に配置されるのが気に入らなかったのだ。

「Ｇセルフ、出ます！」

「フライスコップとグリモア隊も出します！」

「ギゼラ！対空防御は怠るなよ！」

周回軌道。

ブリッジの喧騒もメガファウナから出てすぐに聞こえなくなった。ベルリが操るＧセルフの眼下には青く輝く惑星「地球」が広がっていた。

先に出たラリーのローンズーやカーヒルの機体の後を追う様に起動を修正すると、すぐ後ろに後から出たルワンとオリバーのグリモアも付いてくれる。

「ウチの隊長が尻持ちをするって言ってんだからさ。なら付き合うのが隊の面子ってや

つよ」
「そんなに凄いんですか？ラリーさんって」
　お前は知らずに隊長にあんな口を聞いてたのか？面白いやつだな、とルワンはベルリからの疑問に大笑いをした。そもそも、そんなに凄くなければＭＳ部隊、しかもグシオン総監直下の諜報部隊に配属されるわけがない。
「あの天才でさえＭＳ部隊の隊長っていう肩書きを貰えなかったんだ。凄いに決まってんだろ？」
「ええ!?天才中尉より凄いんですか!?」
「天才って自分で言わないだけさ、ウチの隊長は。そこんとこよろしく」
　なにせあの機体で、とオリバーが言いかけたところで前を飛んでいるカーヒルからの通信が入った。
「うるさいぞ、お前たち」

あまり余計な事を教えるんじゃない、と釘を刺されて押し黙るルワンたち。カーヒルは減速してGセルフへ回線を繋いだ。

まだミノフスキー粒子も散布されていないのだから、通常の無線通信は十全に活用することができたのだ。

「ベルリくん、君がキャピタル・ガードとは言ってもここはもう周回軌道上。つまりはキャピタルが攻めてくると言うなら本格的な宇宙戦争になる。ハッパの言う通り君の機体の防御は…」

「カーヒル大尉？ええ!?ミノフスキー粒子が撒かれた!?」

突然途切れたカーヒルの声。同時に散布されたミノフスキー粒子を確認して、ベルリはヘルメットの気密バイザーを下げた。

「カーヒル！上からくるぞ！」

真っ先にラリーのローンズーが敵の攻撃に反応する。北極星から下に降りてくる形で奇襲を仕掛けてきたのは、キャピタル・アーミィのMSだった。

「各機散開！敵はキャピタルのカットシーだ！」
「本格的な宇宙戦争をやろうって、キャピタル・アーミィは本気なのかぁ!!」

Ｇセルフが放ったビームの直撃を翼に受けたカットシーが不規則な動きで離脱してゆく。敵も地球の強力な重力に捕まりたくはないのだろう。
周回軌道から外れてしまえば、機体は有無を言わずに地球に引っ張られてしまうのだから。

「メガファウナから光信号！軌道上に上がってきた敵からミサイル攻撃が来るようです！」

下からは成層圏までの上昇限界ギリギリまできたアーミィのダベーから放たれたミサイルが上がってきていた。すぐにクリム率いるＭＳたちが迎撃行動を取った。

「地球の大気の下からチクチクと攻撃をしてくるとはなぁ!!」
「フライスコップ部隊はクリム中尉に続き、メガファウナの護衛をしろって言うの!!姫

様は!?」
「ミサイルの直撃はさせません!!」
「それでいいですよ、姫様!!」

ミサイルとカットシーを甲板上から狙撃するアイーダのGアルケインを、カーヒルとルワン、オリバーのグリモアが徹底的に護衛する。敵のカットシーから再び火が上がって、そして地球に落ちながら小さくなっていった。
パイロットは気の毒なことをしたな…そう心で感じとるベルリは、ふと、真上から降りかかってくる様なプレッシャーを感じ取った。

(何かが上からくる…!?)
「ベルリ!!」

次の瞬間、ベルリのいる場所に無数のビームの雨が降り注ぐ。咄嗟に展開したリフレクターパックとシールドで受け止めると、リフレクターの一枚にビームが直撃した。
その一撃により、リフレクターは眩い光を放ってベルリを照らしたのだ。受け止めたビームのエネルギーを転換して、Gセルフの出力が僅かに上がった。

「ビームを防いでくれた!?あれもアーミィの新型…!」

上を見上げると、そこには青と淡い水色に配色されたキャピタルの試作型可変機、エルフ・ブルがこちら目掛けて迫ってきていたのだ。

『あの機体!シルエットは違うが…やはりGセルフと俺を落とした白い機体!』

色合いや機体背部に背負わされている代物は違うが、その特徴的な顔パーツや機体の特徴。なにより、デレンセンの直感が「あの機体はGセルフである」と告げてきていた。

『Gセルフめ、完全に海賊の物に成り下がったか!!』

そう叫んでスロットルをあげる。

周回軌道上での戦いは、まだ始まったばかりであった。

第十一話　強敵デレンセンとアメリアの流星

青い星が眼下に見える周回軌道上。
アメリアの宇宙艦隊が宇宙へ上がるための艦隊航行をしている中、その囮として別方向から軌道上に上がったメガファウナこと海賊部隊は、その思惑通りにキャピタル側から出てきたアーミィ部隊との交戦を開始していた。
先遣隊であるカットシーの編隊を相手取りながら宇宙戦争を始めるメガファウナ。そこから幾分か離れた軌道上では、２機の人型ＭＳと、飛行形態に可変できる歪なＭＳが激戦を繰り広げていた。

「機体性能が速い！」

自分の周囲を飛ぶキャピタル・アーミィのエルフ・ブルを睨みつけながらベルリはフットペダルを踏みつけるように押し込む。
リフレクターパックを装備したＧセルフは、エルフ・ブルから放たれたビームをガー

ドし、そのエネルギーを吸収しているため出力が上がっているのだ。
だと言うのに、スラスターの出力を上げても前をゆくエルフ・ブルを完全に捉えることは出来なかった。
宙域や軌道上でも負荷なく飛べるほどの出力を有するエルフ・ブル。その速度は今まで見てきたどこのＭＳよりも早く、そして恐ろしく感じられた。

『貴様は…何人の戦友を殺してきたのか、わかっているのかぁ!?』

エルフ・ブルのコクピットの中で雄叫びをあげたデレンセン・サマターは、長距離移動用の補助ブースターをパージする。余力を残したブースターは機体の脇をすり抜けて真っ直ぐにリフレクターを背負うＧセルフへと飛んでいった。

「体当たりをしようって言うの!?」

飛来してくる巨大なサブスラスターに目を向くベルリの横合いから光が二つ奔った。
撃ち放たれたビームは一直線に飛ぶサブスラスターの横っ腹を貫いて、爆散させる。
その爆炎の脇を白い光の尾を引き連れた機体が閃き、シールドを構えていたＧセルフ

の隣に並ぶ。

「ベルリ・目の前の敵に惑わされるな！」

接触回線で声を発したのは、シールドブースターを装備したラリーの機体だった。ローンズーに備わっていたフレキシブルスラスターは、地上での戦いで破損していたためパージされていたが、代わりに大気圏突破用のシールドブースターを装備している。

大型ブースターとプロペラントタンクを積んだシールドブースターは、攻撃を受ける防備よりも、機動性を底上げする側面の方が強い。

接触回線直後にエルフ・ブルから放たれた無数のレーザーの網を、Ｇセルフから離れたローンズーはシールドブースターの力を借りて抜け出して見せる。

『外した!?直撃のはずだぞ!!』

「ラリーさん!!リフレクター!!」

追撃しようと迫るエルフ・ブルの前にリフレクターパックを展開したベルリのＧセル

フが立ち塞がる。両腕に備わるライフルから攻撃を放つも、その全てがリフレクターの防御力によって阻まれていた。

『Gセルフめぇ!!』

異様な光と音。リフレクターに吸収されたエネルギーはGセルフの能力を飛躍させた。その事実にベルリは戦慄する。それほどの威力を有した武器をキャピタル・アーミィが作り出してしまったのだ。

スコード教のタブーを破ってまでして。

「なんて出力…こんなものをキャピタル・アーミィが建造していたなんて…! 母さんは、キャピタル・アーミィを知らなすぎたんです!!」

スロットルに力を込めてベルリのGセルフは、エルフ・ブルとビームの応酬を始めた。機体性能が、その癇癪についてきてしまっている。

グングンと速度を上げていくGセルフは、エルフ・ブルから放たれたレーザーを難なく躱すと、カウンターを取るように敵の肩部装甲をビームライフルで撃ち抜いたのだ。

「ベルリ!!」
「キャピタル・アーミィがぁっ!!」

あの動きはまずい。二人の攻撃を見ていたラリーは思った。あまりにも感情的で短絡的すぎる動きだ。あんな動きをしていれば、ほんの少しの判断ミスでベルリが死んでもおかしくない。
そう思った矢先、背後を見せたGセルフにエルフ・ブルがレーザーの斉射を浴びせる。しかし、その一撃はリフレクターから発せられる光の前に飛散した。

「フルガードできた!」
『直撃しているはずだ!ええい、化け物め!!』

全ての攻撃が防がれたことへの焦りが、距離をとって戦うデレンセンの戦略に綻びを生み出した。リフレクターがある限り、遠距離からの攻撃は無意味だと悟った彼は、ほんのわずかにでもとGセルフへの接近戦を試みる。
しかし、その前にラリーの乗るローンズーが割り込むように入った。

「ベルリを前に出すわけにはぁ!!」

腰部のジャベリンを引き抜いて手からビーム刃を出すエルフ・ブルと対峙する。突きつけられた手刀とビームの刃をシールドブースターによる加速力で避けて、距離を取りながら牽制してゆく。

だが、その程度で動じるものではない。エルフ・ブルを駆るデレンセンは明確な決意があった。

『私は、私が教えるべき生徒達を救うために戦っている!!貴様らとは背負う覚悟と大義が違うのだ!!』

必ずベルリとノレド、ラライアを助ける。Gセルフは手に入ればいいが、生徒たちが助けられるならここで落としてしまってもいい。その覚悟を持ってデレンセン・サマターは立ち塞がる二体のMSへ果敢に挑んだのだ。

『貴様たちアメリアにはわかるまいよ!自国の領土とゴンドワンとの戦争にしか興味が

ない奴らに!!』

ジャベリンの一撃を躱したエルフ・ブルは残った装甲からゼロ距離でビームの弾幕を張る。致命打になる一閃をなんとか避けたラリーだったが、揉み合いをしてる最中にビームライフルが溶断されてしまった。

「ビームライフルが!?右からくる!!」

「ベルリ!!レイレナード大尉!!地球に引っ張られてるぞ!!」

ラリーの援護していたベルリは、メガファウナの航行戦から離脱し、こちらの援軍に来た青い機体を見つけた。

モンテーロに乗るクリムは、ラリーのローンズーを追い回すエルフ・ブルへ死角からの一撃をお見舞いするが、まるで分かっていたかのようにエルフ・ブルはクリムのビームを完全に避けた。

『死角からの攻撃か!!』

目標がラリーから急に現れた青いモンテーロへと向く。異様な速さで近づくエルフ・ブルの動きに少し反応が遅れたクリム。その僅かな誤差が彼の命運を分けた。

後退するモンテーロを追い詰めるような放たれた無数のビームの一撃が、背部スラスターに直撃する。

「ビームの嵐…がはっ!?モンテーロのスラスターが!?はっ!?」

『もらったぞ、青い機体!!』

目の前に向けられるビーム刃。それを見たクリムの脳内に、やられる!?という思考が奔った瞬間、エルフ・ブルは凄まじい力で横へと弾き飛ばされた。

「中尉は！足で蹴り飛ばしなさいよぉ!!」

『なにぃ!?ええい、Ｇセルフが!!』

「体当たりをかけたのかぁ!?」

モンテーロの危機を救ったベルリのＧセルフであったが、エルフ・ブルが離れ際に放った高出力のレーザーが残っているリフレクターの羽を二枚破壊したのだ。

リフレクターのパワーは正常に送られてきているのに、ビームを吸収しきれない！苛立ちに揺れるベルリの視線の先には、こちらを落とそうと迫るエルフ・ブルの鬼気迫る姿があった。

「ハッパ!!先に謝っておくぞぉっ!!」

周回軌道の外側から現れたラリーの機体は、機体各所のスラスターから青い燐光を放つ。

モンテーロにはない増設された無数のスラスター。その全てを〝任意〟で解放した。

青い燐光を残して飛び出すと、武器を握ってきたエルフ・ブルの片腕をジャベリンで切り落としたのだ。

『なんだ、その動きは!?』

「ラリーさん!?」

「可変機は動きに無駄が多い!!」

驚愕するベルリをよそにラリーはさらに追撃をかける。腕が切られたことに動揺し

たのか、距離を取ろうと飛行形態に移行したエルフ・ブル。
その一瞬の隙をラリーは見逃さなかった。
ラリーは肩部に備わるビームサーベルを引き抜くと、飛行形態に必要な出力を得るための脚部スラスターを両断する、
黒煙をあげ、エルフ・ブルの機動力がガタ落ちしてゆく。安定しない機体を制御するデレンセンはその異様さに息を呑んだ。
『斬られたのか？あんな動きをするＭＳ…！』
その姿。
その戦いぶり。
その異様な感の良さ。
青白い光の尾を引いて迫り来る白きＭＳ。
それを目の当たりにした時、デレンセンはアメリアとゴンドワンの大陸間戦争の只中に行われた会合で、アメリア側の政治官から聞いた話を思い出した。
たった一人でゴンドワンの艦隊全てを撃沈し、軍のＭＳを次々と撃破していったという信じ難いことを成し遂げたパイロット。

アメリアも、ゴンドワンも、その鬼神のような動きを恐れた。のちにパイロットは、その実力に畏怖を込めてこう呼ばれる。
「白き流星」と。

『まさか、あの機体が…!!』

光はすぐに瞬いた。高速で移動するローンズーがジャベリンを放ったのだ。その一撃は僅かに硬直したデレンセンのエルフ・ブルの肩装甲を完全に吹き飛ばしてゆく。

「あれがラリーさんの実力なの!?」
『アメリアの流星か！貴様は!!』

ベルリの眼に写るのは、人が乗っているとは思えない挙動をするＭＳの姿。
白いシルエットだけが見える。
その速度域で放たれる攻撃は、本来なら散漫なものになるはずなのに、確実にエルフ・ブルの四肢を捉える正確無比な一撃だった。

「…がぁっ!!運動性能は向こうが上!!だが、そんな道理は突き抜ける!!」
『な、なんだぁ…!?こいつは…!!』

急転身したラリーのローンズーは出力そのまま片足と片腕をもぎ取られたエルフ・ブルの懐への飛び込む。

「板っぺらの可変機が!!」

身を捩るように懐へと飛び込んだローンズーから放たれた一閃は、エルフ・ブルの腰部を捉え両断にする。だが、コクピットと火器管制システムの制御はまだデレンセンの手元に残されていた。

『だが、私は負けられんのだ!!』

エルフ・ブルは残った腕で突撃してきたローンズーをバックパックを鷲掴みにする。火を吹いたレーザーはバックパックのスラスターを焼き尽くし、ラリーの動きを封じる。

しつこい!!

まだ息のあるエルフ・ブルのコクピットにラリーは残った片割れのジャベリンを敵のコクピットに――――。

「ラリー隊長!それは無茶です!!」

ベルリの声で自分たちが置かれている状況を理解できた。
コクピットから見える景色はすでに赤く染まりつつあったのだ。ラリーが突撃前に手放したシールドブースターを持ってきてくれたベルリのGセルフ。
接触回線で聞こえてきた声に、ビームを展開していないジャベリンを突きつけられたままのデレンセンは驚いた様子で言葉を紡ぐ。

《その声…ベルリ生徒だったか》
「デ、デレンセン教官殿…!?うっ!?」

デレンセンの問いかけに答える間も無く、3人の機体はさらに地球の引力に引っ張られていく。負荷に耐えきれなくなったリフレクターパックが音を立てて崩壊してゆく。
このままシールドブースターを構えていれば大気の層は突き抜けられるか。
フルブーストの負荷でエラー音が鳴りっぱなしのコクピット内で突入角度の調整をしていたラリーの前で、ベルリは信じられない行動を起こした。
なんとバックパックなしで大気層に飛び出したのだ。

「お前、ベルリ！正気か!?」
「天才も大気圏に落ちちゃってるんです！」

そう言うベルリの声に従って望遠モニターを見ると、距離が離れた場所でクリムのモンテーロも地球に落ちている様子が映っていた。

「デレンセン教官を頼みます！自分はクリム中尉を！今のGセルフなら大気圏突破ができます！」

何を根拠に、という言葉も聞かずに通信を切ったベルリ。
真っ白な冷却剤を散布しながらクリムのモンテーロを追う姿を見送ってから、ラリーは改めてシールドブースター内に匿っているアーミィのエルフ・ブルを見た。

《…貴様が、ベルリ生徒を誘拐した犯人だな。流星》
「…ラリー・レイレナードだ」

一応、名を名乗るとデレンセンは不満そうに鼻を鳴らしてヘルメットを脱いだ。

《デレンセン・サマターだ。フン、とんだ自己紹介になったものだ》
「ああ、まったくだよ。クソッタレ」

赤い光が消え、青空が広がる。
大気圏を抜けたラリーたちの眼下には青い海と共に大気圏を脱したメガファウナが浮かんでいるのだった。

第十二話　強襲、マスク部隊（1）

「エルフ・ブルックの量産機が到着したか」

カリブ海からアメリア大陸を跨った南大西洋側。そこには海洋航行用の空母と、キャピタル・アーミィのエルフ・ブルックで編成された新たな部隊が集結していた。

クンパ・ルシータ大佐お墨付きのマスク大尉が率いる空戦特化の編隊。だが、他のキャピタル・アーミィの軍人から見て、そんな部隊は粗末な物にしか見えなかった。

「あれが噂のマスク大尉かよ」

「アメリアの白いＭＳにやられたって？」

華麗なるエルフ・ブルックの初出撃で勝ち星を上げられなかったマスクに対する風当

たりは強い。そして何より、キャピタルの軍人たちが彼を見下す理由が明確にあった。

「所詮はクンタラなんだろうさ」

クンタラ。

宇宙世紀末期に生み出された負の歴史において、下級階層の人間を蔑むものだ。

当時敷かれていた階級社会で下層に位置したクンタラの人々は、同時代に起こった未曾有の食糧危機によって極度の飢餓状態に追い込まれた際には代用食として捕食される側に回っていた。

そこから「他人に食われる程に劣っていた」という差別意識が生まれ、時が流れたリギルド・センチュリーの時代でも偏見は根強く残っており、クンタラ出身の人間は冷遇を受け続けていた。

「知っての通り、私はクンタラ出身だ」

エルフ・ブルック部隊の隊員を集めたマスクは、その身の上を堂々と開示した。

蔑まれているという事情からクンタラ出身者は本能的に自衛手段に長けている。マ

スク自身もだ。だが、それ以上にマスクには自身のコンプレックスを打破するべく、プライドと強い意識を持ち合わせていた。

「クンタラの置かれている立場というものは理解しているつもりだ。故に、我々がこうやってアメリアの海賊船に奇襲を仕掛ける任務を与えられた意味を考えて欲しい」

クンパ大佐が集めた優秀なパイロットたち。彼らもまたクンタラ出身で腕はいいが軍から冷遇を受けて蔑まれている者たちだ。ゆえに、マスクはそれを導く覚悟と義務がある。

整えられた戦いの舞台。与えられたエルフ・ブルックというチャンスをモノにできなければ「クンタラ」と呼ばれる人々はずっと蔑まれる対象から脱却することができないのだから。

「この屈辱…新たなるエルフ・ブルを与えられたこのマスク部隊が、遠き過去から塗りたくられた汚名を晴らし、名誉を挽回するのだ!!」

差別意識を無くし、平等で純然たる世界で、クンタラ出身者が力を示して世界を導く。

それがマスクの信念であり、彼がマスクを被る理由でもある。
マスクの激励に、他のパイロットたちも声を上げて呼応する。部隊のメンバーへの指揮向上も終えたところを見計らい、エルフ・ブルックを搬入していた作業員がマスクへと近寄ってきた。

「マスク大尉、あの機体もエルフ系の新型機なのですか?」

そう指さされた先を見ると、輸送艦のコンテナから搬入される一機のＭＳの姿があった。形はエルフ・ブルやカットシーとは大きく異なり、肩には折り畳まれた四枚のバインダー式スラスターと、四肢は開いた花弁のような造形が施されている。

「クンパ大佐直々の部隊導入というやつさ」

エルフ・ブルックとは別系統のＭＳの試作型、とマスクはクンパ大佐から聞かされている。だが、あまりにも形状が独特なモノだ。
あくまで試験機なので量産をする予定はないと聞くが…、とマスクはその奇天烈な機体を眺めながら思考を巡らせる。

（ヘルメスの薔薇の設計書はあんな羽根付きまで建造してしまうのか）
「機体性能は落ちていますが使えますよ、この機体」

そう言ってカタログデータを見せてきた作業員の手から端末を受け取る。たしかにヘルメスの薔薇の設計書で記されていたスペックよりは性能がやや落ちているような印象を受けた。

「なぜ機体性能が落ちている？」
「ヘルメスの薔薇の設計書から起こされた機体ですよ？未知の技術を再現できなかったのだから、キャピタルが保有している技術で代用したのですよ」
「この…ファンネルという装備は付いてないのか？」
「技術局の作業が難航しとるそうで」

コクピットの設備の製造が追いついていないと作業員は答えた。バイオセンサー…という人の脳波に反応する機械を組み込まなければ扱えない武器だと言う。そんな魔術的なシステムに信頼性など置けるのか？

マスクは薔薇の設計書を書いた〝誰か〟の底が知れるなと鼻で笑って端末を返した。

「なるほどな、これもまた旧時代の産物というわけだ。機体名は何と言う」

「アーミィでの正式運用名はゾルトレイ。ヘルメスの薔薇の設計書では…キュベレイと名を冠しているようです」

キュベレイ。

旧時代の神話に出てくる神の名前。

スコード教というフォトンバッテリーで世界に平和と繁栄を享受させると言う教義が広まっている世界で神の名を語るとは、ナンセンスだ。

だが、マスクにしてみればこの上なく合っている名前のようにも思える。なにせ、あの機体に乗ることを許されたのは、自分と同じくクンパ大佐から気に入られている…あの女なのだから。

「乗っているのはいと麗しい者ではなく、執着に狂った死神かもしれんな」

開いた「ゾルトレイ」のコクピットから乗り込んだパイロットは、シートに腰を下ろ

して操縦桿や全天周型モニターをじっくりと眺めてから、小さく呟く。

「この機体、私はどこか知っているような気がする」

コクピットがだとか、機体の形がだとかじゃなくて、もっと感覚的なものだとレイカは思った。見たことも聞いたこともない機械のはずなのに、遠い昔にどこかで出会ったかのような懐かしさもあった。

《ゾルトレイ、レイカ・マツオカ少尉、聞こえてるな?》

「はい、感度良好です」

通信越しに聞こえるマスク大尉の声にレイカは答えながらゾルトレイの操縦桿に手を添えた。

《では、機体の海洋上テストを開始するぞ》

「了解、レイカ・マツオカ、ゾルトレイ、出ます!」

基となった流線型のフォルムから角ばった形状へと変わった両肩のバインダー式スラスターで、ゾルトレイは空へと飛翔する。
まるで蝶が空を舞うように。しかしその機体の力は蝶が舞うように優しいモノではできていない。
現れたエフラグの上に着地したゾルトレイは、マスク率いるエルフ・ブルックの編隊の後に続くようにカリブの海を目指したのだった。

▼

「デレンセン・サマター大尉か」
メガファウナのハンガーに降りてきたベルリは、コンテナの一角でスタッフやアイーダ、ドニエル艦長たちが集まっている様子を見た。
彼らが囲う真ん中には、拘束はされていないもののノーマルスーツを脱いでいるデレンセンが不満そうな顔で取り囲むクルーたちを睨みつけていた。

デレンセンが乗っていたエルフ・ブルは大破。機体の大部分が破損し、スラスターノズルは焦げ付いて、機体の表面も大気圏の摩擦熱で剥がれている有り様だ。
そして、それより酷かったのがラリーの機体だった。
機体各所には高速機動をした皺寄せで過負荷とガタが来ているし、スラスターは内部ノズルとバルブが軒並み破損。幸いにもフレームと装甲へのダメージは免れていたが、部品を交換するには大規模な解体を行う必要があった。
よって、今はハッパ率いるカリブ海洋研究所のメンバー総出でローンズーは絶賛オーバーホール中である。

「私は体の良い人質、といったところですかな?」
「人質というより捕虜となります、大尉殿」

切って返されたアイーダの言葉に、デレンセンはフンと鼻を鳴らした。

「まさか、宇宙で引っ叩いた海賊の女がアメリアの軍トップの御令嬢とは恐れ入りますよ」
「…あれは私の独断によるミスです」

「海賊がなんと言っても、運搬するフォトンバッテリーを奪おうというのだから、それは単なる略奪行為となんら変わらん…！」

取り繕うように言うアイーダにデレンセンは怒りをあらわにして言った。海賊部隊の被害が増えているのは事実で、奪われたフォトンバッテリーの被害も無視はできない。

そして、その海賊部隊のパイロットがアメリアの姫君だ。怒らない理由などデレンセンは持ち合わせていなかった。

「我々がアメリア直轄の隠密部隊であるということは、そちらの推測通りです」

デレンセンの言葉にそう答えたカーヒルに、アイーダは信じられないような目を向けた。

「カーヒル！」

「姫様、ここまで来て我々が一般運送企業だなんて見えすいた嘘をついても何もなりません。それに彼は騙し通せる相手ではありません」

あくまでメガファウナは一般的な運送会社で船体登録をしているし、自分たちの立場もアメリアの軍属というよりはアイーダの父であるグシオン総監の私兵みたいな扱いに近い。

だが、バックにアメリアのサポートがあるのは事実であるし、それを見抜けないほどデレンセンは甘くはない。

Gセルフを捉えてからずっと睨んでいた憶測が確定して、デレンセンは不満げにカーヒルとアイーダを睨んだ。

「貴様らがアメリアの軍属であろうが、単なる海賊の無法者だろうが関係はない！我々キャピタル・アーミィの目的はそこにいるベルリ・ゼナム生徒と、ノレド・ナグ生徒、そしてラライア・マンディとGセルフを取り戻すことにある！」

「Gセルフはもともとアメリアのものです！」

「もとは俺が見つけた機体だ！ラライア・マンディもだ！」

それを無闇矢鱈と動かしてこちら側に差し出してきたのは貴様であろう、と指摘されてアイーダはぐうの音も出ない様子だった。

アメリアの姫君ともあろう方がなんたる向こう見ずな!そう吐き捨てるデレンセンの態度に、アイーダも我慢の限界を超えたように前へと踏み出す。

「貴方は!!」

一発引っ叩いてやる、という決意と共にデレンセンに詰め寄ろうときたアイーダ。その踏み出した行先に、横から入ってきたベルリが通せんぼをする。

「待ってくださいよ!デレンセン教官殿、僕とノレドがアーミィに保護されれば…」

「戦いは止まると言うのか?ベルリ」

ベルリの言いたいことを当てるかのように、ルワンとオリバーがベルリを見つめる。たしかに、デレンセンが言っていることが事実なら、二人とララライア、そしてGセルフを差し出せば襲ってくる口実は無くなるだろう。だが、事はそれに収まらない範囲まで大きくなってしまっているのだ。

「少なくとも、キャピタル・アーミィはそこにGセルフとララライアもセットじゃなきゃ交

渉に応じんぞ」
「話し合いの場を設けるというのか？戦場で？」
「そんな簡単な話ではありません！我々はすでにアーミィからの軍事的な攻撃を受けています。アメリア軍としてそれは打倒しなければ…」
「宇宙でも戦ったことのない軍がなにを偉そうに！」

ぎゃあぎゃあと言い合いを始めたアイーダとデレンセンを眺める。
すると、ハッパに「壊したのなら手伝いなさいよ」と修理に巻き込まれたラリーが、べったりと手についたオイルを手拭いで拭きながらのんびりとドニエル艦長やカーヒルのところへとやってきた。

「こりゃあ話がまとまらんなぁ、どうします？」
「とにかく、彼を捕虜としてこちらからはベルリとノレドを返すことを条件に話をしてみますか？」

カーヒルの提案に、ラリーは考える間も無くＮＯを出した。

「冗談。あいつらはＧセルフとラライアを第一目標にしているようにも見るんだから、彼らを返したところで引き下がるものか」
「アメリア本国も軌道上に艦隊を飛ばしてしまったんですよ？どちらに転んでもアーミィとの戦争は避けられません」

艦隊が宇宙に行けるとわかれば、宇宙は我々が管理するべきだと演説で叫ぶだろうな、あの大統領なら。そう言うドニエルに、カーヒルやルワンたちも頷いた。あの大統領ありの天才中尉だからな、始末に負えない。

「ここにゴンドワンも加わって三つ巴か。嫌になるますね」
「そう言ってもられないぞ、カーヒル。ここで選択を誤れば我々は」

そう言葉を交わしていると、格納庫の奥にいたドニエル艦長を発見したアダム・スミスが慌てた様子でハンガーの出口で起こったことを報告しにきた。

「なんだとお!?クリム中尉がラライアを乗せてＧセルフを出した!?」

とたん、ドニエル艦長の悲鳴のような声がハンガーの中にこだまする。ラリーを含めるＭＳ部隊のパイロットは「おぉ…スコード」と言わんばかりに手を見上げながら顔を手で覆った。

「あ、あの天才坊ちゃんは…」

何を考えてるんだ、と言う間も無く、今度は艦橋からすっ飛んできた副長が報告をしてきた。

「艦長！機影確認！この形はキャピタルの可変機です！」
「マスク部隊が来たのか？」
「マスク部隊？なんです？それは」
「…今から戦う相手のことなど知っても碌なことにはならんぞ、ベルリ生徒」
「僕は…」
「しのごのいう前にパイロットスーツ！」
「は、はい!!」

先導するアイーダの後に続くベルリ。さっきまで格納庫の片付けに賑わっていたハンガーは、一気に戦闘態勢へと移行していく。

（あの機体…Ｇセルフをああも扱えるものか、ベルリ生徒が）

走り去ってゆくベルリの背中を見つめながら、デレンセンは教え子の潜在能力の高さを改めて痛感したのだった。

第十三話　強襲、マスク部隊（２）

キャピタル・アーミィの襲撃を察知したメガファウナは、カリブ海洋研究のドックから出港すると同時に、巨大なメガファウナ型のバルーンをフライスコップに乗ったグリモアに引っ張らせていた。

「ダミーの風船を出せ！時間稼ぎにはなる！」

「ＭＳ隊は直ちに発進させるんだ！」

緊急発進と迎撃体制の準備のため、ハンガーは一気に騒がしくなる。そんな中でパイロットスーツに着替えたベルリは、乗るように指示されたＭＳ「ジャハナム」を前に素っ頓狂な声をあげていた。

「ええ、これに乗るんですか!?」

「天才がラライアちゃんをGセルフに乗せて行ってしまったんだから仕方がないだろ！」
「けど、これ操縦できるんですか!?」
「ユニバーサル・スタンダードだ！貴様にならできる！」

ハッパやアダム・スミスたちに言われるままクレーンでコクピットに押しやられるベルリ。

それを傍で見ていたラリーは、手持ち無沙汰になったデレンセンを置くために休憩室を目指していたが、そこで驚愕の通信が入った。

「ラリー！お前さんにはベルリの教官殿の面倒を任せるぞ」
「はぁ!?俺がですか!?」
「こんな状況で捕虜を監視している余裕はないんだ！コクピットで監視さえしてくれればいい！」

そんな無茶な！と言う前に通信を切られてしまう。入れ替わるように出てきたルワンたちは、仏頂面のデレンセンを一眼見てから、面白がってラリーの肩を叩いた。

「隊長が拾ってきたんですから、責任を持って面倒を見てくださいよね」

離れ様にそんなことを言われて、ラリーはうんざりしたように肩を落とし、そんな扱いをされたデレンセンは憤慨していた。

「俺は捨てられたペットではないぞ！まったく！」

「ラリー大尉は予備のグリモアへ！ローンズーはまだメンテナンス終わってないんだから！」

ハンガーの奥で装甲もつけられていない剥き出しのローンズーを見れば一目瞭然で、ラリーは案内されるまま予備のグリモアへと向かう。

どうやら今回はアイーダ姫もアルケインで出撃するようだな、とデレンセンをグリモアのコクピットシートの後ろへと押し入りながら機体を起動させてゆく。

機体が動かせるようになった頃に、接触回線でアダム・スミスの声が聞こえた。

《さっさと猫撫で声の天才からGセルフを取り戻してこい！》

「は、はい！ベルリ・ゼナム、出ます！」

ルワンの操縦するフライスコップに乗ったベルリのジャハナムは姿勢を少し崩しながらもなんとか踏みとどまってカリブの海の空へと飛び立ってゆく。

アメリアの人型機。ジャハナムという新型の様子を見てデレンセンは心の内で呟く。

（アメリアの軍用ＭＳも、こんなものを作り上げているのだな）

「俺の目的は対空迎撃だ。あまり騒いでコクピットから落っこちるなよ」

「ああ、頼む」

簡易的なシートベルトを腰に巻いたデレンセンを見て、ラリーのグリモアもフライスコップへと乗り込んでゆく。

「フライスコップ、コンタクト。いつでもいいぞ！」

「了解、発進します」

応答からすぐに機体はふわりと浮き上がる。すでに先鋒部隊は迫り来るキャピタル・

アーミィの脅威と対峙するために前進を開始しているのだった。

▼

『いいか、我々の目的はGセルフとラライア・マンディの奪還である！エルフ・ブルックの力を存分に見せつけるのだ！』

エルフ・ブルック編隊を率いるマスクはそう言って部隊の面々を鼓舞する。エルフ編隊のすぐ後ろ。数機のカットシーの後ろについてるダベーに乗るレイカは、試作機であるゾルトレイのモニターを操作していた。

（クンパ大佐は私を拾ってくださったのだから、その恩に報いるためにも…）

『全機、ビームを最大出力！目にものを見せてくれる！』

マスクが先行して足から巨大なビームサーベルと化すエネルギーを放出させた。

「島の向こう側から来る!?」

その光に気がついたアメリアの先鋒隊が、エルフ・ブルック部隊との戦闘を開始した。ビームが飛び交い、サーベルによって切り裂かれたフライスコップの残骸が空から落ちてゆく。

そんな戦いの光を見たラライアは、感覚の導くままＧセルフを光の根元へと進めていった。

「ラライア、そっちに行っては…ちぃ!!」

ラライアの動きを監視していたクリムは、突如として動き始めた彼女の様子に戸惑ったまま後を追う。

しかし、頭上にはキャピタル・アーミィのカットシーが迫っていた。

『来たかよ！Ｇセルフ！』

「て、敵…!!」

レーザーとエネルギーをたぎらせるマスクのエルフ・ブルックが無邪気なラライアへ容赦なく殺意と敵意を叩きつけながら迫った。

『デレンセン大尉が捕まえ損なったその機体は、こちらではまだ調べきれていないのだ！』

何もできないまま、コクピット乗る中で縮こまるラライアは出力制御ができないまま、Gセルフを海中へと水没させてしまった。

「ラライアの乗っているGセルフなんだぞ!!」

カットシーの妨害をくぐり抜けたクリムが、水没するGセルフを庇うようにエルフ・ブルックと対峙する。モンテーロのジャベリンを持つ手と、ビームライフルを叩き落としたマスクだが、眼下のGセルフを追いかける隙がない。

気がつけば他の機体が沈んでゆくGセルフの救助へと入っていた。

『ちい、敵は邪魔を!!』

執着に囚われるマスク。初陣で足並みが揃っていないエルフ・ブルック部隊。その様子を頭上で観察していたレイカのゾルトレイは、新たにメガファウナ方向から上がってくる敵の姿を睨みつけていた。

『マスク大尉の動きは感情に振り回されている。これじゃあ全体的な戦い方は見えない…なら!』

先行していた部隊の被害を抑えるためと、ラライアのGセルフを回収するために動いているベルリを援護すべく、ラリーは敵の注意を引きつけるために行動を開始する。

「ベルリたちはGセルフを回収したようだな!そして天才はいつも余計な真似をする!」

その言葉の矛先には、予備のジャベリンを引き出す間も無くマスクに追い回されているクリムの姿があった。

『手負いは逃さない!!』
「振り切れない!?」

機体の加速性能はエルフ・ブルックのほうが圧倒的に上だ。敵から放たれたミサイルをクリムは卓越した操縦技術で掻い潜るが、ビームが搭載された腕がモンテーロを引き裂こうと伸びてゆく。
その瞬間、エルフ・ブルックの背部スラスターにビームライフルの一撃が直撃した。
『ビーム!?ええい、新型の助っ人か!!』

くそっ!直撃はしたはずなのに軽傷かよ!ラリーはグリモアに備わる短身のビームマシンガンを当てたがエルフ・ブルックは元気に動き回っていた。
短身のビームでは距離が離れるごとに威力がガクッと落ちてゆく欠点がある。相手を確実に撃つなら中距離か、近距離まで間合いを持ち込むしかない。
その流れるような動きをラリーのコクピットシートの背後にいるデレンセンは目を向いて目撃してきた。

あらゆる動きに無駄がない、洗練された攻撃だった。しかも短身のビームマシンガンという長距離狙撃に全く向かない武器で、はるか前方で高速機動を行うエルフ・ブルックの背面を見事に捉えている。

軌道上の戦い。目の前で機体を操るパイロットは流星の如き高速機動の最中でもデレンセンが操るエルフ・ブルの四肢を容赦なく削り取っていったのだ。それもビームライフルではなく投擲武器で。

「クリム中尉の機体を落とさせるわけには!」

さらに距離を詰めようとフライスコップに速度を出すよう指示を出したと同時、その行手を遮るようにラリーの頭上からビームの雨が降り注いできた。

ラリーもデレンセンも、全天周型モニターの真上を見上げる。そこには四枚のバインダースラスターで空から降りてくる機影があった。

『その出てきた出鼻を挫く!!』

増援がマスク部隊にたどり着く絶妙なタイミング。

それを見計らってレイカ・マツオカが操るゾルトレイがラリー率いる増援部隊へと強襲をかけたのだ。

「羽付き!?キャピタル・アーミィの新型かよ!!」

フライスコップから離れたラリーは、頭上から迫るゾルトレイへ応戦する。中距離ならば!ビームマシンガンが火を吹いたが、レイカは四枚のバインダースラスターを巧みに操り、その砲火を掻い潜ってみせた。

本来なら武器を持たない機体ではいるが、配備されたビームライフルを構え、狙いを定める。

『この一撃の手向を受け取りなさい!!』

迸った一閃はラリーのグリモアが持つシールドに直撃し、粉々に砕けさせた。

「この程度の攻撃で沈められるか!!!!」

乱射された攻撃から身を翻して距離を取る。
ゾルトレイの射程位置から逃れると、スラスターの負荷を下げるために待機してくれていたフライスコップへと着陸した。
「エルフ・ブルックの編隊に新型だと!?」
「キャピタル・アーミィが、あんな編隊を持っているなんて!」
レイカのゾルトレイの攻撃に呼応するように、マスク部隊のエルフ・ブルックが続き、カリブ海の空は一気に乱戦へと発展してゆく。
「デレンセン!キャピタルは本当にベルリとノレドを助けるために戦争をしかけているのか!!」
ビームの応酬を繰り広げながらラリーはＧに耐えるデレンセンに向かって叫び声をあげた。
あんな不可思議な機体、デレンセンも知らなかった。エルフ・ブルックがこんなにも早く量産されていたこともだ。

『アメリアのエリート面した連中なぞ！』
「狙われた!?まずい！カーヒルぅ！」
「アイーダ!!」

足元のフライスコップが撃ち抜かれたアイーダのGアルケインが海へと落ちる。咄嗟に護衛に回ったカーヒルだが、エルフ・ブルックの数に押されていてはどうしようもない。
どうする…!!
囲い込むように迫るエルフ・ブルック。その腕は、突如してビームの刃によって切り裂かれた。
「Gセルフ！ベルリくんか!!」
カーヒルとアイーダの危機を救ったのは、ラライアからGセルフを返してもらったベルリだった。
ベルリが睨みつけるカリブの空は、色鮮やかなビームと爆発で瞬いていた。

第十三話　強襲、マスク部隊（３）

クリムが操るモンテーロは、その肩に備わる大型翼シールドを使った航空戦が基本的な戦術だった。

マスクのエルフ・ブルックは、可変式ではあるものの所詮は宙域での戦闘を想定した期待で、反応速度は空戦に優れるモンテーロよりも劣っている。

『各機は体制を維持！敵は手強いが、地の利はこちらにある!!』

「そうかい!!」

放たれたレーザーをジャベリンを高速回転させて防ぐクリム。

たしかに出力では負けてはいるだろうが、低高度での戦いならばモンテーロに分がある!!

攻撃を防ぎ切ったクリムはジャベリンを投擲し、マスクへの牽制をかけてゆく。

『ノコノコとやられにきたんですか、貴方たちは!!』

一方で、ラリー率いるアメリアの部隊は、レイカのゾルトレイと空戦を展開していた。
不用意に前に出てきたフライスコップを撃ち落としたレイカは、土台を失った敵を睨みつける。

『反応が遅い！下手くそ!!』

手に持ったビームライフルで敵を撃ち抜く。その動きはマスクと共にエルフ・ブルックに乗っていた時よりも洗練されているように感じられた。

「ちぃ、この機体!!」
『アメリアの機械人形が!!』

距離を潰して接近戦を仕掛けてこようとするグリモアを、すれ違い様に両足を切り裂い、そのままビームライフルで機体を貫いた。
爆散する敵を背後に、レイカは辺りからくるプレッシャーを感じとる。

『無様に前に出てくるからそうなる！マスク大尉、Ｇセルフがきた!!』
『Ｇセルフめ！海から蘇ってきたか！』

ラライアから返してもらったＧセルフを駆るベルリ。すかさずモンテーロの援護に入ったＧセルフをマスクはモニター越しに睨みつけた。
乱舞。直滑降。
Ｇセルフの動きは機敏だった。寄ってたかってくるマスク部隊のエルフ・ブルックやカットシーの腕や翼をビームサーベルで切り落とすその姿は、どこか歴戦の兵のように安定した戦いをしているように魅せている。
（あれにベルリ生徒が乗っているのか…!?）
デレンセンの驚愕をよそに、マスクのエルフ・ブルックがモンテーロの迎撃を振り切ってＧセルフへ強襲をかけた。
『Ｇセルフは海賊が使っていいものではない!!』

「お前たちはぁ！」

網のように放たれるエルフ・ブルックのレーザー網を掻い潜ったベルリは、ビームライフルを撃ち放ちながら空に向かって叫ぶ。

「Gセルフが空から降ってきた意味を考えろぉお!!」

ベルリが戦線に加わり、戦況は一気に乱戦状態へと陥った。マスクを追っていたモンテーロも合流。復帰したアイーダやカーヒルの機体。

そして、ラリーとデレンセンが乗るグリモアにレイカ・マツナガが操るゾルトレイが立ちはだかった。

『あの白い機体…今はいない!?どうなってるわけなの!!』

「隊長!?」

「あの新型は危険だ！俺が惹きつける！」

異様な気配を出すレイカの相手に出たグリモアは、フライスコップの出力を上げさせ

て一気にゾルトレイへと距離を詰めた。

「ラリー大尉!!この性能では無理だ!」

「やってみなければ分からん!!」

「正気か、貴様ぁ!」

機体の性能差を見るだけでも、キャピタルの新型であるゾルトレイとグリモアでは圧倒的にグリモアが劣る。それを承知の上で、ラリーはデレンセンの反対を押し切った。

『一つ目?違う!お前なんかじゃない!!白い機体はどこにいるの!!』

ビームライフルの乱射を巧みに躱す。

せめてグリモアのナイフが届く間合いまで距離を詰めたい。ラリーの動きはグリモアの機体に多大な負荷をかけてゆき、関節部が過負荷でエラーを吐き出していた。

なんとか攻撃を掻い潜ったラリーだったが、その眼前に突如として現れたビーム刃に目を剥く。

「袖からビームサーベルを出した!?」
『ゾルトレイを甘くみられてはいけないのよ!!』

手首部に備わるビームサーベルの一閃は、グリモアの肩装甲の一部を切り飛ばした。機体性能がよくても、隙はできる!

振り抜いた腕の隙を狙い、ラリーはグリモアのダガーを投擲。ゾルトレイが保持していたビームライフルを弾き飛ばした。

よし、これで遠距離からの攻撃は…と息を吐こうとした途端、袖のような格納部に収められたビームがグリモアの機体を掠めた。

「ちい、袖にもビームライフルも隠しているのか!?」

ビームを腕に備えてるのに、なんでビームライフルを持ってたんだよ!とラリーが悲鳴をあげるが、レイカには関係がないことだ。腕からのビームで牽制し、距離を詰める。

「右から来るぞぉ!!」

デレンセンの怒号のような声が上がる。咄嗟にラリーはフライスコップから飛び上がって横一閃に放たれたビームサーベルを飛んで躱した。

お返しと言わんばかりに近づいたゾルトレイにビームマシンガンを放つが、四枚のバインダースラスターで一気に距離を離される。

攻撃も回避も一級品だ。

『この機体、とても肌に馴染む！ふふふ。いいわ、面白くなって…』

舌なめずりしたレイカ。その目の前を緑色のビームが横切った。近くにいたカットシーがビームの直撃を受けて、破裂するように吹き飛ばされる。

『横合いから邪魔を!?』

『ラッセルのカットシーが!!ええい、アメリアにはあんな兵器すらあるというのか!!』

島を楯にするように出てきたのは、アメリアが誇るＭＡであるアーマーザガンだった。ミック・ジャックが乗るその機体はビームを大量に吐き出して、迫っていたアーミィの敵機を蹴散らしてゆく。

「Gセルフとアルケインが下がる！」
「アーマーザガンをよく持ってきてくれた、ミック・ジャック！」

敵の隙をついて、補給に戻るアルケインとGセルフ。アーマーザガンにはモンテーロも合流して、形勢はこちらに傾きつつある。
そんな戦況でも、ラリーのグリモアはレイカの乗るゾルトレイにしつこく追い回されていた。

『そんな機体で、このゾルトレイに勝てるとでも思っているの!?』

袖下のビームを乱射するゾルトレイの動きに合わせて、ラリーも回避はするがこのままではジリ貧だった。フライスコップのパイロットも動きを合わせるのに必死で、攻勢に出るところの話ではない。

「ちぃ…！ここを通すわけには…！」

ラリーの後ろには捕球を受けるGセルフや、撤退する友軍機がいる。ここでやっかいこの上ない相手を抑えきれなければ、戦況を覆される危険があった。

思考を続けるラリーに、デレンセンはリニアシートの固定を外して静かに言葉を発した。

「ラリー大尉、ほんの僅かでいい。機体を安定させてくれ」

「デレンセン大尉、何をするつもりだ！」

「フライスコップに乗り込む」

「本気か!?」

思わず振り返ったラリーだが、すぐに飛んできたビームを躱すために視線を戻した。こんな空戦状態でフライスコップに乗り移るなんて正気の沙汰じゃない。だが、デレンセンはそれが最適だと感じ取っていた。

「でなければ、ここをどうにもすることはできない！あんな機体がキャピタル・アーミィにあるなど……！」

『ちょこまかと飛び回って!!』

「いいのか!?」
「ああ、頼む!」

わかった、とラリーは答えるとゾルトレイの攻撃から逃れるために海面目掛けて急降下する。機体を持ち上げて、なんとかギリギリで姿勢を安定させると、グリモアのコクピットハッチを開いた。

「チャンスは一度だ!いいな!」

背後から迫るビームの雨。それでもラリーは機体を微動だにさせなかった。コクピットハッチに備わるワイヤーで降りたデレンセンは、グリモアの足に捕まって準備を整えた。

「3、2、1!」

一気に駆け抜けてフライスコップの操縦席に繋がるハッチを開けると、驚いた顔をして振り返るアメリアのパイロットに、デレンセンは怒鳴りつけた。

「パイロット！私に操縦を変われ！」

操縦席についたデレンセンは、フライスコップを自在に操ってゆく。アメリアのパイロットはすぐにデレンセンの補助に回った。機体が急上昇し始め、レイカは空に登ってゆくフライスコップにビームを放った。

だが、ビームは当たることなく機体から大きく逸れる。

上昇時の気流を利用しているというの？その疑問を口に出す前に、振り向くグリモアから放たれるグレネードを機体をずらして避ける。

『動きが変わった？けど、その程度の情けない機体で！』

レイカは動きが変わったグリモアを深追いする。それが仇となる。

マスクは目を疑った。さっき退いたＧセルフが色合いを変えて新しいバックパックを背負ってこちらに飛んできていたからだ。

『Ｇセルフはまた新しい背負いものを背負ってきたのか!!』

マスクの攻撃を避けるベルリだが、トリッキーパックを身につけるGセルフは思いの外出力が不安定だった。

「しゅ、出力が高すぎて機体が安定しない！」

メガファウナを模した風船にぶつかっては、飛んできたアイーダのアルケインに受け止められる。

「ミック・ジャック！攻撃が散漫になっているぞ！」

「中尉はそう言ってるだろうけど…ビームが安定しない!!」

かたや、ビームが安定していないアーマーザガンは開き直って格闘戦へと主体を変えていた。巨大なアームでぶん殴られたダベーはひらひらと落下するが、海面スレスレで体制を立て直す。

あんな板っぱちすら落とせないなんて！憤るミックの姿を感じ取ったのか。はたまたメガファウナの風船を見たからか。

まるで子供騙しのような戦い方に、マスクの怒りは限界を超えた。

『貴様たちは…ふざけているのか!!敵はここにいるのだぞ!!』

風船なぞ、とメガファウナの風船を打ち落とすマスク。本来なら背後にも気がむくか、レイカの進言で迫るＧセルフに気づいていたはずなのに、マスクが気がついた頃には、もう懐に入られていたのだ。

「Ｇセルフの力はぁ!!」

淡い燐光がＧセルフを象って飛んでゆく。その直撃を受けたマスクの機体はほんの僅かな間、まるで麻痺にでもかかったかのように動けなくなった。

『な、なんだ!?このシールドは!!』

「隙ができた!!」

身動きができないマスクのエルフ・ブルックの片腕を切り裂いたＧセルフ。

機体制御ができなくなったマスクはカリブ海に浮かぶ小さな無人島に激突しながらも、機体出力を振り絞らせた。

『マスク大尉のエルフ・ブルックが!?』

「よそ見!!」

マスクの情けない姿に目を奪われたレイカの機体にラリーは銃口を向けた。致命的な一撃は避けたが、ゾルトレイの片腕がビームマシンガンの餌食となってしまった。

『この機体は、大佐が私に託してくださった機体なんですよ!!』

そう負け惜しみのようにレイカは言うと、撤退するマスクと共にカリブ海から離れてゆくのだった。

▼

「引いたのか…？」
「みたいだな、相手の編隊の損耗率を見ても的確な引き際だ」

息を切らしてグリモアを振り回していたラリーに、デレンセンも疲れた様子でそう言った。あの戦い方、かなり危険だ。誰かを助けるためではなく、誰かかから何かを奪う戦い方だと感じ取っていたデレンセン。
ミノフスキー粒子も薄くなった頃、

「ぁああー!!?」

ベルリの鈍い悲鳴がコクピットに響き渡る。

「ベルリ、どうしたんだ!?」
「アイーダさんがいないんですよ!!」

たしかに、キャピタル・タワーからアンノウンが発進したと彼女は言っていたような

気がする。ベルリはすぐに機体を宇宙へ向けて飛翔させていった。

「そう言ってすぐに宇宙に向かっていけるの、俺はすごいと思うよ」
「ベルリは恋を知ったのか？」
「どうだか」

デレンセンの意地悪そうな言葉に、肩をすくめて返す。
しばらくすると、アイーダと一緒にキャピタル・タワーの運行長官である母、ウィルミット・ゼナムを連れ帰ってきたベルリに、メガファウナの一同は頭を抱えたのだった。

第十四話　３勢力、閑話休題

「これが、月側の宙域を望遠カメラで撮影したものだ」

キャピタル・アーミィによる襲撃を退けたベルリたちは、彼の母であり、キャピタルの運行長官でもウィルミット・ゼナムを迎えることになった。

偶然にもアメリア軍の上層部に属する人間であるグシオン・スルガンや、キャピタル・アーミィでは戦死扱いになっているデレンセン・サマターもその場に居合わせている。

ウィルミットが「なぜベルリを人質に取ったのか？」という母親として当然の怒りを示したのだから、グシオンはアメリアが握った「宇宙からの脅威」について全体的な現状のすり合わせを提案したのだった。

「ふん、アメリアはタブーである天体観測というものも躊躇いなくやるのだな」

「……こちらは、ただ星を見るだけにわざわざＭＳを宇宙にまで上げたりする馬鹿ではありませんよ。ここを見てください」

鼻を鳴らして不機嫌に言い切るデレンセンに顔をしかめながら、グシオンは端末に表示した映像の一部を拡大する。

それはアメリア軍に属することになったラリーが衛星軌道まで登って観測した月周辺宙域の映像だ。

ウィルミットとデレンセンが映像を覗き込むと、そこには確かに「不自然」な光がいくつも映っていた。

「この光とこれは、この写真を撮影する前からありましたが、これとこれはいきなり現れた光です。それも数時間単位で増えたり減ったり、そして移動をしています」

「あなた方は、この光を宇宙の脅威だとおっしゃられるのですか？」

「具体的には、未確認の宇宙艦隊というべきでしょう」

信じられません、というのがウィルミットの素直な感想だった。彼女にとって月というより宇宙はスコード教を通して地球に恵みを与えてくれる神聖な場所だ。

そんな相手がアメリアやゴンドワンのような野蛮な戦力を有しているとは、とても信じるわけにはいかなかった。
もし、それが事実ならスコード教の聖地である宇宙そのものがタブーを犯してある他ならないのだから。
それでも、グシオンは言葉を続けた。
「アメリア側はこの未知なる宇宙艦隊の動きが活発化していることから、宇宙からの脅威が地球を侵略しようとしていると想定し、宇宙艦隊を創設しました」
「ゴンドワンと大陸間戦争なんてものをするから宇宙の脅威とやらも活発に動き始めたのだろうが！」
デレンセンが机を叩いて声を荒げる。それもそうだな、と食事を取るベルリの隣で話を聞いていたラリーは思った。
宇宙からの脅威なんて言っても、先にゴンドワンとの大陸間戦争を始めたのはアメリアだ。
キャピタルから見れば、大陸同士の戦争を通して野心を肥大化させた国家が宇宙にまで権力を広げようとしている構図にしか見えないだろうし、それを容認するなどできな

いのだから、キャピタル・アーミィなんてものを創設したのだろう。

「逆にそれは、彼らが宇宙から地球を見下ろしている証拠ではありませんか」

「そもそも、宇宙からもたらされるフォトン・バッテリーはザンクトポルトに運ばれるのです。スコード教の神聖たる宇宙自らがタブーを冒してまで地球侵攻など……あり得ません。認められません」

「ですが、現に月の動きは活発に……」

「貴様らアメリアがゴンドワンや我々キャピタル・アーミィとの戦争に降伏すればそんなことにはならないのだ!」

話は平行線の様相を見せ始めていた。ベルリは人質だというのにその言い合いを呑気にご飯を食べながら聞いている。アイーダ姫も、カーヒルと共にいて我関せずと言った具合。

「では、なぜアーミィなどという軍隊をキャピタル側も作られたのですか!そちら側はフォトン・バッテリーを運搬することがスコード教の……」

「そちらが運搬しているフォトン・バッテリーを戦争の道具に使うのだから、それを食い

止める為にアーミィは作られたのだ！」

グシオンの言葉に吠えるデレンセン。彼の人のあり方を見る限り、アメリアのやり方に反発するのは当然だった。本来なら世界中に等配分されるはずのフォトン・バッテリーを不正に入手し占有しているのだ。

キャピタル・ガードの本来の起源は、そう言った地球側の不正な行いを監視し、フォトン・バッテリーを世界中に等しく配給するスコード教の教えを守る責任を負うために設立された経緯がある。

だが、アーミィのように自ら戦いに出るような理由はない。ガードはあくまで専守防衛が基本な組織なのだから。

「その理屈はアーミィ自身がタブー破りをしている他にはありませんよ、デレンセン教官！」

「しかし！」

「ちょっと待ってください」

属する組織の価値観と意見を傘に、泥かけ試合を始めようとしていた３人の言い分に

ラリーが待ったをかけた。そもそも、この話はこじれる前から疑問に思う箇所がある。
「なぜ宇宙側の脅威はフォトン・バッテリーを地球に送り続けているんですか?」
「それは、スコード教の教えあってのことです。技術や科学の発展を人類は捨て去り、宇宙から恵まれるフォトン・バッテリーを享受することで繁栄をしてきました」
熱心なスコード教信者でもあるウィルミットがはっきりとした口調で言葉を返した。宇宙からの供給によって地球を生きながらえさせ、平和と繁栄を築き上げるのが本質。
そこがラリーにとっては最大の疑問だった。
「そう、それです。宇宙からの脅威はそれを盾にすればいい。侵略するが、逆らったらフォトン・バッテリーの供給を止めるって」
「そんなバチ当たりなことを……!」
「そのバチも神も、持っているのは宇宙なんでしょう?·なら、それを反子にするのも彼らの自由。しかし、それをせずにわざわざ戦力を拡充して準備をしている」
そう言われれば確かにそうだとデレンセンもグシオンも言葉を押しとどめる。ウィ

ルミットが言うように宇宙はスコード教の聖地であり、フォトン・バッテリーはキャピタル・タワーの遥か先から地球に送り届けられる贈り物なのだ。

それを止めてしまえば、こうやってカリブ海洋研究所にいれるような余裕もなくなるし、大国となったアメリアとゴンドワンも大陸間戦争や宇宙への進出など言ってる場合じゃなくなる。

「なにか、ほかに思惑があると言うんですか？」

食べていたモノを飲み込んでベルリがそう疑問を投げた。

「宇宙からの脅威は〝侵略〟ではなく、地球を〝征服〟しようとしているってことさ」

「……侵略と征服ってどう違うのです？」

ラリーの回答にベルリは少し顔をしかめて疑問を吐き出す。それに、アイーダは少しため息をついてから簡潔に説明を始めた。

「侵略は他国が管理下に置く地を他の国が奪い取ること、征服は敵を武力によって討伐

して支配することだ。簡単に言えば、侵略は「統治への乱入」で、征服は「支配する」ということです」

「フォトン・バッテリーの配給を止めれば地球にいる人類は戦争なんてもの以前に、文明的な生活すら出来なくなる」

そこまでいって、ベルリはあぁ！っと納得したような声を上げた。

フォトン・バッテリーの供給が止まってしまえば、それこそ地球は宇宙世紀末期の荒廃した地上の有様のようになる。

そんな不毛な地を支配しても宇宙人にとってはなんら旨みはないはずだ。

「フォトン・バッテリーを供給することで宇宙に依存させる生活圏を確立させ、ある程度文明が出来上がったところで、武力を持って地球を支配下に置く」

「それでは、我々は宇宙側にとっては家畜同然ではないか！」

ラリーの推察にグシオンはハッキリとした怒りを覚えた。宇宙世紀末期の混迷期から地球を立ち直らせたのは間違いなく過酷な地球環境の中で生き抜いてきたアメリアの国民や、地球の住人たちだ。

それを宇宙からフォトン・バッテリーを送るだけしかしなかった宇宙人たちが地球の豊かな土壌を丸ごと奪って支配下に置くなど、地球を立ち直らせてきた当事者たちからすれば認められないことでもある。

だが、宇宙人たちの狙いがそうだったとしても現状ではその計画はすでに破綻しているとラリーには思えた。

「たぶんそうだったんでしょうね。ヘルメスの薔薇の設計書が地球にもたらされるまでは」

たった一つの設計書であるソレが地球にもたらされたことで状況は一変した。

宇宙からすればもやしのような文明だった地球が急速に成長と進歩を遂げて、ついには宇宙にまで足が届くようになったのだから。

「地球側が脅威的な速さで科学を進歩させてあるから、宇宙人も急足で宇宙艦隊を用意していると？」

「あくまで推測でしかありませんが」

デレンセンの言葉に、ラリーはあくまでもそう答えた。なにせここから宇宙の人々の想いや考えが読み解けるわけがないし、彼らの組織構図もわかっていない。

急ピッチで宇宙艦隊を作り上げたと言うのになぜ攻めて来ずにフォトン・バッテリーを供給し続けているのか、という疑問も残る。

「無力な地球人を支配する構図が崩れた今、宇宙側は、まだ拙い今のうちに地球側を叩こうとする」

「ならば、アメリアがタワーに上がって迎え撃つことが……」

「タワーの守備は、我がキャピタル・アーミィの本懐であり……」

再び議論を始めたグシオンとデレンセンを横目に、ラリーが推察した宇宙の思惑にショックを受けたウィルミットはバルコニーで風に当たって落ち着きを取り戻そうとしていた。

「母さん、大丈夫？」

「ええ、しかし……」

「たぶん、宇宙の脅威がやってきてもタワーやクラウンには攻撃は仕掛けてこないで

しようね」

ウィルミットの不安に、ラリーは安心を与えるようにそう言った。

地球と宇宙をつなぐ軌道エレベーター。そもそも、その人類の遺産が破壊されれば地球は宇宙との繋がりを絶たれて立ち行かなくなる。

「どういうことです？」

カリブの海は夕日の赤に染まっていた。その景色を背景に、エレベーター破壊による被害を一番に懸念していたウィルミットの声に、ラリーは落ち着いた声色で応じる。

「タワーは宇宙からフォトン・バッテリーを運び込む唯一の方法なのでしょう？これから地球を支配しようっていうのに、エネルギーの供給路を絶つほど、連中は馬鹿じゃないはずさ」

そう答えたラリーに、ウィルミットはおかしくなって声を上げて笑った。隣にいるベルリや、後ろで言い合いをしていたグシオンとデレンセン。そしてアイーダも驚いた顔

をしている。
なにより一番びっくりしていたのはラリーだ。
「ラリーさん、あなたって面白い人ね」
息子を人質に取った極悪人かと決めつけていたが、その感性は知識人でもあり、熱心なスコード教の信者でもあるウィルミットが気にいる性格をしていたのだ。
「母さんがそういうのって、なんだか珍しいです」
「あら、そうかしら？」
困ったように笑うベルリに驚いた顔をするウィルミット。
ひとまず、戦いと話し合いを終えたラリーたちはウィルミットが待ってきた生姜のクッキーと紅茶を囲みながらカリブの夜を過ごしたのだった。

第十五話　メガファウナ、南へ

イザネル大陸、海岸線。
メガファウナに乗艦する一行は、軌道エレベーターがあるキャピタル・テリトリーに向けて進路を進めていた。
こうなった理由は、グシオン総監……アメリア側から提出された月軌道に位置する謎の宇宙艦隊が理由だった。
キャピタル・ガードであり、熱心なスコード教の信者でもあるベルリの母、ウィルミット・ゼナムと、優秀なパイロットでなるデレンセン・サマターもひとまずは宇宙からの脅威に備え、アメリアとキャピタル・ガードによる共同体制が必要であると認識していて、ドニエル艦長指揮のもと、メガファウナはカリブ海からイザネル大陸へと移動を開始したのだった。
「クリム中尉からモンテーロは好きにしていいって許可は取ってあるんだから、いいだろう？遊ばせておくには勿体無い機体だ」
「技術士を褒めても碌なことにはなりませんよ」

「素直に嬉しいって言えばいいだろ！」
　クリム中尉は、アーマーザガンを持ってきたミック・ジャックと共に囮としてアメリア方面へと帰還していった……というのが建前で、アメリア側での宇宙艦隊の組織編成が完了したことにより、クリム中尉を指揮官として呼び戻した側面もある。アーマーザガンによる囮もあって、メガファウナの進路の安全を保証した効果もたしかにあった。
　それで、クリム中尉が乗っていたモンテーロが機体余りになっていたのだ。メガファウナにはパイロットはいるが、万年人手不足である以上、パイロットもＭＳも余らせている訳にはいかない。
　ウィルミット長官の打診と、グシオン総監の許可もあり、キャピタル・タワーに辿り着くまでの間、モンテーロのパイロットはデレンセンが務めることになったのだ。面倒はラリーが見ろという貧乏クジもセットで。
　シュミレーターモードのコクピットの中で、操縦マニュアルを見ているデレンセンに、ラリーはコンソールを覗き込みながら問いかけた。
「いけそうか？デレンセン」
「……勝手は違うが、基本は一緒だ。何度かシュミレーターを通せばマシにはなるさ」
「さすがはベルリの教官殿だな」
　茶化すな、とデレンセンに文句を言われながらもラリーは必要な操作をデレンセンに

説明する。隣にはハッパたちメカニックマンによって修理されたローンズーが鎮座している。

両肩に備わるフレキシブルスラスターは修復され、機体各所の傷や摩耗も綺麗に治っている。

これで次の出撃は愛機で出れそうだと、ラリーはモンテーロのコクピットから降りながらブリッジへと向かうのだった。

当面の目的はメガファウナの食糧の補充とガードへの長距離電話。今、メガファウナはミノフスキーフライトによる低空飛行の最中だ。高度と速度を上げればあっという間にキャピタル・アーミィのレーダー網に引っ掛かってしまうため、ウィルミットが抜け道を用意した上で、長距離電話でガードに連絡しエスコートを依頼する予定だ。

「ラリー、ちょうどよかった。そろそろ昼食も兼ねて第一目的の長距離電話の場所に向かうぞ」

ブリッジに上がるとドニエル艦長がそう言ってきた。程度のいい谷間にメガファウナを着陸させて、ラリーたちは二足歩行のシャンクで目的地を目指す。降り立った場所は何もない長閑な田舎だった。

僻地であるが、こういった場所には色々と物を売る農家があるらしい。

「で、なんで俺も同行することになる……」

「護衛は必要でしょう？隊長」
長距離電話で連絡を取るウィルミット、その護衛兼シャンクの運転にラリー。
荷物持ち用のシャンク2台にはベルリと看護師であるキラン、アイーダとカーヒル。そして気分転換についてきたノレドとラライアだ。山間を抜けた先に広がっているのは田園風景で、広大な牧草地帯や畑が地平線まで広がっている。穏やかな気候の地であるが、旧世紀……いわゆる宇宙世紀末期頃はひどい有様で、環境汚染もピークに達していたのだとか。
今は宇宙から供給されるフォトンバッテリーの配給や、空気と水の玉のおかげで争いが激減し、壊滅的だった大地も少しずつ本来の豊かさを取り戻していたのだ。
「この地域はスコード教でも宝寿と豊かさを司る地であり、地球の人々の食を支える大地でもあるのです」
「確かに、穀倉地帯の大半はキャピタル・テリトリィの中に属していますね。やはりゴンドワンやアメリアでは安定した供給は見込めないですか」
「……争いを好む地に豊かな地は生まれないですもの」
ちなみにその話は全部移動途中のウィルミットがしてくれた。ラリー自身、スコード教の信者ではないのだが、末世的な食糧事情や環境汚染の話には興味があり、目的である長距離電話がある雑貨屋に着くまで話は絶えなかった。

「母があんなに楽しげに喋ってるのは久しぶりですね」
雑貨屋の近くにある生簀。新鮮な食材である魚を網で取っている傍で手伝っていたベルリがそんなことを言ってきた。息子曰く、気難しい彼女が初対面……しかも男の人にこれほどまでに笑顔を見せること自体が珍しいのだとか。
「熱心にスコード教に勧誘しているだけじゃないのか？」
「母なら入信手続きのタブレットを持ってきますよ」
「有無を言わさず入信かよ……」
どの時代になっても宗教というものにのめり込んだ信奉者はアグレッシブなのである。しかし、そうしないということは純粋にウィルミットはラリーという人物を気に入っているということだ。
「というか、なんで気に入られてるんだ？息子を拐った誘拐犯だぞ……」
「僕が無事ですからね！」
「何度も戦場に出て起きて無事というのか？それ」
ベルリもベルリで天然なのか、ウィルミットの人の好みもよくわからないものだ。そう思いながら雑貨屋で買った魚や鶏が入ったコンテナをシャンクに積んで、帰り道を進む。戻りはベルリがラリーのシャンクと交代し、ウィルミットを後ろに乗せていた。
「あんなに仲良いのに、ベルリってもらいっ子なんだって」

話題の中で出てきたノレドの言葉に、思わずアイーダが聞き返した。
「えっと……つまり、彼は養子ってことですか？」
「そっ。詳しくは私も知らないんだけどね」

それを聞いたアイーダは少し複雑な表情をしていた。彼女もグシトン総監が引き取った養女であることは、カーヒルもラリーも知っている。自分と同じ境遇であり……しかも、同じく　Gセルフを動かせるのだ。何かが引っかかる。しかし、明確な何かがわからない。アイーダのそんな思考を知らずか、ベルリとウィルミットは帰路でも楽しげに話をしているのだった。

▼

「ミノフスキーフライトって風に煽られやすいんだよ」
長距離電話でキャピタル・ガードとの連絡も取れた頃。メガファウナはテーブル大地が特徴的な丘陵地帯に差し掛かっていた。断崖絶壁のテーブル大地の谷間で生ずる気流が右へ左へとメガファウナを揺らしている。

ブリッジのシートに腰掛けていたウィルミットは完全にグロッキー状態だった。
「……宇宙戦艦なんて人類を破滅に導く象徴です」
恨み言のようにいう彼女を一瞥して、グシオン総監はメガファウナの進路へと目を向けた。ここはすでにキャピタル・タワーの真下だ。エスコート役のキャピタル・ガードがくれば幾分か緊張感もほぐれるはずだが、もしアーミィに見つかればひとたまりもない。
「ドニエル艦長！こんな状況なのに本当にテスト射出をするんですかぁ!?」
通信先にいるのは格納庫でアルケインに乗るアイーダだった。こんな不安定な状況だというのに、ハッパやアダム・スミスらはＭＳの射出準備を進めている。いわく、どんな状況下でも即時戦力を投下するためのテストなのだとか。
「こういう時だからこそです、姫さま。二人は準備いいか？」
「いつでもどうぞ～」
射出準備に入っているのは、空戦能力に優れたデレンセンのモンテーロと、ラリーのローンズーだ。ルワンとオリバーのグリモアと、ベルリの　Ｇセルフはすでに甲板に出ていてこちらの射出テストに備えている。
アイーダはフライトユニットのテストがあるのだが、カーヒルと共に格納庫待機だ。
「飛び出して勢い余って崖に突っ込んだりするなよ！」

ハッパの言葉を適当に聞き流して、ラリーはパックのミネラルウォーターに口をつける。ハッチが開いてゆき、低空で飛ぶメガファウナの眼前には大きな滝があって、そこから水飛沫をあげて膨大な水が流れ落ちているのが見えた。
「射出よーい！3、2……」
「ラリーさん！待って！」
アダム・スミスのカウントの最中、ベルリの声が微かに聞こえたが、すぐにノイズと電子機器のジャミングで聞こえなくなった。ミノフスキー粒子が撒かれた!?射出間際に無線通信がすべてダウンし、ラリーのローンズーはそのまま地球の空へと放り出されることになった。
『見つけたわ、白い奴！』
飛び出した視線の先。そこには肩から生える四枚のバインダースラスターを閃かせた機体。
キャピタル・アーミィのレイカ・マツオカが駆る「ゾルトレイ」が手ぐすねを引いて待っていた。
「四枚羽の機体!?」
『ここであったが運の尽き!!』
飛び出した直後、真正面から襲われることになったラリーは、ゾルトレイの袖から放

たれるビームサーベルに晒された。突然の出来事で、普通なら身体は硬直する。出てすぐに攻撃にあって撃墜されるＭＳも少なくはない。

「こなくそ!!」

だが、ラリーは冷静だった。出力を落とし四肢全てを大の字に開くことによって機体全てをフラップとして利用した。揚力を失ったローンズーはすぐに失速し、落下を始める。間一髪のところでラリーは振るわれたゾルトレイのビームサーベルを躱したのだ。

『躱された!?』

「踏み込みが甘い！」

仰向けに倒れるように落下するローンズーは、ゾルトレイを真下から見上げる形になった。落下と同時に構えたビームライフルは、的確に狙いを定め、ゾルトレイの腰に備わるリアスカートを削り取るようにビームの帯が走った。

『マツオカ少尉！ええい！ミイラ取りがミイラになったか!!』

『すいません！マスク大尉！』

被弾したレイカのゾルトレイと入れ替わるように現れたのはマスクの駆るエルフ・ブルックだ。修復したゾルトレイのテスト運転に付き合って出てきたマスクでもあるが。

『こんなところで会えるとは……絶望しないですむぞ!!　Ｇセルフ!!』

カリブの海での雪辱を晴らしてもらう！コクピットの中でマスクにしか聞こえない

復讐の決意。メガファウナに標準を合わせて臨戦体制に入った。
「ステア！加速するなよ！」
「イエッサー！」
ここで取り乱して速度を上げれば、それこそアーミィの本体にメガファウナが捕捉されてしまう。冷や汗を流しながら操舵するステアを落ち着かせるようにドニエルが肩に手を置いた。
「それ、セクハラですよ！」
「今はそんなこと言ってる場合じゃあなぁい!!」
低速、低空と、宇宙戦艦としては致命的な弱点を晒すメガファウナの頭上では、凄まじい空中戦が繰り広げられていた。マスクの操るエルフ・ブルックと、手負いのゾルトレイを取りつかせるわけにはいかない。
甲板にいたベルリの　Gセルフと、格納庫にいたアルケインもすぐさま応戦していた。
『まだ調整中だっていうのに！邪魔をするな!!』
リアスカートに被弾してもゾルトレイの威圧感は衰えるどころか、さらに増しているように思えた。ビームライフルを乱射しながら敵を近づけないよう牽制する相手に、カーヒルはアイーダのアルケインの前へと割って入る。

「姫様は下がって！」
「ごめんなさい、カーヒル！……役立たずのわたし！もっと早くできないの!?」
　自分の立ち回りの悪さにアイーダは顔を顰めた。もっと素早く動けばカーヒルに諌められることもなかったというのに。だが、ここは戦場。敵も味方も悠長には待ってくれない。
「ジャベリンくらい使えるってんだな!?」
「デレンセン・サマター、モンテーロ、出るぞ!!」
　ラリーに次いでデレンセンのモンテーロも射出される。青い特徴的な機体を目にしたマスクは顔色を変えて出てきたモンテーロ目掛けて指先からビームを放った。
「エルフ・ブルック!!船にはウィルミット長官が乗ってるんだぞ!!」
　デレンセンは、すかさず展開したジャベリンを高速回転させて擬似的なビームシールドを発生させ、メガファウナに直撃しそうなビームの雨を切り払った。
『マスク大尉！敵の前ではしゃぎすぎるから！下から来る！』
　レイカの叫びはマスクにとっては遅すぎる警告だった。気がついた時には下から上がってきたラリーのローンズーが、ビームを打ち出していたエルフ・ブルックの腕を切り裂いていたのだ。
『腕を斬られた！うわぁ!?』

流れるように蹴り飛ばされた先。緑色のビームを纏ったジャベリンを持つデレンセンが、体制の整っていないエルフ・ブルックへと襲いかかる。
「わかったぞ、ジャベリンの使い方が!……チェストォッ!」
上から袈裟斬りに振り下ろされたジャベリンの一撃は、手負いのエルフ・ブルックにトドメを刺した。片腕と片足を完全に切り裂かれた機体は、姿勢制御が出来ずに地面に向かって落下を始める。
『き、機体が持たない……!バララ!!』
落ちてゆくエルフ・ブルックを視界に収めるベルリは、次の瞬間にギョッと目を向いた。墜落してゆくエルフ・ブルックのコクピットハッチが開き、人が這い出してきたのだ。
「人ぉ!?人を見ちゃったら撃てないでしょ!?」
マスクをつけた淡い青髪のアーミィ兵は、事もあろうかそのまま機体を捨てて空へと身を投げ出したのだ。身につけているのはアーミィの制服であり、ノーマルスーツでもないし、ウイングスーツも身につけていない。もちろん、パラシュートもだ。
文字通り、身一つで空に飛び出した……馬鹿野郎だった。
「〜〜ッ!冗談じゃない!!」
思わず、近くにいたラリーのローンズーが自殺にも似た脱出を試みたマスクをマニ

ピュレーターで受け止めた。マスク自身も、バララの操るエフラグに受け止めてもらうつもりだったのか、白いローンズーにキャッチされて絶句している。

「パイロット！生きているな!!」

音声通信でマニピュレーターの中にいる敵兵に声をかける。しばらくしてから無事を知らせるように弱々しく手が上がったのが見えた。機体を安定させてゆっくりと降下すると、予備のエルフ・ブルックを乗せたエフラグがメガファウナのＭＳ部隊の周りを旋回しているのが見えた。

『マスク大尉が敵に捕まった!?』

四枚羽のゾルトレイも、自分の上官であるマスクが捕まったことに動揺を隠せない。すぐさまカーヒルやルワンたちが銃口を向けたまま、レイカとバララの乗る機体を取り囲む。

「投降してもらおうか、キャピタル・アーミィ」

『バララ・ペオール……』

投降勧告からしばらくの沈黙の後、レイカは観念したように仲間の名前を呟く。敵意を剥き出しにしていたエフラグも投降するように緩やかな旋回を始めた。

「投降信号だ、ルワン！デッキにエフラグを着艦させるぞ！」

ドニエル艦長に促されるまま、マスク大尉と彼の部下であるバララ、レイカはメガ

ファウナに着艦したのだった。

第十六話　ビグローバーへの道

「自分はキャピタル・アーミィのマスク大尉である」
捕虜だというのにかなり尊大な物言いだな、とラリーは格納されたローンズーのコクピットタラップから降りながらそんなことを思っていた。
「Ｇセルフのヘタクソ！デッキを凹ませるな！」
ふらふらと甲板に着地するベルリのＧセルフに、操舵手のステアが苦言を言ったのがヘルメットに備わるスピーカーから聞こえてきた。メガファウナは未だに警戒態勢で、ルワンやオリバーも周辺警戒の真っ最中だ。
メガファウナは捕虜となったアーミィのエルフ・ブルックと、ゾルトレイ、そしてダブルのエフラグ。
それによってすっかり手狭となっていた。
カーヒルのグリモアなんて格納庫に入りきらず、先に入ったモンテーロとローンズー、そして　Ｇセルフとアルケインの補給と点検待ちで甲板で待機する有様だ。

　これは捕まえたのは悪手だったかな、と思考がよぎるが、あのままパラシュートなしのスカイダイビングを敢行したマスク大尉と名乗るハジケリストを放っておくのも目覚めが悪かった。しかも部下であろう二人の士官は女性……というより、まだあどけなさが残る少女だった。

「同じく、マスク部隊所属、バララ・ペオール少尉」

「マスク部隊所属、レイカ・マツオカ少尉です」

　キャピタル・アーミィもまた随分と余裕と何ふり構っていなささが目立つように思えた。敬礼して自己紹介する二人の少女を一瞥してラリーはため息をつく。無論、この少女らにも戦う理由があるのだろうが……こんな若い娘を戦いに駆り出す組織のどこに正義があるというのか。

　ふと、マスク大尉が気付いたのか、捕虜を取り囲むクルーの中にいるデレンセンに視線を向けると高らかに笑ってみせた。

「まさか、死亡したと思われていたデレンセン教官殿と……ウィルミット長官が海賊部隊と行動を共にしているのは思いもしませんでしたよ」

「アーミィはエルフ・ブルックを量産したのだな。悪戯に戦火を拡大させるつもりか?」

　芝居がかった物言いをするマスクの言葉をほぼ無視する形でデレンセンがそう切って返した。エルフ・ブルックの量産の話は確かに耳にはしていたが、あれほどの数を揃

えるには時間も金も設備も必要だ。
　そしてそれは、デレンセンが知る限りキャピタルテリトリーには存在しない。とするなら、軌道エレベーターに点在する〝ナット〟のどこかにＭＳの研究所や開発拠点が存在しているのだろう。デレンセンの質問に、顔を怒りの表情に染めてマスクは食ってかかった。
「海賊部隊に身を寄せて、貴方は心も海賊になったのですか?·キャピタル·アーミィはアメリアやゴンドワンからの侵略を防がなければならないのですよ!·」
「アーミィの目的は　Ｇセルフとベルリ生徒たちの奪還のはずだ!·貴様たちは人質救出を口実にただ戦争がしたいだけじゃないのか!?」
「今更になってそんなことを……!!」
　取っ組み合いの言い合いになりそうなところで、ラリーが二人の間に割って入った。ここはキャピタル·ガードでも、キャピタル·アーミィの拠点でもない。アーミィの目的がベルリとノレド、そして　Ｇセルフの奪還であろうがなかろうが、すでに闘いという歯車は回り始めている。エルフ·ブルックや、四枚羽のゾルトレイが戦場に現れた以上、もはや人質の救出という名目で止まれる場所にいないのだ。
「とりあえず、仲間内の言い合いはあとにしてくれ。今のお前たちは海賊部隊と揶揄するウチの捕虜なんだからな」

デレンセンは、ウィルミット長官の頼みでメガファウナのパイロットをしてもらっているが、元は軌道上で保護したキャピタル・アーミィの捕虜だ。本人曰く、デレンセン・サマターはキャピタル・ガードであると言っているが、アーミィとガードがいかにソリが合わないのかは明白だった。

今回保護したマスク大尉や、二人の女性士官は間違いなく捕虜として大人しくしてもらう必要があるが。

「……貴方が、白い機体のパイロットですか」

ふと、ラリーに黒髪と赤い目が特徴的な少女が話しかけてくる。さっき自己紹介してきたレイカ・マツオカ。あの四枚羽が付くゾルトレイのパイロットだ。戦場での荒々しい佇まいや操縦とは打って変わって、その顔つきは幼く、どこか儚げであった。

「……メガファウナでＭＳ部隊の隊長をしている。ローンズーのパイロット、ラリー・レイレナードだ」

「レイレナード……」

俺の名を彼女は静かに反復した。真っ赤な瞳に映る光が印象的で、彼女は白いローンズーと俺と、何度か視線を彷徨わせていた。

「どうしたんだ、マツオカ少尉」

「……いえ、なんでもありません」

マスクの言葉に彼女は視線を伏せながら答えた。彼女にもどこか思うところがあるのだろうか。特に話すこともないので、と思っていたら、マスクが演劇役者のように両手を広げた。

「それで？我々を捕らえて何をしようというのですか？交渉ですか？拷問ですか？」

「いや、君たちにはビグローバーに着いた段階で降りてもらう。機体も持って帰ってくれ」

そう言ったのは格納庫に降りてきたアメリア軍のグシオン総監だった。呆気に取られるマスク部隊の面々を見渡して、彼は困ったようにため息をついて実情を話し始めた。

そもそもメガファウナはアメリアの正規の軍属ではない。ただでさえ、偶発的に巻き込まれたベルリやノレド、戦闘で捕虜となったデレンセンに、大気圏グライダーで降りてきたウィルミット長官までいるのだ。これ以上捕面倒を増やすわけにもいかない。それにキャピタル・アーミィの捕虜なんて面倒この上にないのだ。

「ただし、下手な真似はしないことをお勧めする」

そう釘を刺してグシオン総監はその場を後にした。呆然としているマスク大尉を引き連れて、ハッパとアダム・スミスが機体を動かすように三人の背中を押してゆく。アルケインとモンテーロの整備が終われば、次は　Ｇセルフとローンズー。その次にはグ

リモアと、やることは山のようにあるのだから。
「艦長ぉ！レックスノーが来ました!!」
「キャピタル・ガードの案内人か！」
ウィルミット長官が長距離電話で要請したキャピタル・ガードが合流したのは、ちょうどマスク大尉がバララと共にエフラグを移動させた頃だった。

▼

「ケルベス・ヨーだ。アンタが白い機体のパイロットだったか」
「ラリー・レイレナードだ。件のことはすまないと思ってる」
メガファウナを廃屋となった工場に案内し終えたキャピタル・ガードのパイロット、ケルベスとラリーは握手を交わした。彼とはベルリを人質として攫ったときに顔を合わせている。
てっきり剣呑な態度で来られるかと覚悟していたが、意外にもケルベスはフレンドリーにラリーへ話しかけてきた。
「気にするな。あの状況下で切り抜けられたんだから良しとするべきだろ」
「そう言ってもらえると助かるよ」

彼も優秀なパイロットであり、デレンセンの戦友。ベルリにとっても教官殿の一人であり、旧型であるレックス・ノーの操縦技術を見ても、その能力は十分に高い。それに上に立つ素質もあった。

戦死したはずのデレンセンと顔を合わせた時は、蘇った死人を見たかのように驚いて腰を抜いていたのが印象的でもある。

廃屋に停泊したメガファウナには、ウィルミット長官が頼んできたガードの補給部隊が到着していた。彼らが運ぶコンテナには空気の球と水の球、そして新品のフォトンバッテリーが積み込まれている。

艦内の点検のために入ってゆく補給部隊と入れ違いなる形で、ラリーたちはエフラグに乗り込んだ。

「長官の命令で、貴様たちをビクローバーに案内する。シャンクは人数分用意した」

ベルリの提案と、ウィルミットの計らいでグシオン総監はスコード教の法皇であるゲル・トリメデストス・ナグとの会談をすることになったのだ。

もともとキャピタル・テリトリーの住人であるベルリとノレドはもちろん、ラライヤも同行する。

会談にはウィルミット長官とグシオン総監、彼の娘であるアイーダも参加。

双方の護衛としてケルベス、デレンセンに、カーヒルとラリー、そして捕虜となった

マスク大尉たちも行動を共にする。捕虜であるマスクたちは、アーミィ関係者にそのまま引き渡す予定で、その見返りにメガファウナには攻撃しないという確約をさせるのが目的だ。

こう見ると随分と大所帯となったものだ。人数分のシャンクはあるが、スペースの問題もあったのでバララが操縦するエフラグに搭乗。予備のエルフ・ブルックと、ゾルトレイも返還するために運びこんでゆく。

「まさか、こんな形でここにくるとはな」

「前回は景色を見るところじゃありませんでしたからね」

世界中にフォトンバッテリーを輸出するトレーラーの頭上を通過し、二機のエフラグはキャピタル・タワーの麓にある居住地区に着陸した。ここから先はシャンクでの移動となる。

「タワーまでエフラグでいっちゃえばいいのに……アーミィだってそうしてるんでしょう？」

「アーミィはギャングのようなものです」

ノレドの不満をウィルミットがバッサリと切って捨てた。隣にいるマスク部隊の面々が複雑そうな顔をしているが、彼女は気にもしないでラリーの乗るシャンクへと同乗した。

タワーの麓に位置する居住地区は、今日が休日のようで大いに賑わっていた。酒を手にして踊る者や、楽しげに食事を取る者、家族との団欒を楽しむ者など、さまざまな豊かさと平和がここにある。

グシオン総監からすれば、豊かさの成れの果てともいう見方もあるのだろうが、こう言った息抜きを謳歌できるのも平和の一つなのである。

「息抜きができるのも平和のあり方……ですか」

「何事も張り詰めていたら上手くいかないものさ。たとえば、Ｇセルフの手に乗っているアイーダ姫に気づかないで攻撃を仕掛けたパイロットとか……」

「やめてください隊長、死んでしまいます」

真っ青通り越して死にそうな顔をしてるカーヒルに、慌ててアイーダがフォローを入れる。現にこの場所でやらかしたのだからダメージも倍増だろう。思わぬ形で気落ちするカーヒルを慰めるアイーダ。側から見ればお似合いのカップルそのものだ。

それを眺めるベルリにとっては複雑な感情があった。アイーダに一目惚れ……それに近い何かを感じ取っていたベルリにとって、仲睦まじい二人の姿は少し辛いものがある。

「嫉妬か？」

ふと、何を感じ取ったのか。バララを後ろに乗せるマスク大尉がそんなことを言い出

してきた。このマスクはそういった感情も拾って視野を広げてくれる優れものなのさ、と聞いてもいない説明もしてくる。
「なにい？」
「嫉妬してるのかって聞いてるの！」
追撃に声を挟んできたノレド。マスクと幼馴染という異種タッグの問い詰めに、ベルリはうんざりした様子で天を仰ぎ、休日の市民で賑わう街中で悲鳴を上げた。
「してない！」
「嘘だ。そんな顔してた」
「顔に出ているぞ、特待生」
「してないったらしてない!!」
ギャーギャーと二足歩行のシャンクの上で喚くベルリ。ラライヤも面白がってノレドと一緒にベルリを茶化して、マスクは狼狽える特待生の無様さに満足したように高笑いして、後ろにいるバララやレイカは冷えた目でそんなカオスな光景を眺めていた。
「あら、ベルリもお年頃？」
「男の子は難しいんですよ、長官殿」
「ウィルミットでよろしくてよ、ラリーさん」
そう言って微笑むウィルミットに、ラリーは内心で思いっきり引き攣っていた。その

目には個人的な……明らかな情愛のような熱があったことに気づいてしまった。ラリーも鈍感ではない。そう言った経験はしてきているし、その熱に気づかないほど間抜けでもない。

「母さんに気に入られましたね」

タワーの施設に到着してから、ベルリが嬉しそうにそう言ってくる。彼曰く、ここまで楽しげに男性に心を開いているのはラリー相手が初めてなのだとか。

「ははは、嬉しいような、どうだろうか……」

「おや、ついに隊長も春ですか？」

「カーヒル、俺がいいって言うまでパイロットスーツでランニングな」

「勘弁してください……！」

アイーダも過去に受けたパイロットスーツランニングのことを思い出したようで顔色を悪くしていた。そんな二人を置いておいて、ラリーたちはウィルミット長官に案内されるまま、キャピタル・タワーへと足を踏み入れてゆくのだった。

第十七話　出自ではなく生き様を

キャピタル・タワー。

それは前世紀である宇宙世紀から残されていた軌道エレベータを再生させたものだ。エルライド大陸の北部、カリブ海からアマゾン川流域に接する地域、キャピタル・テリトリィの中心にあり、地上と宇宙とを結んでいる。

宇宙から得た物資を地上にもたらすことから神聖視されており、宇宙から伸びる臍の緒の終着点である地上施設ビグローバーには様々な施設が大きく四つのブロックに分かれており、クラウンの運行局やスコード教大聖堂もここにある。

タワーの運行長官であるウィルミットの案内で大聖堂に通されたところで、神聖さが漂うステンドグラスや壁画が並べられる司祭場に、老齢の男性が立っているのが見えた。

ウィルミットがその人物を見るなり首を垂れる。彼こそが、リギルド・センチュリー史上、最大級の信奉者を抱える宗教組織の法皇、ゲル・トリメデストス・ナグその人であった。

「法皇様」
「スコード、よくお戻りになられました。ウィルミット長官」
「……あれがスコード教の法皇様か」
　ウィルミットと穏やかな挨拶を交わす法皇を眺めながら、グシオン総監は怪訝な顔つきでそうつぶやく。アメリア大陸出身でスコード教から世界を解放させることを目指す彼らにとっては、キャピタル・ガードが組織された遠因である法皇の存在は良いものとはいえなかった。
　アメリアの総監であるグシオンや、その関係者がこの場にいるのか。ウィルミットからことのあらましを聞き終えた法皇は静かな声で言葉を切り出した。
「地球圏のこれまでの繁栄は、スコード教の慈悲があったからこそです」
「……法皇様は、宇宙からもたらされる脅威を知っていたのですか？スコード教の教えには、そのような文言は記載されておりません」
　我々の求める答えでは無い、そう言わんばかりに言い返すグシオン総監。隣にいるアイーダも同感という風にスコード教がフォトンバッテリーを受け取る「先」に何があるのかを問い詰めた。
「リギルド・センチュリーが何故、このような文明体系で発展できたか。それはスコード教と、宇宙と地球の臍の緒であるタワーが証明しているじゃないですか」

法皇、ゲル・トリメデストス・ナグは説く。

本質を見誤ってはならない。人類という種は過去にこの地球というゆりかごを破壊し、その数を減らし、絶滅寸前まで自ら導いた。その事実があるからこそ、スコード教が生まれ、宇宙からフォトンバッテリーが恵まれるようになったのではないか、と。

「朝が来る意味。空気に何故酸素があるのか。それを説明しますか？考えるまでもなく当たり前に享受する平和は、フォトンバッテリーによってもたらされました。何もない場所から生まれてくるものではありませんからね」

「我々は自らを宇宙に押し上げるだけの力と知恵を手にしました。ならば、キャピタルに代わってアメリアがフォトンバッテリーを管理するのも当然の帰結ではないのでしょうか？」

グシオン総監の言葉はアメリア大国の意思でもある。国の大統領であるズッキーニ・ニッキーニがそれを望んでいる以上、軍属で命令に従う義務があるグシオンに拒否権はない。そして、若者であるアイーダやクリム・ニックも、アメリアが宇宙に手を伸ばす手段を得た以上、キャピタル・タワーとスコード教、そしてその護衛であるキャピタル・ガードにフォトン・バッテリーを独占させる筋合いはないと考えている。

「その思考が危険なのです」

法皇は改めてそう言った。

「フォトンバッテリーを管理する使命をスコード教に与えたのかよく考えることです。キャピタルが国ではなく、概念として存続している意味を……」

「ふん、宗教家が台頭したから世の中が平和になったとでも言うつもりなのか？」

その言葉を遮ったのはアメリア陣営ではない。キャピタル・ガードであるウィルミットやデレンセンでもない、タワーから世界を支配しようと目論むキャピタル・アーミィのマスク大尉であった。

「マスク大尉！法皇様に失礼ですよ！」

ウィルミットの言葉にマスクの増大された感情は大きく震えた。失礼？何を馬鹿なきことを言うのか。失礼で済まない扱いを許容する世界。それを認め、安泰だの享受だのと曰う者にそう言われると筋合いはない、とマスクは顔を歪めて叫んだ。

「その前時代に虐げられ、侮蔑され、差別された者たちがいるのだ！その遺恨は時代を超えても癒えぬことはない傷として残っている！私はクンタラとして、その傷を完治させなければならないのだ！」

クンタラの出自というだけで、どれほどのチャンスを奪われ、どれだけの自由と挑戦の機会をなきものにされたか。世界の人々は言う。クンタラに生まれた者は運がないのだと。劣っているのだと。劣等種であると。

大勢の同志が虐げられているというのに、大国は宇宙の危機に目を向け、スコード教

は世界は安泰だと謳う。その全てが虐げる者の言い分に過ぎない。
「下層階級だと、失われた過去の威厳と尊厳の回復を謳う信念に……正義はないぞ。大尉」
ふと、そんな言葉が聞こえた。法皇とアメリアに向けられていた怒りは一転して、その言葉を発した者に向けられる。大義がないと断言したのは、アメリアのパイロットであり、白きローンズーを駆るラリーだった。
「……なんだと!?」
「ラリー! 言い過ぎだぞ」
マスクの下にある顔を知るデレンセンが思わず口を挟むが、その手を払い除けてラリーは怒りに身を染めるマスクを見据えた。
「いえ、言わせてもらう。マスク大尉。貴官は自分がクンタラであるからといって戦争で功績を得たいというのか?その先に何を目指す」
「何を目指す……というと?」
「得てして争いというものは目的を達成するためのツールです。それが外交交渉であれ、どうであれ。そして戦闘行為というものは目的を達成させるための最終手段です」
思わず聞き直したアイーダにラリーはそう返した。戦いというもの、闘争とは落とし所が見つからない者が取る手段にすぎない。純粋に戦いに身を委ね、焦がす者など単な

る狂人だ。アーミィという隠れ蓑にいながらクンタラのためといい拳を振り上げたマスクには望む果てがあるはずだ。

ラリーの問いに最初は息を荒げていたマスクだが、しばらくして冷静さを取り戻したのか、佇まいを直して言葉を紡いだ。

「虐げられてきた者たちへの贖罪だ」

クンタラとして踏み躙られてきた者。希望を奪われ続けた者。失意の中でも生きなければならなかった者。弱者と罵られ、下等種族と唾棄されてきた自分達の確固たる名誉と地位を取り戻すことが、マスクが功績を上げ、認められることに対する贖罪そのものだ。

彼は激情と冷徹さを抱えた矛盾そのものだった。センサーとデータファイルが内蔵されたマスクが、彼が抱えていた矛盾を大いに解き放っている。感情の赴くままにマスクは怒号のような叫びを上げた。

「我々クンタラと呼ばれた者たちの恨みと悲しみをわからない貴様たちに、我々の強さと！尊厳を示すためだ！」

スコード教の大聖堂にマスクの声が響き渡る。彼の意志は宇宙の脅威への対策でも、フォトンバッテリーとタワーを解放することでもない。虐げられられる弱者たちを導き、踏みにじってきた者たちを見返すことだけだ。

その魂の叫びを聞いたデレンセンは、呆れたようにため息をついて問い直す。
「その差別意識を覆してどうする?・アーミィの総隊長にでもなるつもりか?・」
そのデレンセンの反応こそが、この世界におけるクンタラへの価値観だった。差別意識などではない。そういったものであるという意識が根底に根付いて、深く絡みついて、こびりついて離れないのだ。クンタラ=劣等な種族という潜在意識がある以上、いくら能力が高くても、知識が豊富でも、最終的に「彼はクンタラだから」という答えに行き着く。
マスクが声を大にしたクンタラの栄誉や名誉挽回を口にしても、クンタラ以外のその他大勢は気にも留めないのだ。
「虐げられた者たちを知らず、知った口を!・」
「マスク大尉。貴方たちの境遇もまた、過去の宇宙世紀が生み出した負の遺産のひとつなのです。我々スコード教はそういった差別をなくすために……」
「それは理屈だ!・虐げられた者を生み出す身勝手な理想など!・」
「じゃあどうする。アーミィがアメリアとゴンドワンを支配して地球の覇権を握るつもりなのか?」
「それはスコード教のあり方にそぐいません!・タブー破りも甚だしい……」
マスクの言い分に法皇、グシオンも加わり混沌と化す中、ウィルミットの言葉を遮っ

てひとりの初老の男性が大聖堂の奥から姿を表した。
「失礼」
「クンパ大佐!」
バララの隣にいたレイカがすぐに飛び出してクンパ大佐と名乗った男性の腕を抱きしめた。その様子はまるで祖父に甘える孫……というより、もっと情欲的な印象をその場にいる面々に与えていた。彼はレイカの黒髪を優しく撫でてからマスクやバララを見渡してから、法皇に一礼した。
「君たちが捕虜になったと聞いて休暇を返上したのさ。法皇様、突然の拝謁、申し訳ございません」
「クンパ・ルシータ大佐。あなたは知っているのですか?ヘルメスの薔薇の設計図というものを」
調査部のクンパ・ルシータ。キャピタル・アーミィ設立に大きく関わった黒幕であり、こうやってマスクたちの前にも現れた人物。アイーダの言葉に彼は表情ひとつ変えずに訝しんだ顔つきをしていた。その目に映るのものが何なのか。ベルリは直感的だが、その目に不気味さを感じ取っていた。
「……アイーダ・スルガンさん。随分とファンタジーなものを探しておいでなのですな」
何を馬鹿な、とその場にいる全員が思った。アメリアのＭＳ開発や戦艦などの開発は

奪い合いとなっていたヘルメスの薔薇の設計図があった故のこと。
　そのデータがあったからこそ、アメリアもゴンドワンも「それが何なのか」を知らないままでもメガファウナやグリモア、アルケインを建造できたというのに、キャピタル・ガードはこの短期間でエルフ・ブルックや他の最新鋭機を次々と生み出している。宇宙戦艦までもだ。
　そんな組織の黒幕であり、裏で操っているクンパ大佐が知らぬ存ぜぬとは罷り通らない話だ。
「貴方は……！」
　思わずと言った様子でカーヒルの隣にいたアイーダがクンパ大佐に詰め寄ろうと力強く歩み出したと同時、大佐の腕にしなだれていたレイカがアイーダの前に立ち塞がった。
「大佐に手を出す人は誰であろうと許さない！」
　レイカの反応はまるで主人を守る猛獣のような野蛮さがあった。叩きつけられた敵意とプレッシャーに勇んで踏み出したアイーダは思わずたじろぐが、負けん気と立場の意地から唸り声を上げんばかりに睨んでくるレイカを真っ向から睨み返す。
　レイカの後ろにいるクンパ大佐も二人の剣呑な雰囲気に若干ひいていた。というか止めろよ、と全員が思った。

カーヒルとマスクがウィルミットが間に入って二人を引き離すといった珍子を黙って見つめていたバララが呆れた様子でつぶやく。
「あーあ。これだからお嬢様は困るんだ」
マスクの突拍子の無い言動や行動に、レイカの戦闘時の振り切れっぷりに振り回されているバララに、ラリーは思わず同情したような言葉をかける。
「……君も苦労してるんだな」
「うるさいよ」
驚いた顔をしたバララは、そっぽを向いてそう返した。割と読めない子だけど、なんだか仲良くできそうな気がすると内心で思っていると、グシオン総監が本題について口火を切ろうとした。
「それで、宇宙からの脅威というのは何時頃になって地球を侵略しに……」
「ベルリ・デレンセン大尉もいますな！」
「ケルベス教官？」
ドタドタと音を立ててケルベス率いるキャピタル・ガードが大聖堂に入ってくる。すぐさまケルベスは驚いているベルリをひっ捕まえて大聖堂の出口へと引っ張っていった。アイーダや、ラリーたちも付いてくるよう促される。
「不味いぞ、アーミィが動き出している！」

「ええ!?ほんとですか!?」
「メガファウナは見つかったんですか!?」
「まだ不確定ではあるが、勘づいてると言ったところだ」
すでにキャピタル・アーミィの小隊が新開発の機体のお披露目会を繰り上げてスクランブルに入っているという。幸い、メガファウナから来たベルリやアイーダの存在にアーミィは気づいていないので、ここからシャンクを飛ばし、エフラグで向かえば敵が動く前にメガファウナは離陸できるだろう。
その様子を見ていたマスクは、クンパ大佐に思わず噛み付いた。
「我々を返還する代わりに、アーミィは軍事行動はしないと確約しているはずだ！大佐！」
「確約はしたが、行使するとは断言していない」
「大人のやり口だな」
素知らぬフリをするクンパ大佐のやり口にグシオン総監が小さな声で罵った。今はこんなところで文句の言い合いをしている場合ではない。すぐに行動に出る必要がある。
「とりあえず、メガファウナに戻る奴らはこっちにこい！」
「ウィルミット長官」

「ええ、放っておくのはかえって危険です。任せます、デレンセン大尉」
ハッ、と答え敬礼をしたデレンセンもメガファウナに戻るメンバーに加わる。ウィルミット長官とグシオン総監はビグローバーに残ることになった。彼女には上へあがるクラウンの運行指揮という仕事がある。グシオン総監を連れて戻るにしても、危険な場所にアメリアの重要人物を連れて行くのも憚られたのだった。
「長官。ベルリくんは任せてください」
去り際に、ラリーはウィルミットにそう約束した。本来なら彼は安全なこの場に残すべきだろうが、Gセルフの重要なファクターであり、なおかつ彼という存在がメガファウナに必要不可欠ということもある。ベルリ自身も自らメガファウナに戻るつもり満々ということもあるので、その面倒はラリーが請け負うという約束という側面もあった。
敬礼を打つラリーに、ウィルミットは嫌な顔ひとつせずむしろ微笑んで息子を頼みますと頭を下げた。
「ええ、貴方になら任せましょう」
ベルリ曰く、ウィルミットに気に入られているというのは嘘じゃないのだろう。なんとも言えない信頼感にラリーは苦笑しながらも頷いてウィルミットと別れを済ました。
「全速力でメガファウナに帰投だ!!」

「まて、白い機体のパイロット」
大聖堂から出て大階段を降りる間際、後を追ってきたマスクがラリーを呼び止めた。お前を倒すという宣言か、助けられた借りは戦いで返してもらうとか、そんなことを言われるのかと振り返ると、マスクは真剣な声色で言葉を続けた。
「さっきの問いの答えだ。私個人の地位や名誉など、どうでもいい」
たしかに自分自身の進退が、部下であるクンタラの人々に大いに影響を及ぼすこともあるだろうと、マスクはつぶやく。しかしそれは個人の欲であり、自分がマスクをつけてまで戦うことを決意した信念にそぐわなかった。
「だが、私の部下や、今世界中で虐げられるクンタラである者たちにとって、慰めではない希望になりたいのだ」
それこそがマスクの……その下にある素顔の主の、本当の願いであり、夢だった。
クンタラという、過去に食人の糧となった先祖を馬鹿にされないため。その踏みつけられた者たちの魂の癒しのため。彼はマスクを被り、戦士としての希望になる夢を胸に戦うことを選んだのだ。
空を照らすサーチライトと、ビグローバーに鳴り響く警報が響く。ほんの少しの間、二人の間に沈黙が降りたが、ラリーは大階段を降りていた体を振り向かせた。
そして、マスクに対して敬礼を打った。

「マスク大尉。自分は、その在り方を示さんとする貴官の志、尊敬する。……君の生まれがクンタラであるなど関係ない。君は立派な男で、戦士だ」

マスクの足掻きが、遠い過去で戦って、戦って、戦い抜いた果てで分かり合うことができた友の何かを彷彿とさせたのだ。

彼もまた、自らの生まれを呪い、短く定められた運命を呪い、世界という歪みに運命を狂わされた者だった。そんな彼も、子に恵まれ、最愛の女性と添い遂げ、そして子の門出を目にしてから直ぐにこの世を去っていった。

死に際に彼はこういった。「君のおかげで、私の世界はマシになった」と。

出会う以前の彼は、自らの運命を呪いながらもその未来を諦めていた。絶望を抱えて生きていた。だが、マスクはその絶望から立ちあがろうと必死に戦っている。そこから逃げずに自らの手で未来をマシにしようと足掻いているのだ。

その姿は誰がなんと言おうと、高潔で、孤高で、そして素晴らしい信念の光を放つ。

だからこそ、ラリーはマスクの言葉に敬意を払ったのだ。彼の生まれがなんであろうが関係ない。

マスク大尉という彼の思いが、生き様が全てだった。

「できれば、戦場では会いたくないな。君のような男が死に急ぐのは惜しい。だから生きろよ！」

そう言葉をかけてラリーは階段を降りると、デレンセンが乗るシャンクへと飛び乗った。

「……マスク大尉?」

しばらく呆然と去ってゆくシャンクの背中を見つめていたマスクに、後を追ってきたバララが声をかけた。

「……なんでもない」

マスクはバララに振り返ることなくそう言って、そのままアーミィの拠点へと足を向けた。振り返ったとき、バララには微かに見えていた。

彼のマスクの隙間からこぼれ落ちていた涙を。

第十八話　ウーシァ、強襲

「Gセルフとラライヤ・マンディを当方に引き渡せと命令しているのだ！」
メガファウナは危機に陥っていた。
ベッカー・シャダムが乗るキャピタル・アーミィの新型量産機「ウーシァ」のビームライフルの銃口が、ドニエル艦長たちがいるブリッジへ向けていたのだ。
ラリーやデレンセンよりも先に戻っていたアイーダは、カーヒルやドニエル艦長の静止を聞かずにアルケインで出撃していたが、他のアーミィの機体によって進路を妨げられている。
ビームライフルの銃口に緑光が灯り、ドニエル艦長たちが悲鳴のような声を上げた瞬間、ウーシァの真下から白い閃光がウーシァごとはるか上空へと持ち上げた。
「キャピタル・アーミィはどうしてそうも命令口調で！」
ギリギリで間に合った。ラリーは愛機のローンズーの出力を上げて、アーミィの新型をメガファウナの懐から一気に遠ざけてゆく。突然の攻撃に透明のエアバックに身体

を支えられながらベッカーは緑色のカメラアイを光らせるローンズーを睨みつけた。
「白い機体……デレンセンを落とした奴かぁ!!」
「アイーダ様は後退!あとは俺とデレンセンでやる!カーヒルはさっさと姫様のフォローをしなさいよ!」
ラリーのローンズーに続き、デレンセンの操るモンテーロも出撃し、カットシーや残りのウーシァ相手に空戦で立ち回ってゆく。ビームの応酬の中、カーヒルのグリモアに誘導されてメガファウナの護衛に回ったアイーダは、接触回線を切ったのちにコンソールパネルに力なく拳を叩きつけた。
「す、すみません……役立たずの私……!」
狙撃も撃墜も、何もできなかった。静止を振り切ってまで出たというのにこの体たらくでは、自分は何も成長できていないのではと思えるほど、アイーダを追い詰めてゆく。悔し涙を流す彼女の視線の先では、ウーシァによる攻撃を華麗に捌くデレンセンとラリーの姿があった。
「キャピタル・アーミィはウーシァまで量産をしていたのか……チィッ」
ウィルミットからの要請でケルベスたちもメガファウナの警備に当たっていたが、アーミィが建造中だったウーシァをこんな早く実戦投入してくるなんて予想としてなかった。

『なんでレックスがアメリアの船にいるんだ!?』

密林をホバーで軽快に逃げてゆくレックスを追うカットシーを、横合いからラリーがシールドから体当たりをして進路を強制的に変えた。駄賃だと言わんばかりに翼をビームライフルで撃ち抜かれたカットシーを庇うベッカーは、面白いと好戦的な笑みを浮かべた。

「白い機体は俺がやる!デレンセンの弔い合戦だ……奴は……奴は、いいパイロットだった!」

ビームライフルの応酬。閃光がビグローバー周辺に広がる広大な密林地帯の上空を走り、ラリーの駆るローンズーは肩に備わるスラスターを軽快に吹かして迫るベッカーの追撃を躱した。

「ラリー!」

「来るな、デレンセン!こいつの狙いは俺だ!お前はメガファウナの警戒を……チッ!こいつ、できるな!」

応援に来ようとするデレンセンのモンテーロに光通信を発しながら、ビームの光を掻い潜るラリーは、その誘導の巧さに思わず舌を打った。

ＭＳの白兵戦のセオリーは自らの得意な間合いに相手を誘き出すところから始まる。ビームライフルは遠距離から敵を屠る役割を果たすと同時に、敵の選択肢を狭め、躱し

ていると錯覚させながら退路を断つという戦術的な扱いも可能とする代物だ。
デッカーは新型のウーシァを任せられるほどの腕前。その激情的な口ぶりに似合わず、彼の闘い方は理にかなった側面が強いとラリーには感じられた。
「惚れたぜぇ、俺はこのウーシァに惚れたァッ!」
ライフルとは逆の手にビームサーベルを構えてラリーのローンズーに体当たりに等しい突貫を仕掛けるデッカー。ウーシァの自重に任せた落下で、密林の木々を薙ぎ倒しながら二機は白兵戦へともつれ込んでゆく。
「離れろよ……!」
推力による力任せな押しにラリーは蹴りを入れて距離を取る。密林地帯の沼地に足を沈めながらも、すかさずサーベルを振りかざして襲いくるウーシァ。前のめりな奴だな!フットペダルを踏み込み後ろへ飛び退くと同時、ローンズーのメインカメラのギリギリをウーシァのビームサーベルが横切った。
「躱したのか?俺の一撃……ッ!?」
驚愕と同時にベッカーの胃が裏返った。何が起こったのか理解できたのは、自分の機体が泥沼に大の字になった時だ。ベッカーの放ったビームサーベルの一閃の隙をついて、伸びたウーシァの腕を相手が掴み、そのまま投げ飛ばしたのだ。
「ウーシァはぁ!その程度では終わらん!!」

トドメを刺そうとビームライフルを向けたラリーめがけて、デッカーは雄叫びと共にタックルを繰り出し、再び大木を薙ぎ倒してローンズーを突き飛ばした。
「野郎っ!!」
地面に倒れる間際、スロットルを引き込み背面スラスターの出力を前回にしたローンズーは、背面飛行をするかの如く密林地帯を飛翔し、そのまま上空へと機体を引っ張り上げた。無理やり機体を起こした結果、ラリーの肉体に強烈なGがのしかかるが、そんなことを気にしている場合じゃない。
「……ハァッ!その機体が宇宙用の機体だってことは!」
「飛んだ!?こいつ、姿勢が整う前に……!」
そのままラリーは機体を反転させ、まだ地に膝をついているウーシァめがけて直滑降に攻撃を仕掛けた。ウーシァは小回りが効く分、反応についていけない。そう踏んだ上での戦略だったが、ベッカーは怯むことなく応じて魅せる。
「ビームサーベルでしょおがぁ!」
両の手にビームサーベルを持ち、それを高速回転させて擬似的なIフィールドを形成。その力場に斬りかかったラリーのビームサーベルも過剰反応して、ローンズーごとビームサーベルが吹き飛ばされたのだ。
「防いだ!?やるな、アーミィのパイロット!」

ビームサーベルを回転させて擬似的にIフィールド力場を生じさせた機転は賞賛に値する。ラリーはデレンセン並みの好敵手を前に、ニヤリと笑みを浮かべた。パイロットは皆、強さを求める者。素直に敵を称賛するラリーに、ベッカーもウーシァの性能の高さと戦いの高揚感にテンションが上がりぱなしだ。

「ふはははは！流石は白い機体だ！この俺をここまで手こずリャ……ッ!?」

再び戦いを再開しようとした瞬間、ジャングルの木々を吹き飛ばして現れた緑色の塊がローンズーを横切って、無防備なウーシァのボディに直撃。

次いで、その真横の木々の合間から出てきたのは、ベルリの乗るGセルフだった。

「いっちゃえええ!!」

ベルリの絶叫と共に高トルクパックから受けた恩恵のまま、激突に怯んだままのウーシァの顔面をGセルフは華麗に殴り抜いた。エアバックに包まれ吹き飛ぶベッカーへ追いつくと今度は蹴り。散々な目に遭うベッカーのウーシァに一部始終を見ていたラリーは思わず口を手で覆った。

蹴りで吹き飛んだウーシァはバラバラと部品をこぼしながら何回転か地面を転がり、最終的な沼地に頭から突き刺さる。ブクブクと音を立てて頭から沈んでゆく様は哀れみすら覚えさせるものだった。

「無事ですか、ラリーさん！」

「あ、あぁ、助かったよ。……その、ゴツいアーマーは使えたのか」
横に着地して近距離のレーザー通信で話しかけてきたベルリに引き気味に応じるラリー。たしか、ラリーとデレンセンがメガファウナに到着した頃は、メカニックのハッパが高トルクパックを接続しようと躍起になっていたのだが、よもや戦闘中に間に合わせるとは思っていなかった。
「高トルクパックのおかげです」
そう言ってにっこりと笑うベルリに、ラリーは乾いた笑いで返し、沼へ沈んでいった好敵手に心の中で敬礼を打って、ベルリと共にメガファウナへ帰投するのだった。